

戸田市文化財調査報告Ⅱ

鍛冶谷・新田口遺跡

方形周溝墓群の調査

埼玉県戸田市教育委員会

昭和43年



序 文

教 育 長 岡 田 弘

戸田の地がにわかには歴史づいたのは、まだここ数年来のことにすぎません。例えば、室町時代にあったという蔵城の問題一つをとってみても、よもやその歴然たる遺構「塙構」（本文3ページに載る）が戸田市内の「元蔵」で発見されようなどとは思ひもよらぬところでした。そして、よもや、その「塙構」や「鍛冶谷」「新田口」から、弥生式時代ないし、その近くにまでさかのぼった生々しい歴史の数ページが発見されようなどとは、これまた夢想だもしなかつたところです。

そのころは、まだ浅い海の底に違いない、と誰もが単純に思いこんでいた地域であったこと、しかも、姿を現わしたものは、近時、学界注視の的になっている「方形周溝墓」であったこと、等々、報告書を読めば読むほど、いよいよ今回の発掘事業の意義の大きかったことに驚かされるのです。

幸い、野口市長の英断と、市議会はじめ、関係各位からの絶大なるご協力をいただき、また、県当局、ことに陣頭指揮に当られた塩野 博先生のご指導よろしきを得て、二次にわたる発掘調査をつつがなく終了し、完結篇としての報告書第Ⅱ輯を上梓する運びとなり、今日は譬えようもない嬉しさと感謝の気持で一杯です。

今や躍進の一途をたどる戸田市ですが、それだけに郷土の歴史にたいする市民各位の関心は、切実なまでに高まってきております。

本報告書の完成を期として、一時でも早く、このような市民のご要望に応えうるだけの全時代を通ずる郷土史の解明に力を注ぐことをお約束申しあげ、序とします。

昭 和 44 年 3 月

例 言

1. 本書は、昭和42年8月6日～12日、昭和43年7月26日～8月2日の2次にわたって発掘調査した。戸田市上戸田所在の鍛冶谷・新田口遺跡の報告である。
2. 昭和42年度に実施した調査については、すでに概報を、戸田市文化財調査報告Ⅰとして発刊したが、本書は遺跡の性質上、1次・2次調査を合せて報告した。したがって、一部に既書と同一の文章もある。
3. 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり実施した。
4. 発掘調査の担当者は、次の通りである。

柳田敏司（県教育局社会教育課専門員兼文化財係長）

塩野 博（埼玉会館郷土資料室）

5. 出土品の整理は、担当者の指導で、発掘参加者が行なった。
6. 本書の報告は、塩野博が執筆し、出土遺物については、伊藤和彦が行ない、塩野が加除筆した。したがって、その責、および本報告書の責は、塩野が負うものである。
7. 巻末の方形周溝墓地名表、および分布図は、伊藤和彦が作成したものである。
8. 本書の編集は、塩野・伊藤両氏と長谷川忠信（戸田市教育委員会事務局）が当たった。
9. 発掘調査および整理参加者は次の通りである。

（国学院大学生）伊藤和彦，下沢公明，高橋一夫，本間信昭，今泉泰之，佐藤正雄，溝本利保，齋藤和子，横尾康子，三橋景子，安井令子，門山礼，千葉陽久，熊坂英世，田中利功，（立教大学生）吉田鉄男，（埼玉大学生）柿沼幹夫，（東洋大学生）内田啓人，（県遺跡調査会）増田逸朗

（戸田市長）野口政吉（市会議員）飯田良雄（新田口町会長）駒崎染三郎（鍛冶谷町会長）榎本武雄（市文化財保護委員長）岡田恒三郎（社教委員長）日坂盛造（美笹中）深沢悠紀雄（戸田中）天野清志（東中）駒崎実（蕨東中）潮地ルミ（戸田東小）江上邦泰（戸田高）高山一 渡瀬昌忠（蕨高）羽柳伸一 栗原 司（浦和一女）宮内正勝 鍛冶谷婦人会 新田口婦人会 榎本 清 榎本忠次 榎本一夫 金子弘 岸沢真理子（教育長）岡田弘（教育委員会）植松巳代三 石田英三 奥墨修一 長谷川忠信 青木登志子 鮫島大三郎 稲垣賢一 松井清 岩谷務

鍛冶谷・新田口遺跡 目次

序文

教育長 岡田 弘

例言

第1章	序説	3
第1節	鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査の経緯	3
第2節	鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査の経過	4
(1)	第1次調査の経過	4
(2)	第2次調査の経過	6
第2章	遺跡の位置と環境	9
第1節	鍛冶谷・新田口遺跡の位置	9
第2節	鍛冶谷・新田口遺跡の環境	11
第3章	鍛冶谷・新田口遺跡	12
第1節	鍛冶谷・新田口遺跡の概観	12
第2節	鍛冶谷（A地区）の遺構	13
(1)	第1号方形周溝墓	13
(2)	第2号方形周溝墓	15
(3)	第3号方形周溝墓	15
(4)	第4号方形周溝墓	15
(5)	第5号方形周溝墓	17
第3節	新田口（B地区）の遺構	18
(1)	第1号方形周溝墓	18
(2)	第2号方形周溝墓	21
(3)	第3号方形周溝墓	21
(4)	第4号方形周溝墓	22
(5)	第5号方形周溝墓	22
(6)	第6号方形周溝墓	24
(7)	第7号（方形）周溝	24
(8)	第1号住居址	25

第 4 章	鍛冶谷・新田口遺跡の遺物	26
第 1 節	鍛冶谷出土の遺物	26
(1)	第 1 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	26
(2)	第 2 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	28
(3)	第 4 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	28
(4)	第 5 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	28
第 2 節	新田口出土の遺物	29
(1)	第 1 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	29
(2)	第 1 号方形周溝墓, 溝内出土の管玉	37
(3)	第 2 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	38
(4)	第 3 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	39
(5)	第 4 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	40
(6)	第 5 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	42
(7)	第 6 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	42
(8)	第 7 号方形周溝墓, 溝内出土の土器	42
(9)	鍛冶谷・新田口方形周溝墓溝内出土の土器拓影	43
第 3 節	新田口発掘地域外, 溝内発見の遺物	45
(1)	新田口 A 溝, 溝内発見の土器	45
(2)	新田口 B 溝, 溝内発見の土器	46
第 4 節	新田口第 1 号住居址出土の土器	46
第 5 章	鍛冶谷・新田口遺跡の提起する問題	48
第 1 節	鍛冶谷・新田口遺跡における方形周溝墓の分布	48
第 2 節	鍛冶谷・新田口遺跡における方形周溝墓の形態	50
第 3 節	鍛冶谷・新田口遺跡における方形周溝墓の出土遺物	51
第 4 節	鍛冶谷・新田口遺跡における 方形周溝墓の出現とその終末	54

図 版 目 次

図 版 一 鍛冶谷・新田口遺跡の景観

1. 鍛冶谷・新田口遺跡の遠景
2. 鍛冶谷・新田口遺跡の近景

図 版 二 鍛冶谷の遺構 I

1. 第1・2・3号方形周溝墓
2. 第1号方形周溝墓（南方から）

図 版 三 鍛冶谷の遺構 II

1. 第1号方形周溝墓南溝内土器出土状態
2. 第1号方形周溝墓南溝内土器出土状態（近写）

図 版 四 鍛冶谷の遺構 III

1. 第2号方形周溝墓
2. 第3号方形周溝墓

図 版 五 鍛冶谷の遺構 IV

1. 第4号方形周溝墓（北方から）
2. 第4号方形周溝墓（西方から）

図 版 六 鍛冶谷の遺構 V

1. 第5号方形周溝墓（南方から）
2. 第5号方形周溝墓（西方から）

図 版 七 新田口の遺構 I

1. 第1号方形周溝墓（南方から）
2. 第1号方形周溝墓西溝溝底

図 版 八 新田口の遺構 II

1. 第1号方形周溝墓西溝断面
2. 第1号方形周溝墓溝内高坏出土状態

図 版 九 新田口の遺構 III

1. 第1号方形周溝墓溝内台付甕形土器出土状態
2. 第1号方形周溝墓溝内壺形土器出土状態

図版 十 新田口の遺構 IV

1. 第1号方形周溝墓溝内管玉出土状態
2. 第1号方形周溝墓溝内器台出土状態

図版 十一 新田口の遺構 V

1. 第1号(左)と第2号(右)方形周溝墓の断面
2. 第2号方形周溝墓(右)

図版 十二 新田口の遺構 VI

1. 第3号・5号・6号方形周溝墓の切り合い
2. 第3号と第6号方形周溝墓の切り合い

図版 十三 新田口の遺構 VII

1. 第4号方形周溝墓
2. 第4号方形周溝墓溝内土器出土状態

図版 十四 新田口の遺構 VIII

1. 第1号住居址
2. 第1号住居址コシキ形土器出土状態

図版 十五 鍛冶谷・新田口遺跡出土の遺物 I

- 1・2 鍛冶谷第1号方形周溝墓出土土器
- 3~6 新田口第1号方形周溝墓出土土器

図版 十六 鍛冶谷・新田口遺跡出土の遺物 II

- 1~7 新田口第1号方形周溝墓出土土器
- 8 新田口第2号方形周溝墓出土土器

図版 十七 鍛冶谷・新田口遺跡出土の遺物 III

- 1~5 新田口第1号住居址出土土器
- 6 新田口A溝発見土器
- 7 新田口第1号方形周溝墓溝内出土管玉

挿 図 目 次

- 第 1 図 発掘調査を視察する戸田市野口市長 (第 1 次調査)
- 第 2 図 鍛冶谷第 5 号方形周溝墓発掘風景 (第 2 次調査)
- 第 3 図 鍛冶谷・新田口遺跡 (矢印) とその周辺の遺跡
- 第 4 図 鍛冶谷・新田口遺跡発見遺構全測図
- 第 5 図 鍛冶谷第 1・2・3 号方形周溝墓実測図
- 第 6 図 鍛冶谷第 4 号方形周溝墓実測図
- 第 7 図 鍛冶谷第 4 号方形周溝墓周溝断面図
- 第 8 図 鍛冶谷第 5 号方形周溝墓実測図
- 第 9 図 鍛冶谷第 5 号方形周溝墓周溝断面図
- 第 10 図 新田口第 1・2 号方形周溝墓実測図
- 第 11 図 新田口第 1・2 号方形周溝墓周溝断面図
- 第 12 図 新田口第 3・4・5・6・7 号方形周溝墓実測図
- 第 13 図 新田口第 3・4・5・6号方形周溝墓周溝断面図
- 第 14 図 新田口第 1 号住居址実測図
- 第 15 図 鍛冶谷第 1・2 号方形周溝墓出土の土器 [1号 (1~5)・2号 (6)]
- 第 16 図 鍛冶谷第 4・5 号方形周溝墓出土の土器 [4号 (1~3)・5号 (4・5)]
- 第 17 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器
- 第 18 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器
- 第 19 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器
- 第 20 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器
- 第 21 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の管玉
- 第 22 図 新田口第 2・3 号方形周溝墓出土の土器 [2号 (1~8)・3号 (9~17)]

第 23 図 新田口第 4・5・6・7 号方形周溝及び A 溝・B 溝出土の土器

[4号(1~7)・5号(8~10)・6号(11~14)・7号(15~17)・A溝(18・19)・B溝(20・21)]

第 24 図 鍛冶谷第 1・2号, 新田口第 1・2・4・5 号方形周溝墓出土の土器拓影

[鍛1号(1・2)・鍛2号(3・4)・新1号(5~16)・新2号(17・18)・新4号(19)・新5号(20)]

第 25 図 新田口第 1 号住居址出土の土器

附表 1 方形周溝墓発見遺跡地名及び遺跡分析表(1~3)

附表 2 方形周溝墓発見遺跡分布図

鍛冶谷・新田口遺跡

方形周溝墓群の調査



第 1 章 序 説

第 1 節 鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査の経緯

埼玉県の南部，ことに戸田市は荒川低地帯に位置し，地理学や歴史学上，大いに興味をもたれている。しかし，この低地にいつから人々の生活が始まったかについては，資料の不足から明らかにされていなかった。

ところが，この未開発分野の資料の一端を補うかのごとき一大発見があった。それは，戸田市上戸田に於ける鍛冶谷遺跡の発見である。遺跡発見の経緯については，大方周知のことであるが，昭和42年4月25日，戸田市上戸田1058番地，榎本 清氏宅の畑に，鯉のぼりを立てる準備が行なわれていた。この作業に従事していた，榎本武雄氏のエンピの先に一片の土器片がついてきた。氏は，郷土史に大変興味をもっており，さっそく，この発見を戸田市教育委員会に連絡した。

戸田市内で，土器が発見された事実は，戸田市のなりたちを考えるうえで，どうしても見逃せないことである。また，この年に戸田市文化財保護条例ができて以来，はじめてのことであり，教育長以下，市教育委員会の職員をはじめ，戸田市文化財保護委員長岡田恒三郎氏が，以後の作業を慎重に見守った。

この日のうちに，塩野に連絡があり，急いで現場に赴いた。発見された土器片は，すでに榎本氏により水洗され，整理されていた。この土器片は，2個体分あり，南関東地方の編年で云う弥生時代後期中葉の弥生町式の典型的な土器であった。これまで，戸田市においては，弥生時代の遺物が発見されるとは考えられていなかっただけに，これらの土器が，いかなる遺構から出土するか，また，当時の地形はどうであったのだろうか，考古学的な解明が要求された。

その後，数日して，同市壙構から，先に鍛冶谷町から発見された土器と同じ時期（弥生町期）の大きな壺形土器が発見され，市教育委員会事務局に届けられた。

戸田市教育委員会では，これら弥生時代の土器の発見を重視し，まず，鍛冶谷町の土器出土地点を中心にして，徹底的に，この遺跡の性格を明らかにすべく，慎重に発掘調査の計画をたてた。

発掘調査は，柳田敏司，塩野 博が担当者となり，昭和42年8月6日～11日（第1次調査），昭和43年7月26日～8月2日（第2次調査）の二期に分けて行なった。

第 2 節 鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査の経過

(1) 第 1 次調査の経過 (第 1 図)

昭和42年7月26日 戸田市教育委員会教育長は、戸田市中央公民館に、同市文化財保護委員・地主・地元町内会長（鍛冶谷町）・発掘協力者（県立蕨高・県立戸田高）の代表を集め、鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査担当者（塩野 博）を中心にして、発掘調査の打合せ会を開催した。

8月6日（晴）朝から、じりじりと蒸し暑い日である。午前9時、担当者塩野 博ほか国学院大生、発掘現場に到着。

10時から、戸田市教育委員会教育長・地元選出市議・文化財保護委員・地主・地元町内会長・発掘協力者及び同市教育委員会社会教育課職員によって鍬入式を挙行了した。

午後から、発掘予定地区に、東西25m、幅2mのトレンチ3本を設定し、それぞれ北側から1・2・3トレンチと命名し、発掘調査を開始した。

また、本日は、塩野が、発掘遺跡周辺の遠景写真撮影。伊藤らは、現場付近の表面採集、その後遺跡の全体測量を行った。

8月7日（晴）前日に引きつづき、遺構調査を行った。その結果、表土下20cmの所で、やや青味がかかった黒色土に当たった。さらに、地表面から60cmで基盤である黄褐色粘土層上面に達した。この土層の、1・2トレンチ西側で、幅約2mの溝状遺構が発見された。またトレンチ各所で溝状遺構が発見されたので、発掘調査地域も狭いことなので、これら溝状遺構の性格をみるために拡張しつつ、調査区全面を基盤まで現出する作業を終日行なった。

この発掘調査区の土は、遺跡が、自然堤防上に位置している為、覆土は硬く、思うように作業は、はかどらなかつた。

8月8日（晴）午前中で、調査区全面の排土が終る。その結果、方形に囲る溝状遺構3か所、南東隅に溝状遺構の一部を確認したが、道路で切断されていた。また、調査前に発見された弥生町期の壺形土器は、溝の中から出土したことも判明した。

午後から、西側の方形に囲る溝を第1号周溝、その内側の幅の狭い溝を第3号周溝、東側の周溝を第2号周溝と命名し、溝内作業に取りかかった。

一方、遺跡の分布範囲を知るために、公園内（新田口）に、長さ20m、幅2mのトレンチを2本東西に設定し遺構の探査を始めた。

8月9日(晴)はじめの調査区をA地区(鍛冶谷)、公園内をB地区(新田口)とした。A地区第1周溝南側の溝底から壺形土器が、ほぼ完形で横転して出土し、その底部は穿孔されていた。この土器発見以来、調査参加者の目は輝き、作業の進行も速度をましてきた。この溝状遺構は、最近注目されている方形周溝墓であることが判明した。



第1図 発掘調査を視察する戸田市 野口市長(第1次調査)

B地区(新田口)においては、

1・2号トレンチの東側で溝状遺構が確認され、その部分を南北に拡張した結果、北側でコーナー部が確認され、これもA地区(鍛冶谷)と同様の遺構であると推定された。そこで、これをB地区(新田口)第1号方形周溝墓とした。さらに、トレンチ南側でも溝状遺構が確認された。これを第2号方形周溝とした。また、トレンチ西方でも溝状遺構が検出された。これらの結果から、この地区には、かなり広い範囲に遺構が分布していることが判明した。

なお、本日は午後から、市長、市会議員、文化財保護委員らの視察もあり、また、NHKをはじめ、報道関係者も遺跡をおとずれた。

8月10日(晴)A地区(鍛冶谷)第3号方形周溝を完掘、第1号方形周溝もほぼ全容を表わしたが、あいにく、北側が宅地の為、調査をすることができなかった。また、第2号周溝も、北西コーナー部が、井戸の堀により攪乱されていた。

B地区(新田口)は、第1号方形周溝内から、完形の高坏が出土し、また、数多くの土器片が溝内から検出された。

また、トレンチ西隅に、竪穴遺構を発見し、覆土から小型台付甕や、若干の土師器破片が発見された。

8月11日(晴)A地区(鍛冶谷)の遺構は、ほぼ完掘し、実測を開始した。

B地区(新田口)の周溝も調査範囲内を完掘し、周溝が4基、竪穴住居址1軒が確認された。

午前中、A・B両地区の各種測量を完了、午後から写真撮影を行ない、午後3時過ぎに全調査を完了した。

またB地区(新田口)の調査は、あくまで試掘を行っていたのであり、全体の現出は、竪穴遺構のみにて、遺憾ながら溝状遺構については、次回の調査にゆずることにした。

終了後、市長をはじめ、教育長、市会議員、地元協力者出席のもとに、調査報告会が開かれた。

(2) 第2次調査の経過 (第2図)

43年7月26日(晴ときどき曇)午前9時、発掘現場「鍛冶谷・新田口遺跡」に全員集合。戸田市助役齋藤純忠、同市教育委員会教育長岡田 弘 のあいさつがあり、発掘担当者塩野 博から、第1次調査の概要、第2次調査の進め方について説明がある。

今回の調査は、第1次調査で、鍛冶谷(A地区)で方形周溝墓3基を調査したので、その続きをみるため、南側に残されている雑草地と、4基の方形周溝墓の確認と、住居址を発見した新田口(B地区)の公園内の2地区である。全体での集合が終り、それぞれの地区に大学生(国学院大)を中心として班分けを行ない、それぞれの地区で発掘の準備を進めた。

鍛冶谷(A地区)は、発掘予定地区の南側を東西に走っている6m道路に沿って、36m×1.50mのトレンチを1.5m間隔で3本設定し、一番南側のトレンチから1・2・3トレンチとした。

まず、雑草を刈り、1・2トレンチから掘り始めた。表土は、やや軟かであるが、第2層目の黒褐色砂質粘土は硬くしまり、参加した中学生の力では無理な仕事であった。本日は、1トレンチの第2層目を掘り、第2トレンチは表土はがして終った。

両トレンチとも出土遺物は皆無であった。

新田口(B地区)の調査は、第1次調査時に入れた第1・2トレンチに平行して、新たに25m×1.5mのトレンチを設定した。他に、第1次調査で確認した第1号方形周溝墓及び第2・第3号方形周溝墓を再発見し、その周囲の遺構をも発見調査する計画で第1次調査の実測図を基にして、幅4mの第4・5トレンチを第3トレンチに直角に、また第1号方形周溝墓の東溝を発見するために、幅2mの第6トレンチを設定した。

第3トレンチは、東から5mを1区として5区に分けて調査を進めた。その結果、2・4・5区で地盤の黄褐色粘土層を掘り込んだと思われる溝状に酸化鉄を含んだ赤褐色土がたまっているところが発見された。そこで、さっそく、第3トレンチ2区と3区を北側に拡張した。なお本日2・4区から発見された遺物は、五領期の壺形土器の破片、及び台付甕形土器の破片であった。

7月27日(曇ときどき雨) 台風の影響により、時折り強く降る雨について調査を進めた。

鍛冶谷(A地区)では、昨日調査した1・2トレンチ内を整理した結果、両トレンチ西寄りに、基盤の黄褐色粘土層を切っている二本の平行した溝状の遺構が発見されたので、急ぎにその範囲の拡張をはじめた。トレンチ内にかかった溝からは土師器の小片が数片出土した。なお、この溝状遺構は、方形周溝墓と思われる。

この作業に並行して、第3トレンチの表土をはぐ作業も開始された。

新田口(B地区)の調査は、昨日にひきつづき、3トレンチ2区と3区の拡張作業を続行し、そこで発見された遺構は、幅約70cmの溝状遺構であることを確認、これを第4号周溝と称し、この溝を現出すべき拡張作業を続行した。この拡張区の上層からは、国分期と思われる土師器の細片が出土したが、遺構は発見できなかった。また、溝状遺構の覆土上部から五領期と思われる小型広口壺

形土器をはじめ、土師器の小片が多量に出土し、また溝内からも、同時期の土師器が一括出土した。一方、第1次調査で確認した、第1号及び第2号方形周溝墓の調査を行なっている第4トレンチでは、昨年調査した部分を現出し、さらに北コーナーも発見することができた。また、第3号方形周溝の調査を進めている第5トレンチでは、新たに溝状遺構2か所を発見した。その一つを第5号方形周溝とした。これは、第3号方形周溝と第4号方形周溝に切られていると思われる。また、他の一つを6号方形周溝と称した。これは第3号方形周溝を切っているようである。これらの切り合い関係は、明日精査し、セクションを取り、明確にする予定である。

なお、今日昼休みに新聞記者会見があった。

7月28日（雨のち曇） 午前中、台風の余波をうけ、時おり大粒の雨が降り、作業を中止し、宿舎にて今日までの整理、及び、これからの調査の進め方について話し合う。

午後、雨も小降りになり、作業を続行することができる状態になった。このような不安定な空模様にもかかわらず、戸田高・蔵高・戸田中の生徒数人が現場にきてくれた。しかし、調査員が極めて少ないため、現在、作業の遅れている新田口第1号周溝墓の調査に全員が従事した。

1トレンチを北側に拡張する。その結果、現地表下約45cm下に、基盤の黄褐色粘土を発見、拡張区北端に西コーナーを確認した。しかし、この附近、時に公園の鉄柵際から東側の鉄柵に沿い幅約1.50m厚さ7～15cmに黄白色の粘土層が見られた。この粘土層からは遺物の出土はないが、人為的な遺構とは考えられない。しかし本日の調査によって第1号方形周溝墓の外形がしだいに明らかになった。遺物は、西溝の上層から数点発見されたが、この遺物は明日とりあげる予定。

7月29日（晴ときどき曇） 心配された台風もどうやら日本海に去り、時おり小雨が降る程度で最良のコンディションであった。

本日の鍛冶谷の調査は、第4号方形周溝の現出と第3トレンチを完掘することであった。

第3トレンチで、第4号方形周溝の周溝を一部発見したが、まだ北側に拡張しなければならない。また、3トレンチ東方で、新たに、周溝を発見した。第2トレンチの調査では、この周溝は発見されていないので、コーナー部に近いとみて、南側に拡張、その結果コーナーを発見することができた。そこで、これを鍛冶谷第5号方形周溝と称した。

新田口の調査では、第1号方形周溝墓の南側半分の表土剝ぎと、西溝の未確認の壁を追う作業と第4号方形周溝の続きを探查した。一方、3号と6号の切り合い部の調査も進んだ。第3号方形周溝は第1号方形周溝墓とだいぶ形が違っているように感じられた。

7月30日（晴） ひさしぶりで朝から蒸し暑い日となった。

鍛冶谷（A地区）の調査は、第4号方形周溝と第5号方形周溝のプランの現出に努力した。第4号方形周溝の調査は、1・2・3トレンチに現われた溝をおって、それぞれのトレンチ西側を北へ拡張した。溝は幅1.20m前後で一応囲る。拡張区の西側に、第4号方形周溝と直行する溝らしいものがあったが、この溝と第4号方形周溝との関係は現在不明である。第5号方形周溝は拡張作業を

続けた結果、本日は、南溝及び東西のコーナーが発見された。

新田口（B地区）の調査は、第1号方形周溝墓のプランがつかめたので、溝内調査に移る。この溝内からは遺物が多く発見される。特に西溝からは、底部穿孔土器（焼成前）底部や、壺形土器などが出土した。また北溝の上層から、碧玉製管玉1個と、器台形土器が出土した。第



第2図 鍛冶谷第5号方形周溝墓発掘風景（第2次調査）

3・4・5・6号方形周溝は互いに切り合っているため、慎重に調査を進めた。その結果、おおよその検討が付きだした。すなわち、第5号方形周溝を4号と3号方形周溝が切っている。さらに3号は6号に切られていることが明瞭になってきた。

7月31日（曇ときどき晴） 鍛冶谷（A地区）では、第4号方形周溝のプランを確認した。この周溝は、隅が丸く、一辺一辺がやや外側に張っている。したがって円形に近い。第5号方形周溝の調査は、プランを確かめるため、3トレンチを北へ拡張した。

新田口（B地区）での調査は、昨日にひき続き、それぞれの周溝内の発掘を行った。特に、第1号方形周溝内から遺物が二層にわたって出土した。第4号方形周溝は、土層断面図を作成、ほぼ完掘した。

第5号方形周溝では、南溝底面から約30cm上に木炭とわずかな焼土が見られた。この木炭は南溝の内側壁に沿いレンズ状に堆積した土に沿って横に広がっていた。この木炭層の下で台付甕形土器の脚部が出土した。

また本日は、3トレンチ西端に南東に向って走っている溝を発見したが、南東隅は切れている。溝内に堆積していた土は、第5号方形周溝と若干異なり黒褐色土であった。なお、出土遺物はなかった。

8月1日（曇ときどき晴） 鍛冶谷第4号方形周溝は昨日完掘したので、本日は、朝から全測と断面図を作成した。第5号方形周溝は、全プランを確認し、周溝内の排土を行なう。

新田口では、第1号方形周溝墓の西溝、北溝南溝の断面図を作成及び、第2号方形周溝墓北溝の断面図作成。さらに、第4号方形周溝と、第5号方形周溝の切り合いの状態の断面図作成、その結果第4号方形周溝が、第5号方形周溝を切っていることが明らかになった。

8月2日（晴ときどき曇） 鍛冶谷第5号方形周溝溝内の排土を続行、完掘した。写真撮影後、全測図及び断面図作成。第4号方形周溝の写真撮影。

新田口では、第1号方形周溝及び第2号方形周溝の写真撮影、全測図、断面図作成。その他、新田口で発見された遺構全ての写真撮影及び断面図を作成し、第2次調査を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 鍛冶谷・新田口遺跡の位置 (第3図)

東京から中山道を下り、荒川の戸田橋を渡ると、埼玉県の最も南に位置する面積18.01km²の戸田市へ入る(昭和41年市制施行)。また、都下からは笹目橋を渡っても市内へ入ることができる。この戸田市は、鉄道の敷設がなく、交通機関は、すべて自動車による。

かつては、溪斎の綿絵にのどかな戸田の渡しの情景が描かれ、中山道を往来する旅人でにぎわったところであるが、現在は、自動車の洪水である。

ところが、この戸田市は、荒川底地にあるため、夏の大雨には、市内に水があふれだし、人々の生活は、東西に走る狭い自然堤防上に限定されてきた。ところが、都心に近い地理的条件が左右し近年盛んに水田(氾濫原)の埋め立てが行なわれ、新しい住宅が日増しに建築されており、現在では、人口63,000を有するようになった。また、荒川の新堤防下には、大工場の進出が著しく、倉庫が林立し、工業地帯になっている。

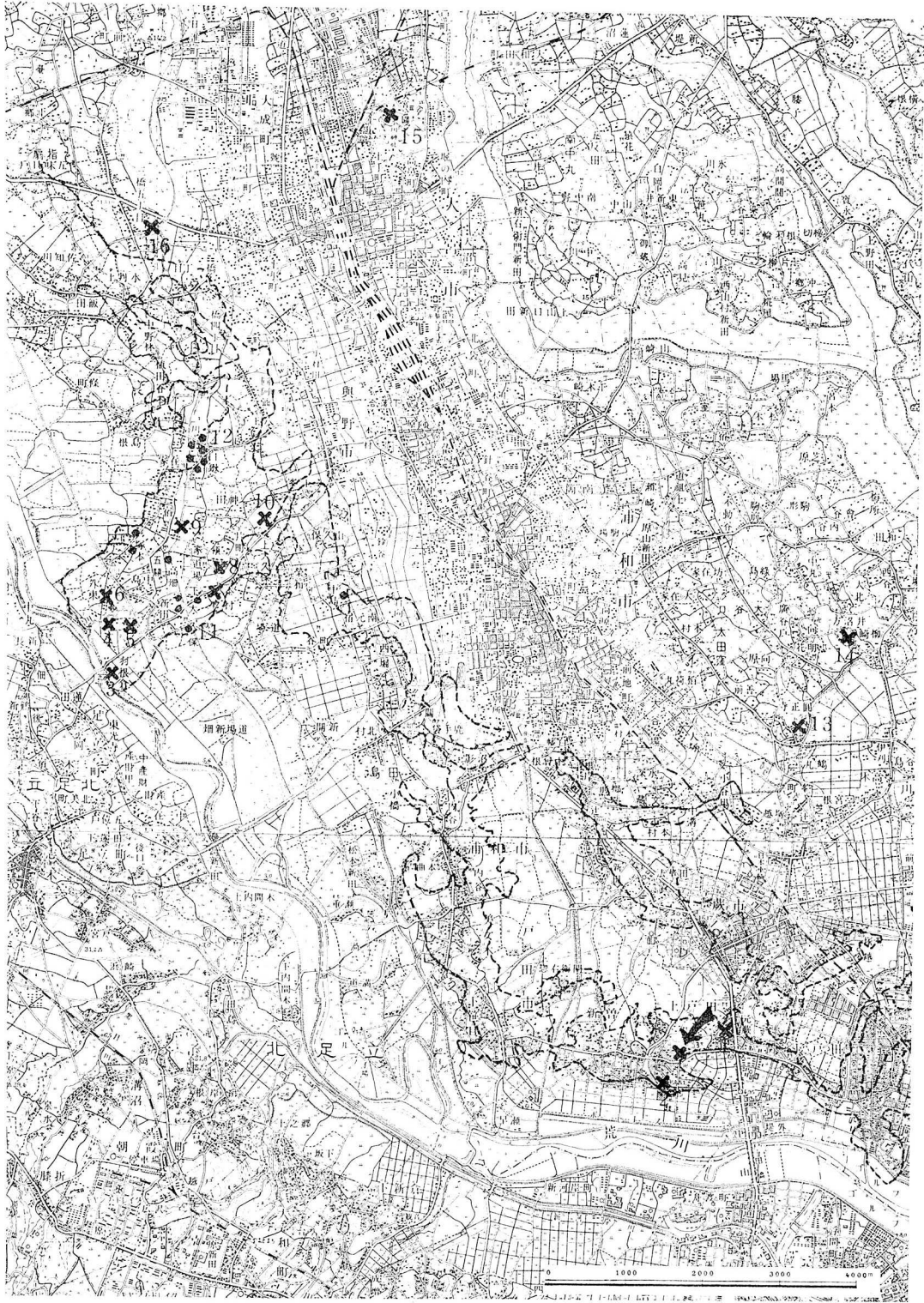
この広い面積を有する戸田市は、荒川(旧入間川)の流路に並行して発達した自然堤防と、湿地帯とからなり、北から美女木・笹目・上戸田・下戸田の四地区に分けることができる。このうち美女木と笹目は、南北にのびる幅の広い自然堤防上に位置し、鶴岡八幡宮を中心として、鎌倉時代に栄えたところであるが、新大宮バイパスの建設によって、そのおもかげは現在一変してしまった。一方、上戸田、下戸田は、東西に発達し、南側が大きくえぐられた幅の狭い自然堤防上にあり、戸田市の中心地域である。

今回調査した、鍛冶谷・新田口遺跡は、上戸田地区にある(第3図矢印)。附近は、すでに土地区画整理事業も終り、整然としている。鍛冶谷(A地区)は現在畑地と宅地であるが、新田口(B地区)は、都市計画で造られた公園(新田口公園)内である。

現在の荒川は、沖積地を隔てて、この遺跡の南方1200mを東流している。遺跡は、沖積地が湾状に入りこんだ、その先端に位置しているが、この湾状の沖積地は、水はげが悪く、沼化している。

この遺跡のある自然堤防は、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色粘土層を基盤とする低平な微高地である。表土は、氾濫原特有の、粒子の細かい砂混りの灰色を呈した土である。この土層(約30cm)の下に、黒色土があり、硬くしまっている。そして、第3層目が基盤の黄褐色粘土層である。

このように、氾濫土で原地表面が厚く覆われているため、土器など遺物の表面採集は、ほとんど不可能である。したがって、遺跡があるにもかかわらず、表面上では、その範囲をつかむことが不可能な地域であった。したがって、戸田市の遺跡は、偶然による発見でしか、それを確かめることができない。今回の調査をつかった鍛冶谷での土器発見は、まことに幸運といえよう。



第 3 図 銀冶谷・新田口遺跡（矢印）とその周辺の遺跡

第 2 節 鍛冶谷・新田口遺跡の環境 (図版一) (第 3 図)

鍛冶谷・新田口遺跡の位置するところは、荒川下流域左岸に発達した自然堤防上にある。この自然堤防は、吹上・鴻巣から大宮市附近までは、平均標高20mの台地が、その役を果たしているが、浦和・戸田・川口では、自然堤防の様相は明瞭でない。ただ、この自然堤防は、黄褐色粘土層から成り、荒川の流に並行している。しかも、その高さは、浦和市大久保附近で8m、戸田市上戸田で5m、川口市で4mと、ほとんど平地化されている。しかも、この地域は、荒川低地と呼ばれているところでもある。しかし、その自然堤防の範囲は、その上に、古い住宅が多く建っていることでおおよそ見当がつく。その範囲を大まかに握んだのが、第3図に点線で示したところである。

この荒川低地における自然堤防の成立であるが、三友国五郎氏は、「川口、蕨市、戸田町の自然堤防は、土師期から陸地化した。」(註1)とし、戸田市の乗る自然堤防は、他の荒川下流域左岸のそれよりも新しい自然堤防であると考えていたように伺える。

しかし、これは、戸田市における考古学的調査がなされなかった時点における、表面採集による予察であって、鍛冶谷・新田口遺跡の発見、および調査(註2)以来、その成立に関しては、一考を要することになった。すなわち、鍛冶谷・新田口遺跡において、第1次調査で、弥生時代後期の弥生町式土器をもった方形周溝墓の発見であり、また、同遺跡から、古墳時代前期前半の五領Ⅱ式土器をもった方形周溝墓や住居址が発見されていることから、ここに農業共同体の集落の存在を推定することを可能ならしめた。また、同市隣構(第3図1)からも、弥生町式土器が発見されている(註3)。さらに、鍛冶谷・新田口遺跡の南方500mの2にも土師器(鬼高?)の散布、および円墳一基が確認されている。

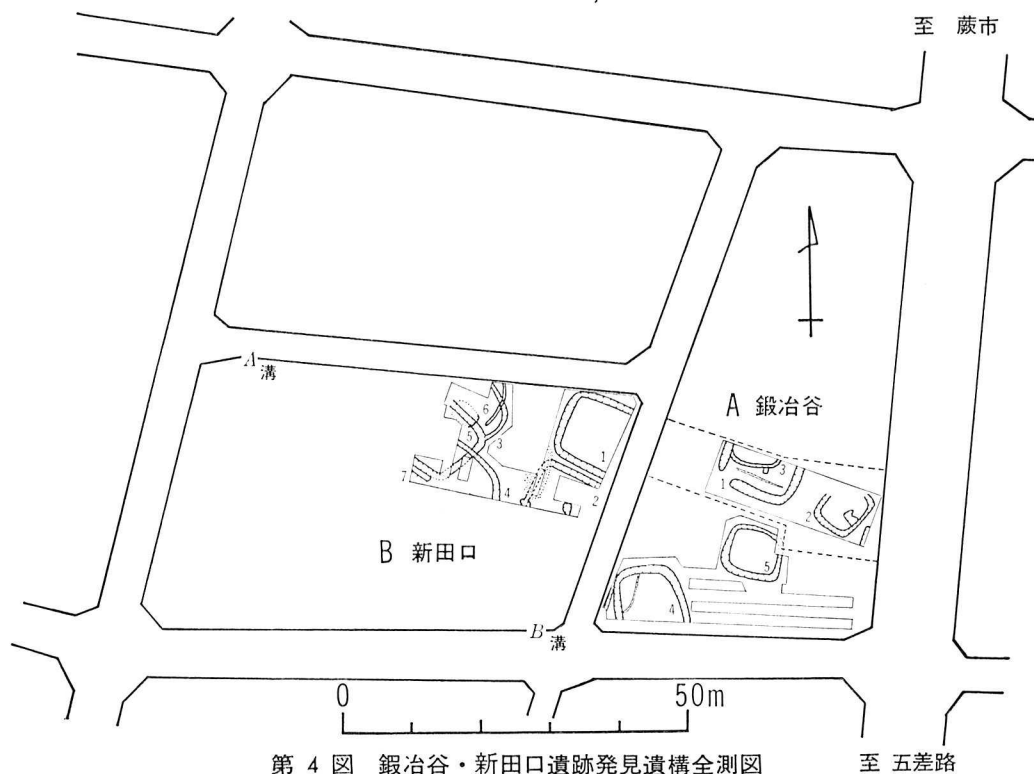
ところが、同じ戸市内でも、笹目や美女木地区では、自然堤防の向きも東一西から南一北に細長いものとなり、その成立も、前者とはかなり違う。すなわち、美女木番匠免からは、縄文中期初頭の五領ヶ台式土器や、阿玉台式土器の破片が発見されている(註4)。前節で、戸田を四地区に分けたが、上流にある美女木地区の開発が最も早く、以下順に東へ向って開発されたようである。

次に、この自然堤防上における他地域の、鍛冶谷・新田口遺跡と同時期、あるいは、それ以降の遺跡をみると、3の羽根倉橋南遺跡では、荒川河床から五領期(古墳時代前期前半)の土器が発見されている(註5)。また4の天神前や5の神田遺跡では、弥生時代から古墳時代へかけての土器が多く採集できる。6の東外遺跡でも五領期の土器が発見されている(註6)。また、7の埼玉大学構内の本村遺跡では、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が調査されている(註7)。8の片町遺跡9の川原遺跡、10の新田遺跡でも五領期の土師器の散布がみられる(註8)。さらに、11の大久保古墳群や、12の側ガ谷戸古墳群も形成されている。

この荒川の自然堤防以外で、この鍛冶谷・新田口遺跡と同じ時期、あるいは同じ性格の遺跡をあげると、13の円正寺遺跡(弥生町期の集落址)(註9)、また方形周溝墓の発見されている遺跡では、14の井沼方遺跡、15の大宮公園内遺跡(註10)、16の下手遺跡(註11)がある。

第 3 章 鍛冶谷・新田口遺跡

第 1 節 鍛冶谷・新田口遺跡の概観 (第 4 図)



第 4 図 鍛冶谷・新田口遺跡発見遺構全測図

鍛冶谷・新田口遺跡は、戸田市の都市計画により、土地区画整理も終り、整然と区画された住宅地にある。今回二期に亘って調査したところは、そのうちでも、畑地及び草地（A地区）と、都市計画によりできた公園（B地区）とを、便宜上南北に走る幅4mの道路により区切った。

鍛冶谷においては、第1次調査で3基の方形周溝墓（第1号～第3号方形周溝墓）を発見した。第2次調査は、第1次調査区の南で、さらに2基の方形周溝墓を発見することができた。

これらの方周溝墓の分布は、5基が、かなり近接している。すなわち、第1号方形周溝墓の東約4mに第1号方形周溝墓があり、また、第5号方形周溝墓は、第1号方形周溝墓を切っている。第5号方形周溝墓は、第1号方形周溝の南約4mに第1号とほぼ平行につくられている。第4号方形周溝墓は、先の4基とは、若干向きが違い、第5号方形周溝墓の南西約7mにつくられ、南側は幅6mの舗装道路の下になっている。

新田口は、今後の公園造成計画と睨み合せ、特に破壊される公園北隅を中心に調査を行った。

第1次調査では、第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓の一部を確認したが、第2次調査の結果は、第1号方形周溝墓の東溝が道路の下に入っており調査できなかつた。また、第2号方形周溝墓は、第1号方形周溝墓の南約50cmの間を以て造られているが、北溝しか調査できなかつた。

この第1・2号方形周溝墓の西約7～8mの間隔を以て発見された第3号～7号方形周溝墓は互いに切り合い、またその形態もさまざま、この鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓の特徴を窺がわしている。第1次調査時に発見された、第1号住居址は、第5号方形周溝墓の北溝の上につくられている。

この外、第2次調査時に、新田口(公園)の周囲で側溝工事が行なわれており、公園の西コーナーと東コーナー付近で、側溝に溝の断面が現われ、土器が発見された。このことは、遺跡の範囲を知るうえで重要なものであり、西コーナーに現われた溝を新田口A溝、東コーナーの溝を新田口B溝と呼んだ。しかし、公園の南コーナー付近に、預水槽を掘った時には、何ら遺構及び遺物の発見はなかつた。

したがって、この鍛冶谷・新田口遺跡の拡がりは、鍛冶谷・新田口の境の4m道路を中心として、鍛冶谷は南東方向へ、新田口は南西方向へ拡がっているものと推測できる。

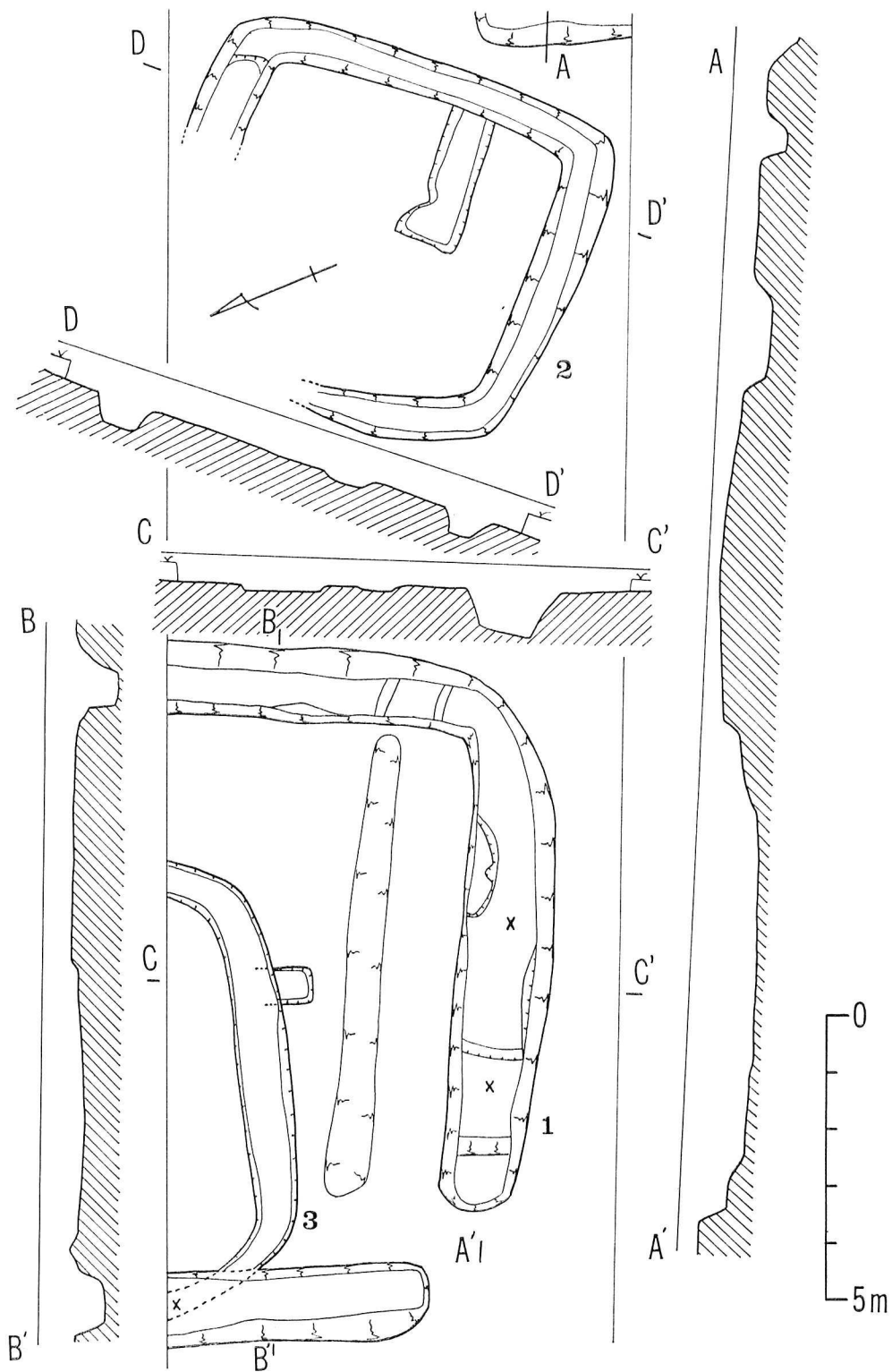
第2節 鍛冶谷(A地区)の遺構

(1) 第1号方形周溝墓 (図版三)(第5図の1)

北溝は、宅地の中に入り調査することが不可能なため、全体を知ることができなかつた。周溝の内側は、直線的で、コーナーもほぼ直角に曲る。外側は、若干丸味を帯びており、コーナーは丸くなっている。全体的なプランは、隅丸方形を呈している。しかし、西南のコーナー部で、南溝及び西溝は浅くなり、周溝が幅1.30mほど切れ、陸橋を有している。この第1号方形周溝墓の大きさは、東西で13mを測る。溝の幅は、東溝1.30m、南溝1.70m、西溝1.30m、コーナーで1.00mを測る。溝底は概して平らで、コーナー部付近が浅く、中間部にかけて深くなる、いわゆる舟底形を呈している。また、南溝の中央よりややコーナー寄に底部から高さ10cm、幅30cm、長さ1.20mのテラス状を呈する造り出しがある。

溝中の土層は、最下層に黄褐色粘土ブロックが混った暗褐色土が堆積し、その上に黄色粒子を含む黒褐色土があり粘土化している。

方台中央には、幅70cm、深さ12cm、現長90cmの長方形プランを呈した土壙が発見されたが、第3号方形周溝墓の南溝に切られて、土壙全体のプランを現出できなかつた。また、南溝に平行して、



第 5 図 鍛冶谷第 1・2・3 号方形周溝墓実測図

長さ8.20m、幅60cm、深さ10cmの溝が走っている。

遺物の出土を溝別にみると、東溝では、黄色粒子を含む黒褐色土層から、壺形土器破片2個、このうち底部が1個出土した。西溝は、第3号方形周溝の溝底下から壺形土器の底部を坏形に加工した土器1個が斜めに黄色粒子混りの黒褐色土層から出土した。南溝は、焼成後穿孔の壺形土器2個、台付甕形土器1個が発見された。このうち壺形土器1個と台付甕形土器は調査前に発見されたものであるが、第1次調査で、それが配置されていた位置を確認できた。また、調査で新たに発見された底部穿孔壺形土器は、調査前に発見された壺形土器から東へ1.5m離れたところに位置しており口縁を北に向けて横転して出土した。

（2）第2号方形周溝墓 （図版四の1）（第5図の2）

鍛冶谷の東端、第1号方形周溝墓から約4m離れて西溝が発見されたものであるが、北側が攪乱されていたため、完全な形で現出できなかった。全体的なプランは、東西6.10m、南北7.50mの隅丸方形を呈す。しかし、内側の方台部の壁は、中間部で若干張りがみられ直線的ではない。したがって、外側も若干張りがみられる。溝底は、概して平らであるが、北側のコーナー附近から西に向かって深くなってゆく。幅および深さは、南溝幅90cm深さ40cm北溝で幅1.0m、深さ50cmを測る。溝内に堆積した土の状態は、第1号方形周溝墓の溝内の土層と同じで、最下層に、黄色粒子混り暗褐色粘土、その上に、黒褐色粘土層がある。

方台部は、比較的平らであるが、東から西にかけて幅90cm、深さ10cmの溝が発見されたが、この第2号方形周溝墓の東溝に切られている。なお、この方台上には主体部らしき遺構の発見はなかった。

出土遺物は、ほとんどなく、東溝の黒褐色粘土層中から壺形土器の底部が出土した。

（3）第3号方形周溝墓 （図版四の2）（第5図の3）

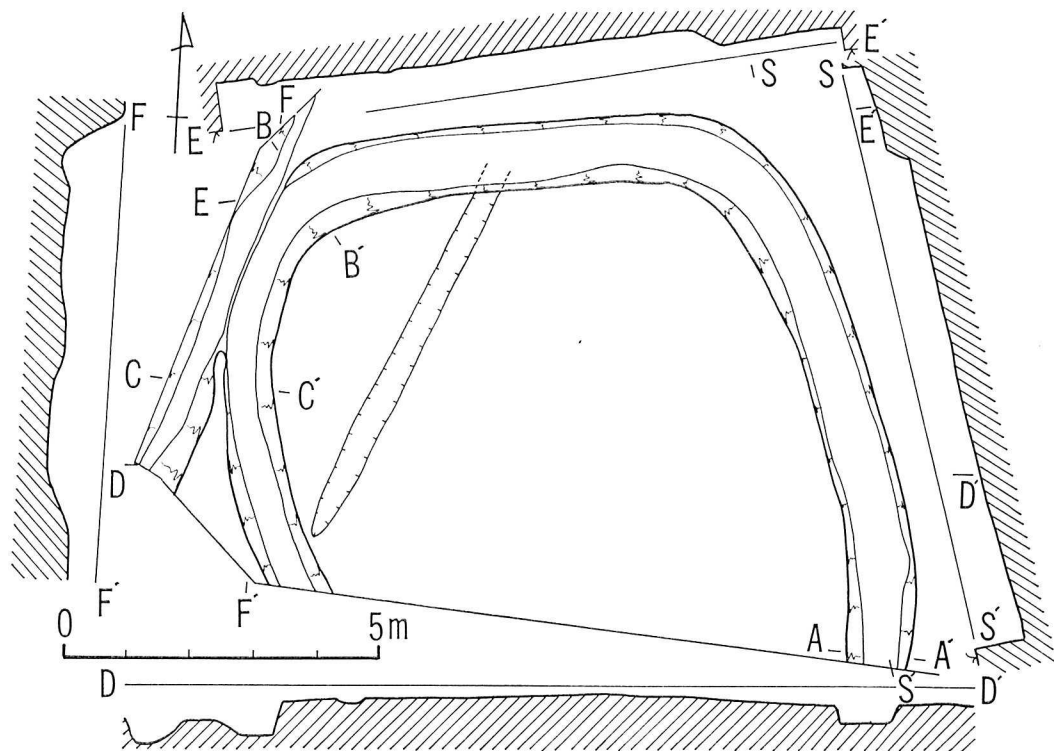
第1号方形周溝墓を切ってつくられているものである。大きさは、東西約8m、溝の幅1.00m、深さ10cmを測るものである。周溝の全体プランは、方形がくずれ、南溝は直線が保たれているが、東溝と西溝は大きく張り出し、いわゆる小判形を呈するものである。

出土遺物は、皆無であった。

（4）第4号方形周溝墓 （図版五）（第6・7図）

東溝・西溝の一部と、南溝が道路下にあり遺憾ながら調査することができなかった。

プランは、周溝内外の壁が三方とも張り出して、方形がくずれ、楕円状を呈している。大きさは、東西10.3mを測るが、南北は、これよりも大きくなり、長径は南北にある。周溝の幅は1.00m



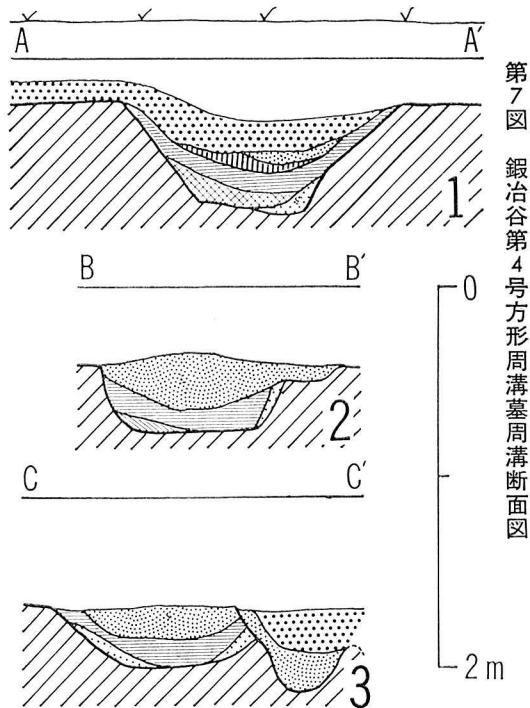
第6図 鍛冶谷第4号方形周溝墓実測図

で三方とも平均して周っている。深さは、掘りこみ点から0.30mで、溝底も概して平らである。

溝内に堆積した土層（第7図）は、最下層に、外側から黄褐色粘土ブロックを混じた褐色土が流れこみ、その上に、方台部から、黄褐色粘土ブロックが流れこんでいる。その上には、黒褐色粒子を含む黒褐色土、酸化鉄と黄褐色粒子を含む茶褐色土。最後に、黒褐色砂質粘土が周溝を覆っている。

方台部は、中央が若干高く、周溝に向かって傾斜している。また、方台部西側に南北に幅0.50m深さ0.10mの溝が走り、北溝を切っている。主体部と思われる遺構は、発見できない。

出土遺物は、台付甕形土器、鉢形土器などの破片が若干出土した。



第7図 鍛冶谷第4号方形周溝墓周溝断面図

なお、この第4号方形周溝墓の西側、4号周溝の西コーナーに接して、1本の細い溝が発見されたが、これが方形周溝墓の溝であるかは不明である。

(5) 第5号方形周溝墓 (図版六) (第8・9図)

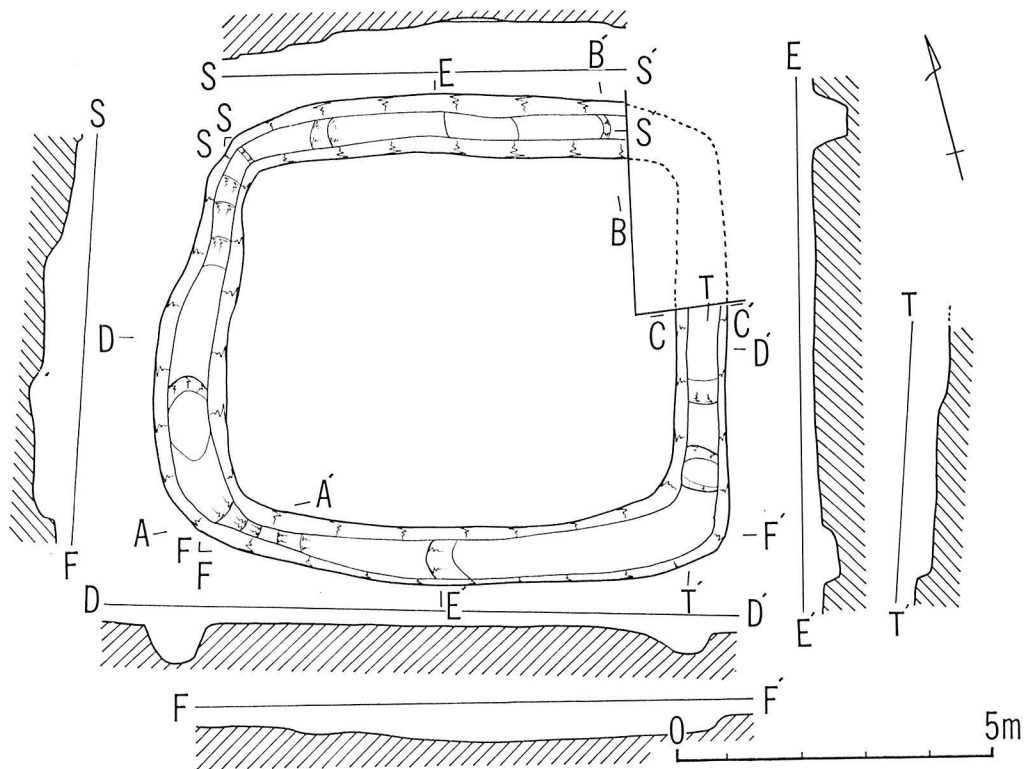
北溝および東溝は概して直線的であるが、西コーナーおよび南コーナーが浅く、幅もつぼまっているため、西溝、南溝は若干ふくらみをもち、直線的でない。全体的なプランは、隅丸の梯形を呈するものである。

規模は、南北7.70m、東西9m、溝の最大幅は、東溝0.80m、西溝1.20m、南溝1.00m。

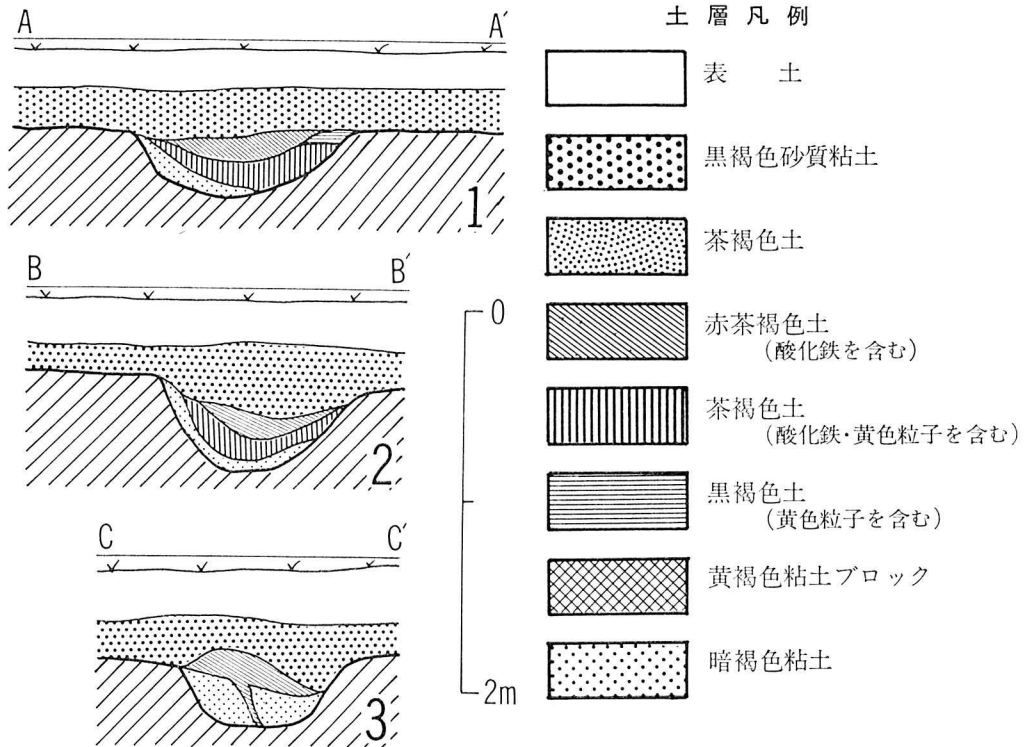
溝の掘り方は、一様ではなく、四方のコーナーは浅く、中央部が深くなって、いわゆる典型的な舟底形を呈している。特に、北溝と西溝の深いところは、周溝の掘りこみ面から0.60mあり、基盤の黄褐色粘土層を剥りぬいて、その下層の砂層に達している。

溝内に堆積している土層(第9図)は、まず中央方台部から黄褐色粘土ブロックを混じた黒色土が入り、そのあと、外部から、酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土が入り、その上に酸化鉄を多量に含んだ赤茶褐色土が堆積し、さらに黒褐色砂質粘土が厚く覆っている。

中央方台部は、西側壁が若干乱れ、南側は、張り出しているが、東西7.00m、南北5.80mの隅丸長方形を呈している。この方台部には、主体部と思われる遺構の発見はない。



第8図 鍛冶谷第5号方形周溝墓実測図



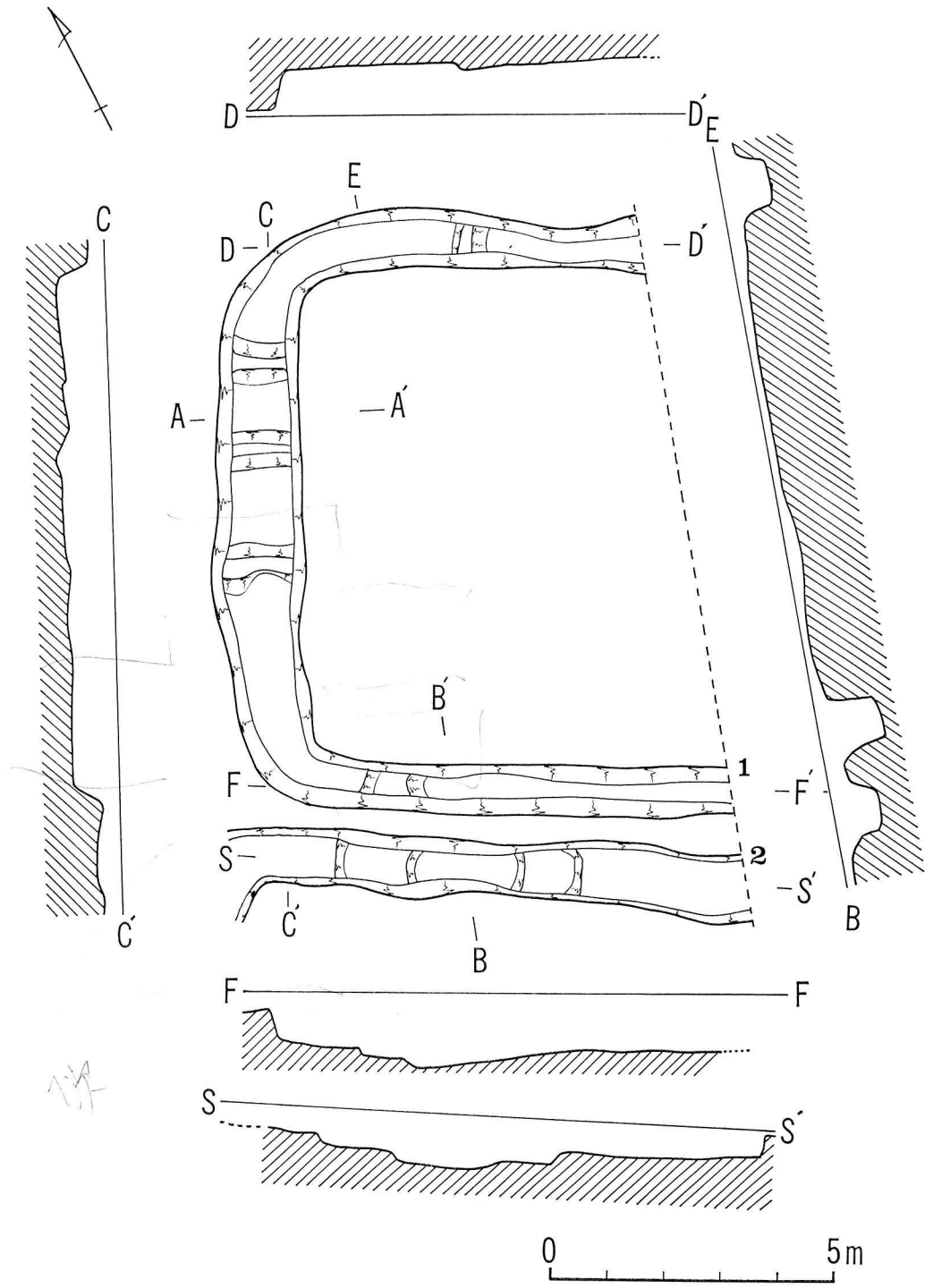
第9図 鍛冶谷第5号方形周溝墓周溝断面図

第3節 新田口(B地区)の遺構

(1) 第1号方形周溝墓 (図版七～十一の1)(第10・11図)

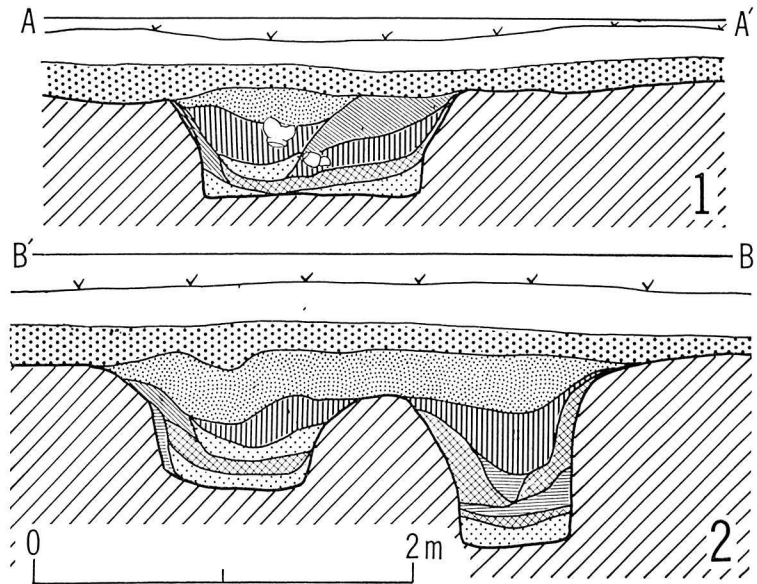
新田口公園北隅に発見されたものである。東溝は区画整理で設けられた4m道路の下に入ってしまい調査することができなかった。周溝は北溝の外側が乱れ、西溝は中央部が若干張り出している。これらに対して、南溝は直線的である。内側方台部のコーナーは丸いが、壁は直線である。全体プランは隅丸方形を呈している。

規模は、南北10.7mを測る。周溝の最大幅は、それぞれ北溝1.00m、南溝0.90m、西溝1.60mを測る。周溝の掘り方は、方台部側をほぼ垂直に掘り、外側は、やや傾斜をもっている。溝底は一様でなく、北コーナー付近で、北溝溝底東側から20cm掘りこまれ、底は平らである。また南溝底は、長さ3.50mにわたり掘りこみがあるが、その底は平らでなく、中央部に幅0.70mの掘りこみを有している。北溝底は、西コーナーから東進するにしたがい階段上に深くなって行き、コーナーから2.50mで最深となり、ここから上がり出し、平らになる。



第10図 新田口第号1・2方形周溝墓実測図

周溝内の土層を、西溝と南溝でみる。西溝では(第11図1)第一に内側方台部の縁、および外側の縁がくずれ落ちたと思われる黄褐色粘土ブロックを多量に含んだ暗褐色土、その上の方台部側から流れこんだ黄褐色粘土のブロック、外側から酸化鉄を含んだ赤褐色土が流れこんでいる。さらに内側から、酸化鉄、黄色粒子を含んだ茶褐色土、酸化鉄をふくむ赤茶褐色



第11図 新田口第1・2号方形周溝墓周溝断面図

土が入っている。ところが、この茶褐色土と、赤茶褐色土、および外側から入った赤茶褐色土を切って、別な溝が堀られている。その溝の上幅は0.90m、深さ0.50mを測り、最下層に、黄褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色粘土層、その上に、酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土、それに茶褐色土がレンズ状に堆積しており、二層目の酸化鉄と黄色粒子を含む茶褐色土層から土器が出土した。南溝の溝内堆積土は、西溝とほぼ同じである。この南溝の断面にも、二次的に堀られた溝の断面を確認することができた。すなわち、この溝は、内側から流れこんだ黄褐色粘土ブロックの層と、酸化鉄を含む赤褐色土層を切ってつくられ、外側の立ちあがりには、先に堀られた周溝の壁を利用している。この溝の上幅は、1.00m、深さは約0.50mである。

第1次調査の時にも、土器が二層にわたって出土することが指摘できたが、第2次調査においても明らかに二次的な溝が堀られていることを断面で再確認できた。

方台部は、南北8.80mを測り、概して平らである。主体部と思われる遺構の発見はなかった。

遺物は、すべて溝内から出土したが、明らかに溝底にすえ置かれたと思われるような状態での出土はなかった。しかも土器の出土は、西溝内の酸化鉄・黄色粒子を含む茶褐色土層から多く出土、その器形も壺形土器・甕形土器・鉢形土器・手づくねの小型壺形土器・器台形土器・高环形土器など、その器形もさまざまである。北溝内では、西溝と同様、茶褐色土層から器形土器・台付甕形土器など出土したが、特に、これらと共に碧玉製管玉が流れこんだ状態で出土した。南溝では、最下層の暗褐色粘土層から、壺形土器の破砕されたものが一括出土した。この外、二次的に堀られたと思われる溝からの出土は、西溝の断面にかかっていた甕形土器の外は、破片が多かった。

(2) 第2号方形周溝墓 (図版十一の2)(第10図の2)

第1号方形周溝墓南溝と約50cm離れて南側に平行してつくられたものである。調査は、北溝だけで、その全体の規模を知ることができなかった。

周溝は、第1号方形周溝の北溝と同じように、だいぶ曲っているが、直線を意識して掘られたものと思われる。溝の上幅は、平均1.00mであるが、東進するにつれて若干広がっている。深さは、北コーナー付近で0.25mであるが、そのコーナーから東へ約1.00m東進したところで、深さ0.20mの掘りこみがあり、その深さは東へ4.20mあり、そこで、また0.20m上る。しかもこの掘りこみの中心付近は、さらに深さ0.20m長さ2.00m掘りこまれている。この第2号の最も深いところは、周溝の切りこまれているところから1.90mを測る。しかも、ここに堆積している土層は、最下層に黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色粘土層で、その上層は順に、黄褐色粘土ブロック・黄色粒子を含む黒褐色土・黄褐色粘土ブロックと黄色粒子を含む黒褐色土・酸化鉄と黄色粒子を含む茶褐色土の順に堆積し、この深い二段の掘りこみは、この第2号方形周溝墓の周溝に最初から掘りこまれていたものである。

遺物は、黄褐色粘土ブロックの層から壺形土器を加工した碗形土器や台付甕形土器の口縁部及び台部が出土した。しかも、この出土状態はバラバラであった。

(3) 第3号方形周溝墓 (図版十二)(第12図の3)

第1次調査の時は、1・2トレンチにかかって周溝の一部分が発見されていたが、その時点では、拡張することがなかった。第2次調査において、その部分を拡張した結果、方形周溝墓となり得る周溝になった。この第3号方形周溝墓は、遺憾ながら三分の一程度しか調査できなかった。

東溝の内側および外側の壁は、ほぼ直線的であるが、コーナーのカーブは大きな円弧を描き、南溝は内外の壁ともはり出し、南溝は第5号周溝を切っているが、東溝は中間部よりややコーナー寄りを第6号周溝に切られ、さらに、方形のピット2.00×0.60m、深さ0.60mで切られ、一部分であるが、張り床の住居址のように粘土が、周溝の上に厚く張られている。

周溝の幅は、コーナー部で若干細くなり、東溝で0.70m、南溝で0.50mを測る。深さは0.30mで平均されている。周溝の底は概して平らである。

周溝内に堆積していた土層は、最下層に黄色粒子を含む黒褐色土、その上に酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土であった。

方台部には、この第3号方形周溝墓とは別な遺構がある。すなわち、粘土を厚さ10cmぐらいに張りつけて、そこに円形、および方形のピットを穿っている。この第3号周溝附近には、国分期の土師器の細片も散布しており、この方台部上には、時代の下降した遺構があったものと考えられる。

なお、第3号方形周溝墓東壁の一部を切っている方形ピットは、粘土の張り床状のものの下に入

りこんでいた。

周溝内からの出土遺物は、壺形土器・台付甕形土器・器台・広口小型壺の破片が、酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土層から出土した。

(4) 第4号方形周溝墓 (図版十三) (第12図の4)

この第4号方形周溝墓は、東溝と、南溝の一部のみ調査したものである。この周溝墓は、周溝のコーナーが大きく円弧を描いているもので、全体的プランは方形がくずれ、小判形(楕円形)を呈するものと思われる。しかも東溝は、第5号方形周溝墓の南溝を切っている。周溝の幅は、南溝で0.90m、深さ0.60m、東溝中間部で幅1.10m、深さ0.60mを測るが、北進するにしたがって幅は狭くなっている。周溝の断面は、内側がゆるやかな傾斜をもっているが、外側はすどい角度で掘られている。

周溝内の堆積土は、まず周溝の内側から黄褐色粘土ブロックが流れこみ、さらにその上に黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色土が入り、次に外側から酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土が入りこみ、順次黄色粒子を含む黒褐色土・酸化鉄を含む赤褐色土が堆積し、全体が黒褐色砂質粘土で覆われている。

方台部は、概して平らで、遺構の発見はなかった。

遺物は、コーナー附近に集中して、S字状口縁を有する甕形土器底部、高坏形土器脚部が出土した。

(5) 第5号方形周溝墓 (第12図の5)

第5号方形周溝墓は、東溝、南溝の一部、西溝の一部を調査したものである。

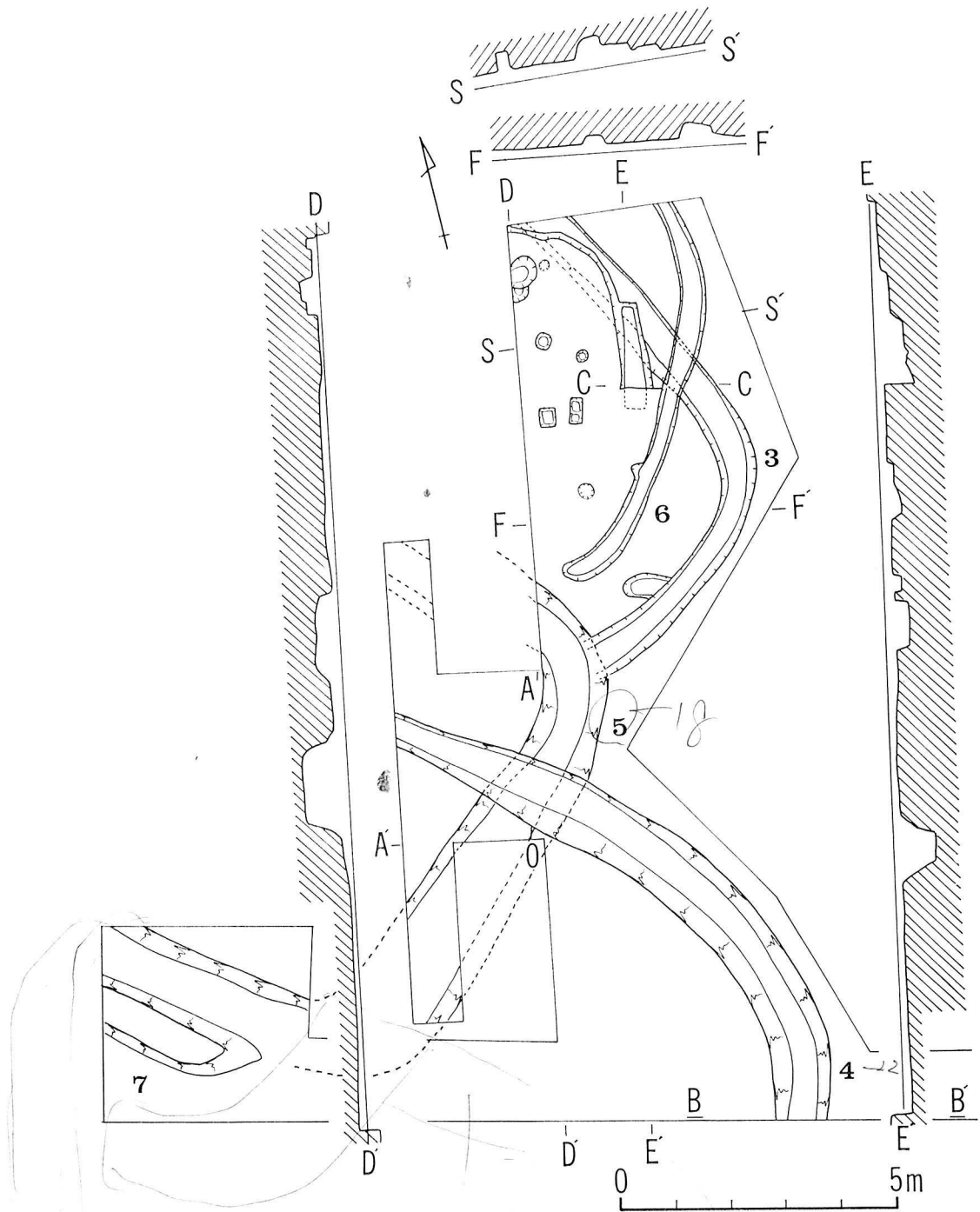
周溝の内・外の壁とも直線的なもので、全体的なプランは、正確な隅丸方形を呈するものと思われる。しかもこの周溝は、東コーナーの一部を第3号方形周溝墓の南溝で切られ、東溝を第4号方形周溝墓の東溝にほぼ直角に切られている。

規模は、東西8.70mを測る。周溝の幅は一様でなく、東コーナー部で幅1.10m、南溝中間部で1.30mを測る。

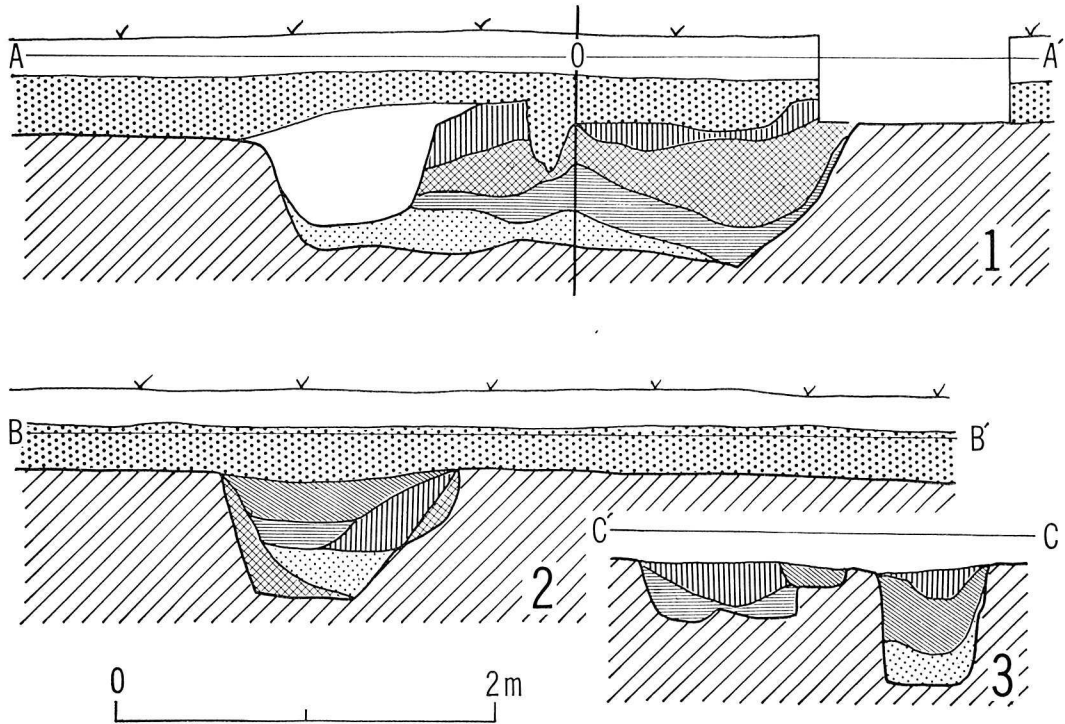
溝内に堆積した土層(第13図1)は、他の方形周溝墓とほぼ同じで、最下層に黄褐色粘土ブロックを混じった暗褐色粘土、その上に順次黄色粒子を含む黒褐色土、黄褐色粘土ブロック、酸化鉄と黄色粒子を含んだ茶褐色土、黒色砂質粘土が堆積している。

遺物の出土は、意外に少なく、南溝最下層から、小型壺形土器の細片が出土した。

なお、東溝の上には、住居址がつくられている。



第 12 図 新田口第 3・4・5・6・7 号方形周溝墓実測図



第13図 新田口第3・4・5・6号方形周溝墓周溝断面図

(6) 第6号方形周溝墓 (図版十二) (第12図6)

第6号方形周溝墓は、方形の概念からかなりはずれるもので、方形、およびそれに近い形で曲るコーナーはなく、全体的プランは円形を想像させる。周溝は南側で若干内側に曲って切れている。なお、この周溝は、第3号方形周溝墓の東溝を切っている。

溝の幅はほぼ一様で、 $0.40m$ 、深さは $0.20m$ 、を測る。掘りこみは垂直で平らである。

溝内には、黄色粒子を含んだ黒褐色土が堆積していた。

遺物は、焼成後穿孔の底部をはじめ、壺形土器の口縁部が若干出土した。

(7) 第7号(方形)周溝(墓) (第12図の7)

第3トレンチの西端で発見された溝状遺構である。深さは、 $1.00m$ で他の周溝に比較すると、かなり深いものである。

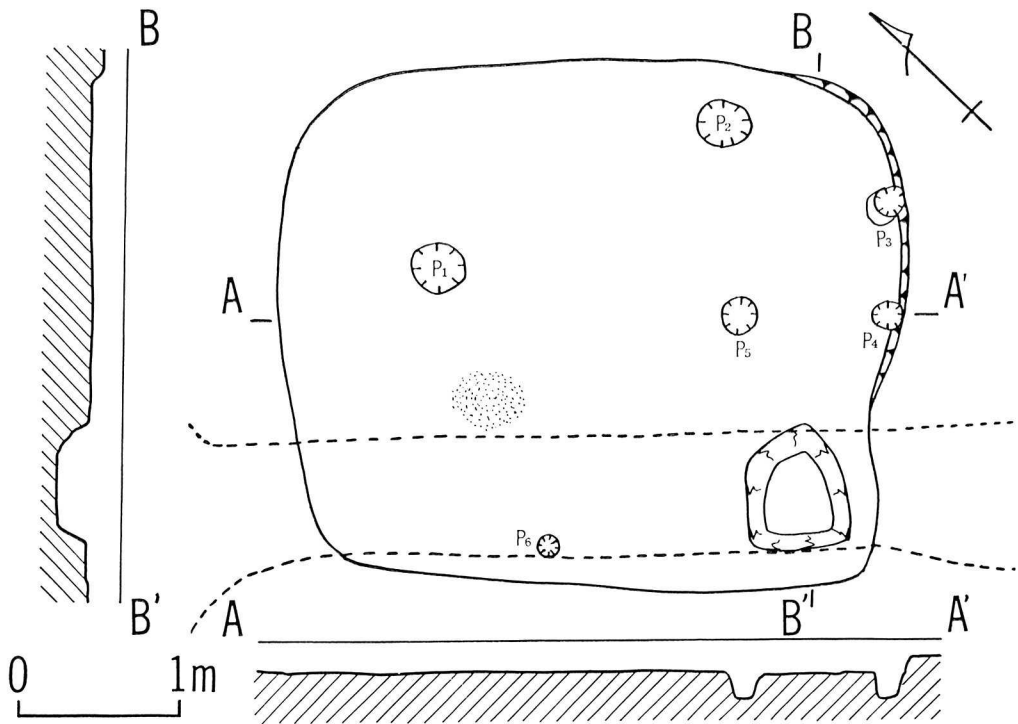
発見された遺物は、最下層(溝底)から台付甕形土器の口縁部及び脚部が出土した。

(8) 第1号住居址 (図版十四) (第14図)

床面が黄褐色土層で、壁が黒色土であるためと、水をかぶっている関係上、土の粒子が細かく、硬くしまって、壁を確認することが不可能な状態であった。しかし、硬い床面であったため、これを中心に追求し、竪穴住居址のプランを確認した。

プランは、若干胴の張った隅丸長方形を呈し、長径7.70m、短径6.50m、東コーナーの壁高20cmを測る。床面には、6つのピットが確認された。また、南のコーナーに、台形プラン、深さ20cmの貯蔵穴があり、内部に甕のセットが、北向きに倒れていた。焼土は中央よりやや西に認められた。

なお、この住居址の下に、幅1.50mの溝状遺構(第5号方形周溝墓北溝)がある。



第14図 新田口第1号住居址実測図

第4章 鍛冶谷・新田口遺跡の遺物

第1節 鍛冶谷出土の遺物

(1) 第1号方形周溝墓、溝内出土の土器

(図版十五) (第15図)

壺形土器 (第15図2・3)

2. 今回の調査の契機となった土器である。頸部は緩やかに「く」の字状に折れ、口縁部が大きく外反し、口唇部に2つの稜を有する。また、頸部から胴部にかけては、緩やかなカーブを描き、胴部最大径が下半部にあるが、ほぼ球形を呈し、底部にいたる。底部は、平底で、焼成後の穿孔がある。

肩部に細縄文(RL・LR2本立の結束のある羽状縄文)が施され、頸部には2段、胴部に3段のS字状結節文がつけられ、細縄文を界している。さらに、肩部には、6個を単位とする円形浮文が4か所に貼り付けてある。また、口縁部内側にも細縄文が施文され、3段のS字状結節文が細縄文を界し、その中に6個を単位とする円形浮文が4か所貼り付けてある。

整形は、頸部と胴下半部、及び、内面がへら状工具で研磨されている。胎土は小礫を多少含有しているが、良質の粘土で良く精撰されている。焼成は、ひび割れが目立っているが堅緻である。色調は、薄茶褐色を呈す。

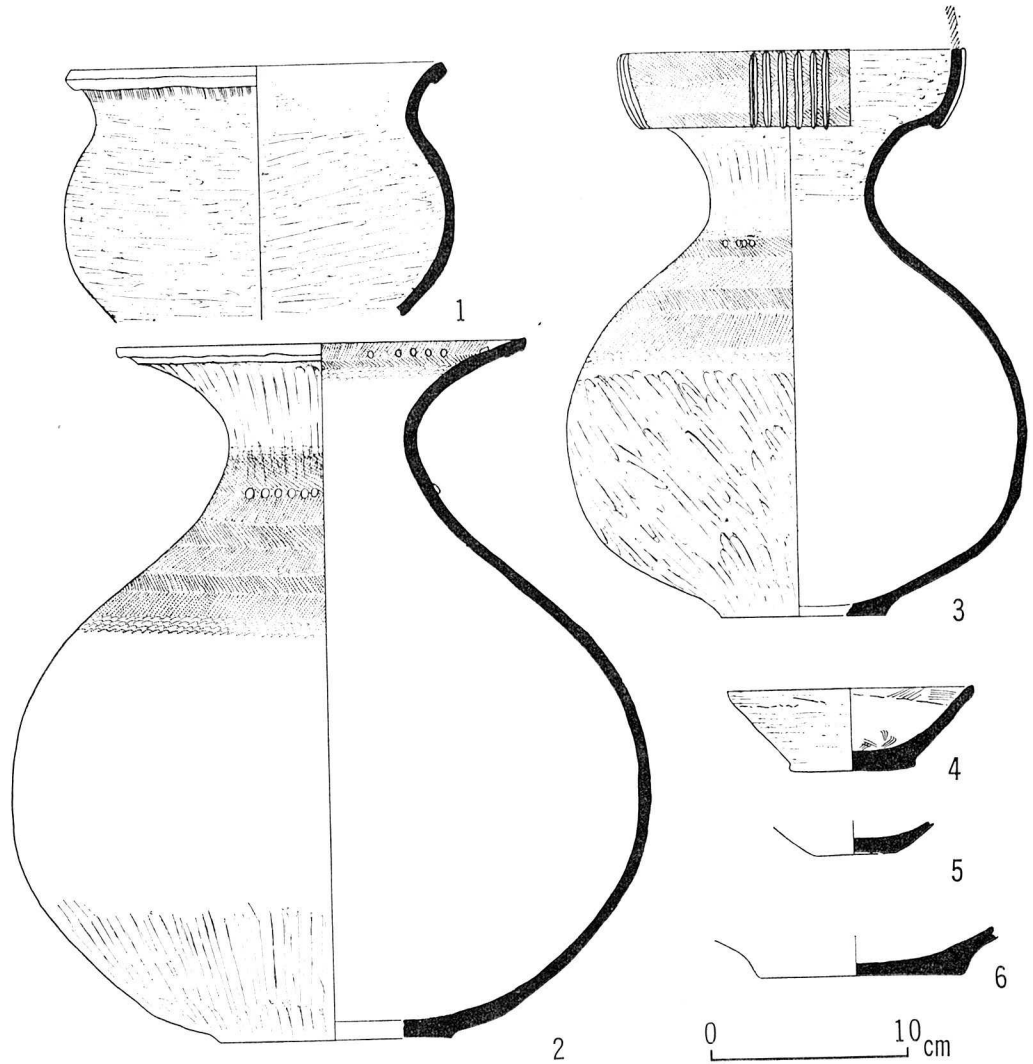
3. 幅の広い折り返し口縁で、4か所に6本ずつの棒状隆起がついている。頸部は緩やかな弧を描き、口縁部がわずかに内彎する。胴部の最大径は、下部にあり、ほぼ球形を呈している。底部は平底で焼成後の穿孔がある。

文様は、折り返えし部、及び、肩部から胴部にかけて細縄文が施され、その上に、円形朱文がつけてある。口唇部にもRLの細縄文が施文されている。

内外面の整形には、へら状工具を使用し、良く研磨されている。胎土は、小礫を含むが、良質の粘土である。焼成は堅緻で、色調は薄茶褐色を呈す。

台付甕形土器 (第15図1)

胴下部を欠損している。ほぼ球形に近い胴部から、緩やかに「く」の字に折れ、口縁となる。口縁は、細い帯状の折り返えし口縁である。口縁下部には櫛歯状工具による整形痕が見られるが、大部分はへら状工具による整形で、器面はよく研磨されている。胎土には、砂粒子が含まれている。焼成も堅緻である。色調は茶褐色を呈している。また、胴下部にはススの付着が認められる。



第 15 図 鍛冶谷第1・2号方形周溝墓出土の土器
〔1号(1~5)・2号(6)〕

坏形土器 (第15図4)

この土器は、膨みをもった底部から、わずかに内彎しながら口縁部に移るものである。外面には、淡い楕歯状工具による沈線がみられ、内面にも施文されている。整形が不十分で、器面は起伏がはげしい。胎土は砂粒子を含む、焼成は器面に荒れが目立つが堅緻である。色調は黄褐色である。

土器底部 (第15図5)

胴部からそのまま底部に移行するものであるが、底部はやや上底である。胎土は、砂粒子を多く含み、粗雑であるが、焼成は堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

(2) 第2号方形周溝墓, 溝内出土の土器 (第15図)

土器底部 (第15図6)

第2号方形周溝墓の溝内から出土した土器は、平底を呈する底部のみである。胎土・焼成とも良く、色調は灰褐色を呈す。

(3) 第4号方形周溝墓, 溝内出土の土器 (第16図)

壺形土器 (第16図1・2)

1. わずかに内彎する口縁部で、口唇部に幅の狭い段を有し、その下端をヘラ状工具による突刺しが施されている。内外面ともヘラ状工具による整形がみられる胎土は小礫を含む。焼成は、堅緻である。色調は灰褐色を呈す。

2. 上げ底の底部である。この底部には木葉痕を残している。外面はヘラ状工具による整形がみられるが、内面は剝落が著しい。胎土は砂粒子を含む。焼成は、外面にひび割れが目だつ。色調は、赤褐色を呈す。

高坏形土器 (第16図3)

頸部のみであるが、脚部は、膨みをもっている。整形は、櫛歯状工具の施文の上を、ヘラ状工具で研磨している。内面は、ヘラ状工具で削っている。胎土は、小礫を含む。焼成は軟質でもろい。色調は、灰褐色を呈す。

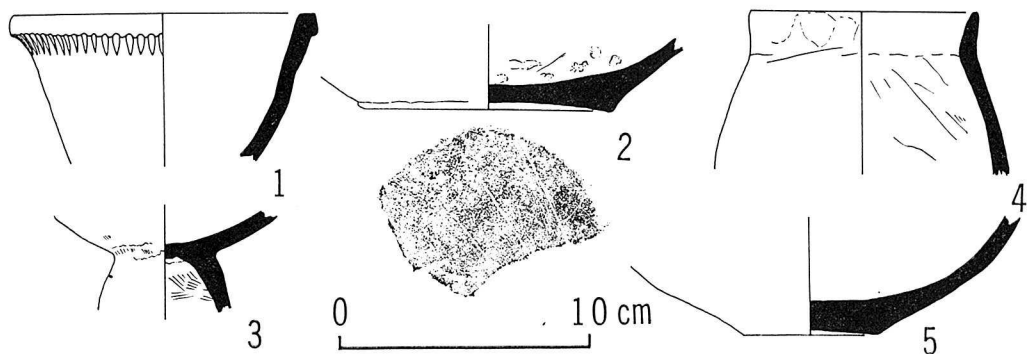
(4) 第5号方形周溝墓, 溝内出土の土器 (第16図)

甕形土器 (第16図4)

頸部のくびれは小さく、口縁部は、立ち気味である。内・外面とも、荒くヘラ状工具で整形している。胎土は、よく精撰されており密であるが、焼成は、軟質である。色調は淡黄褐色を呈す。

壺形土器底部 (第16図5)

上げ底の底部である。器面はヘラ状工具によって整形されている。胎土は、良く精撰されているが、焼成は軟質である。色調は、淡黄色を呈す。また、半面にススの付着がみられる。



第16図 鍛冶谷第4・5号方形周溝墓出土の土器
〔4号(1~3)・5号(4・5)〕

第2節 新田口出土の遺物

(1) 第1号方形周溝墓，溝内出土の土器

(第17図～第20図)

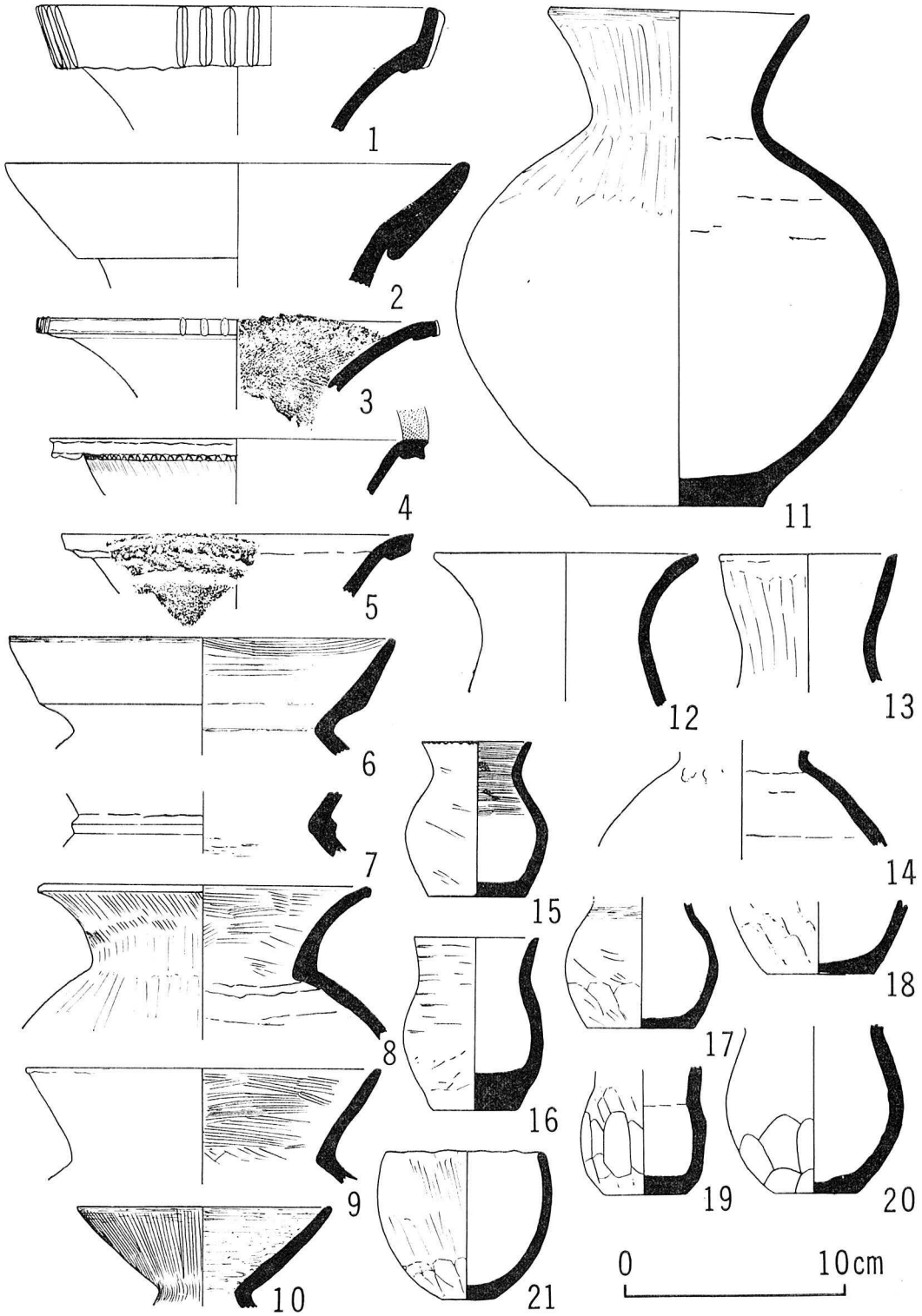
壺形土器 (第17図1～20)

1～2 いずれも幅の広い複合口縁を有し，頸部以下を欠損するものである。1は，口縁部が頸部から外反しながら漏斗状に開き，複合口縁部が，わずかに立ちあがっている。口縁折り返えし部には，4本を単位とする棒状隆起が4か所に貼り付けられている。胎土・焼成とも良く，赤黄褐色を呈する。2は，幅の広い単純な複合口縁を有し，器面は無文で，平滑である。色調は赤褐色を呈す。

3～5 幅の狭い複合口縁を有し，頸部以下を欠損している。3は，頸部から大きく外反し，口唇部にいたるが，幅の狭い口縁折り返えし部には，3本を単位とする棒状隆起が4か所に付されている。内面には，櫛歯状工具による施文がみられるが，胎土は砂粒子を多く含み，焼成も，内外面とも剝落が著しく，粗雑な作りの土器である。色調は赤黄褐色を呈す。4は頸部から，わずかに内彎し，口唇部にいたるが，口唇部は，ほぼ水平に反っている。口縁折り返えし部の下端に小さな押捺痕がみられる。口唇部には，極めて細かい縄文が施されている。胎土・焼成とも良く，茶褐色を呈す。5は頸部から漏斗状に開く複合口縁で，口縁折り返えし部下端に，小さな押捺痕が認められる。胎土は粒子が荒く，焼成は，器面に荒れが目立ち良くない。色調は赤褐色を呈す。

6. 頸部以下を欠損している。頸部は，「く」の字状に鋭く折れ，外側に鈍い稜をつくり，口縁は，斜上方にのびる。いわゆる幅の広い有段口縁を形成している。内面には，櫛歯状工具による整形痕が認められる。胎土，焼成とも良く，色調は黒褐色を呈す。

7. 口縁部を欠き，頸部のみで稜を有する突帯が付けられている。胎土焼成とも良く，赤褐色を呈す。



第17図 新田口第1号方形周溝墓出土の土器

8. 頸部が、やや立ちあがって、口縁部が大きく外反し、口唇部には稜を有している。口縁部内外面とも櫛歯状工具によって整形が施されているが、頸部から肩部にかけては、ヘラ状工具によって、櫛歯状工具による施文を削している。砂粒子も多く含有しているが、焼成は堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。また、一部にススの付着が認められる。

9. 頸部は、「く」の字に折れ、口縁は、わずかに内彎してのびる。口縁部内面には、櫛歯状工具による施文がみられる。胎土は、小礫を多量に含有し、焼成もあまり良くないが、内外面とも丹が塗ってある。

10. 頸部は、「く」の字状に鋭く折れ、口縁部は、漏斗状に外方に開く。整形は、櫛歯状工具を使用しているが、内面はヘラ状工具によって研磨されている。口唇部には、横ナデ痕が見られる。胎土焼成とも良く、黄褐色を呈す。

11. 胴部の大部分を欠くが、図上復原可能の土器である。頸部は、緩やかに「く」の字状に折れ、口縁部はそのまま外方に開く。胴部は、緩やかな膨みをもったカーブを描いて底部へと移行している。胴部最大径は、やや下方に位置する。底部は、平底である。

整形は、内外面ともヘラ状工具によって良く研磨され、平滑であるが、口縁部から肩部にかけて、その痕跡をとどめている。口唇部には、横ナデ痕が認められる。胎土は、良く精撰されており、密で、焼成は若干のひび割れがみられるが、堅緻である。色調は、淡黄褐色を呈す。

12. 頸部が、緩やかなカーブを描いて、口縁部は外反する。内外面とも良く研磨され、平滑である。胎土焼成とも良く、黄褐色を呈す。

13. 頸部から緩やかなカーブを描いて、口縁部がわずかに立っている。外面は、ヘラ状工具による整形が顕著であるが、内面は、口縁部の中程まで細縄文が施文されており、1段の「S」字状結節文がつけられ、細縄文を界している。口唇部にも細縄文が施文されているが、いずれも器面が荒れて不明瞭である。色調は、淡黄褐色を呈す。

14. 肩部のみで、口縁部、胴部以下を欠損している。肩部は、わずかな膨みをもった起伏が見られる。内面には輪積痕がみられ、胎土・焼成とも粗悪である。色調は、薄茶褐色を呈す。また一部分、ススの付着が認められる。

15. 胴上部の一部を欠損する。コンパクトな小形壺形土器で、頸部は緩やかな「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。底部は平底であり、器高に比して底部は大きい。口唇部には刻みを施し、器面は、ヘラ状工具によって整形されているが、手捏ね土器的様相を残している。内面には、淡い沈線が見える。胎土は良く精撰されており、密であるが、焼成は、軟質である。色調は、薄茶褐色を呈す。また、一部分ススの付着がみられる。

16. 口縁部の一部を欠くが、ほぼ全形をとどめている。小形で面長な土器であり、平底の底部は器肉が厚い。15と同様ヘラ状工具による整形痕が認められるが、手捏ね土器的様相を残している。胎土焼成とも同様で、色調は、黄褐色を呈す。また、一部分ススの付着が認められる。

17～20. 口縁部または、胴上半部を欠く小形の壺形土器で、ヘラ状工具による粗雑な整形痕が残っている。緩やかな膨みをもった胴部からそのまま底部へ移行する。底部は平底であり、上底のものもある。17の胎土・焼成は、いずれも良好で、色調は、17・18が黄褐色、19・20が灰褐色を呈

す。また、17・18・19の胴下半部にススの付着がみられる。

埴形土器（第17図21）

コンパクトな埴形土器であって、完形品である。底部は、平底を呈し、そのまま緩やかに内彎し、口縁部にいたる。口唇部は不整形である。全面をへら状工具によって整形が施されているが、下部は、荒く削っている。胎土は、砂粒子を含んでいるが密で、焼成は堅緻である。色調は、黄褐色を呈す。また、半面ススの付着がみられる。

土器底部（第18図1～23）

底部は、おおよそ2種類に大別できる。

- ① 胴下部がくびれて底部にいたるもの（1～15）。
- ② 胴部からそのまま底部にいたるもの（16～23）。

これらは、いずれも平底であるが、上底を呈するものもある（16～23）。また、1・2は、底部に焼成前の穿孔があり、とくに、2は、底部に木葉痕をとどめ、上下から竹管状の工具で穿孔している。胎土には、若干砂粒子を含有するものもあるが、焼成は、いずれも良い。なお、16の外面上には、丹が塗ってある。

鉢形土器（第19図1～4）

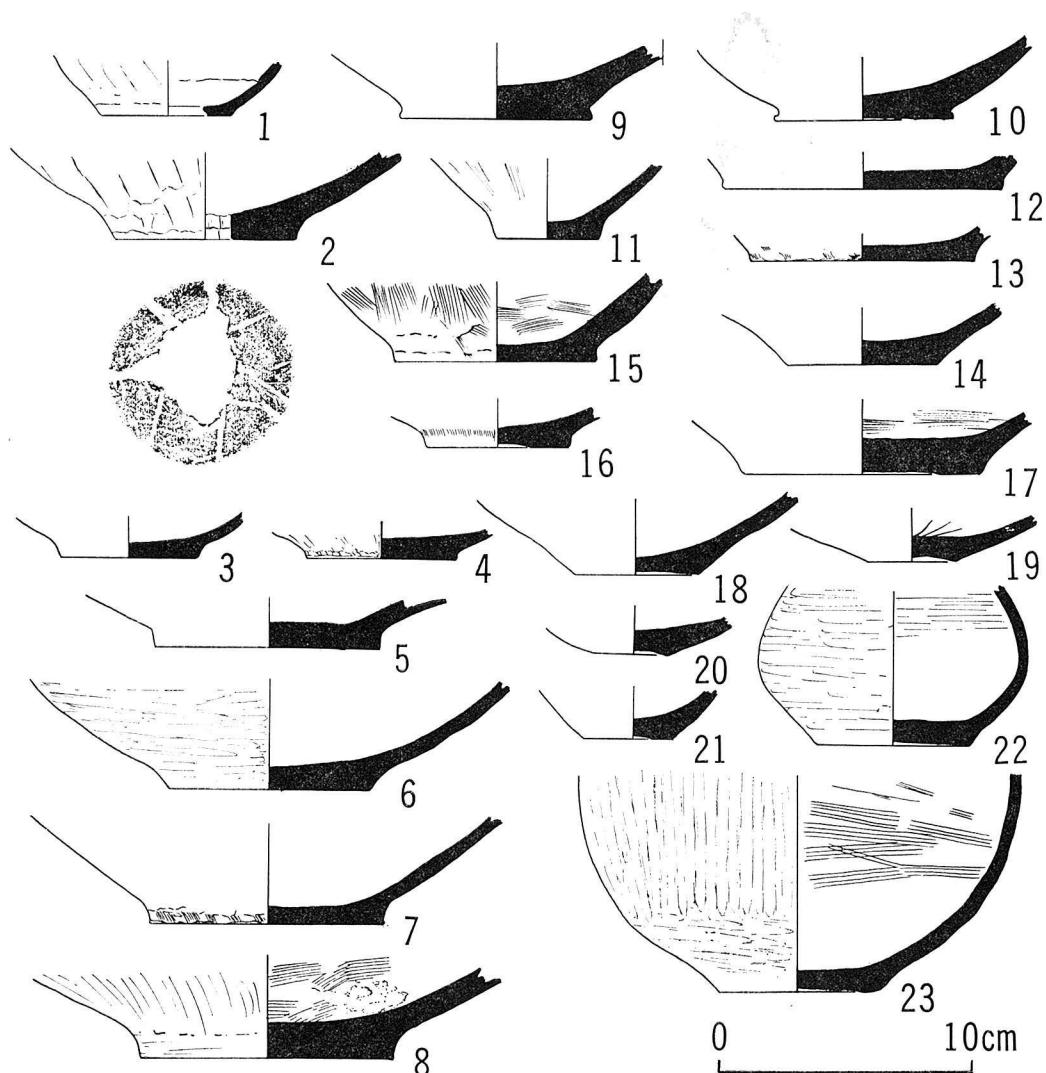
1. $\frac{1}{3}$ 程欠損している。口縁部は、やや立ちぎみで、頸部内側に鋭い稜を有している。胴部最大径は下半にあり、下膨れ形を呈している。底部は平底である。整形は、へら状工具で、斜下方へ向って行なわれ、良く研磨されて平滑である。内面もへら状工具で整形されているが、部分的に輪積痕がみえる。胎土は良く精撰されており、密である。焼成は器面に荒くひびが入っているが堅緻であって比較的作りの良い土器である。色調は、淡黄褐色を呈し、部分的に内外面に丹塗り痕がみられる。

2～4. 底部近くから、緩やかに内彎し、口縁部にいたる。この口唇部には、一つの丸い突出し部がある。また、横ナデ痕がみえる。3の口縁部は、わずかに外反している。整形は、2・3がへら状工具によって良く研磨されているが、4は、櫛歯状工具による施文もみられる。胎土は、いずれも砂粒子を含むが密であり、焼成も良い。色調は、1・2が淡褐色、3は茶褐色を呈す。

甕形土器（第19図5～11）

5～10. いずれも口縁部と頸部のみである。頸部は、緩やかに「く」の字に折れ、口唇部付近でわずかに外反するものである。いずれも、へら状工具による整形が施されているが、櫛歯状工具による整形痕を若干とどめているものもある。胎土は、砂粒子を含む。焼成は堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

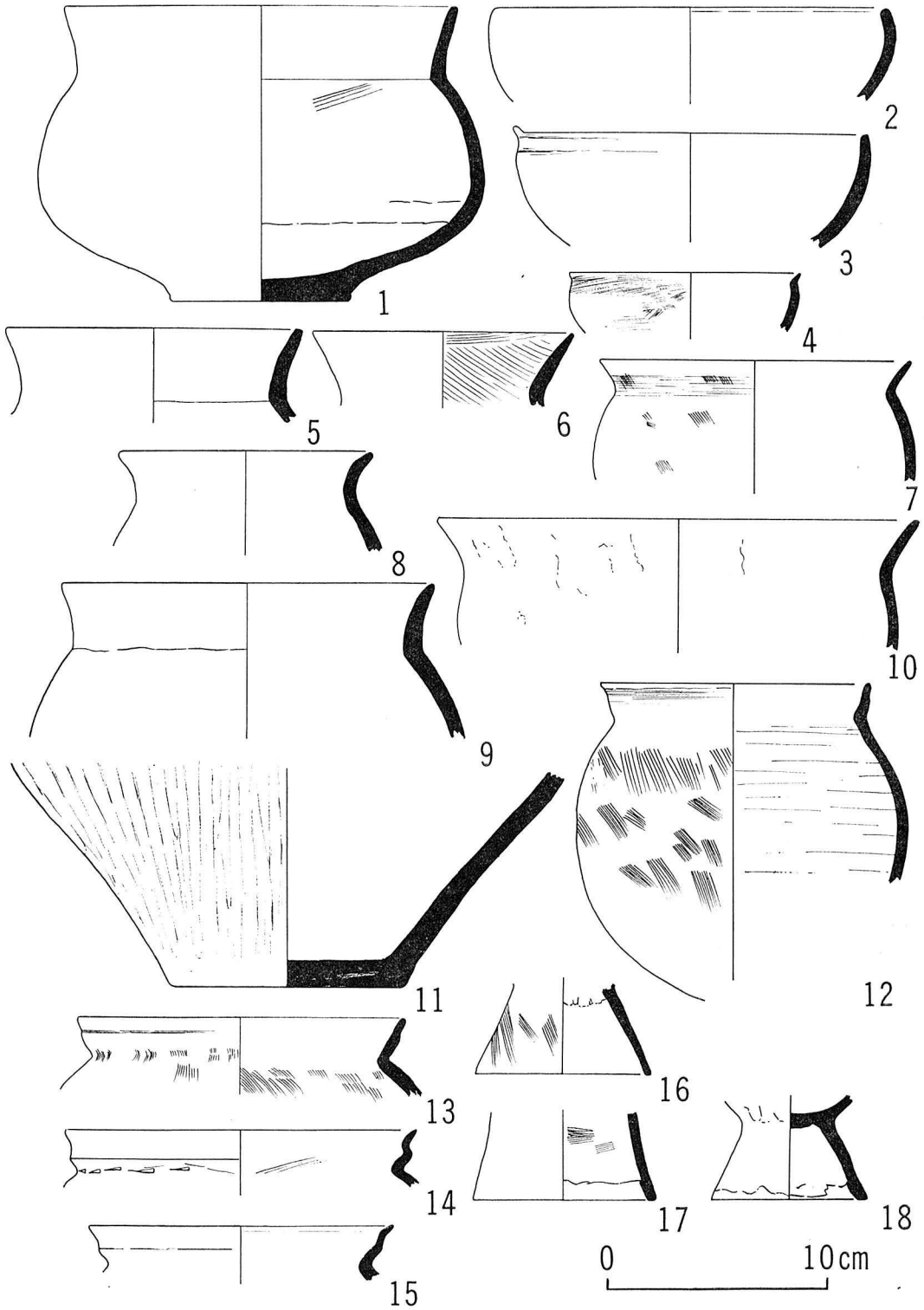
11. 底部であるが、胴部からそのまま底部に移行し、平底である。色調は、黄茶褐色を呈す。



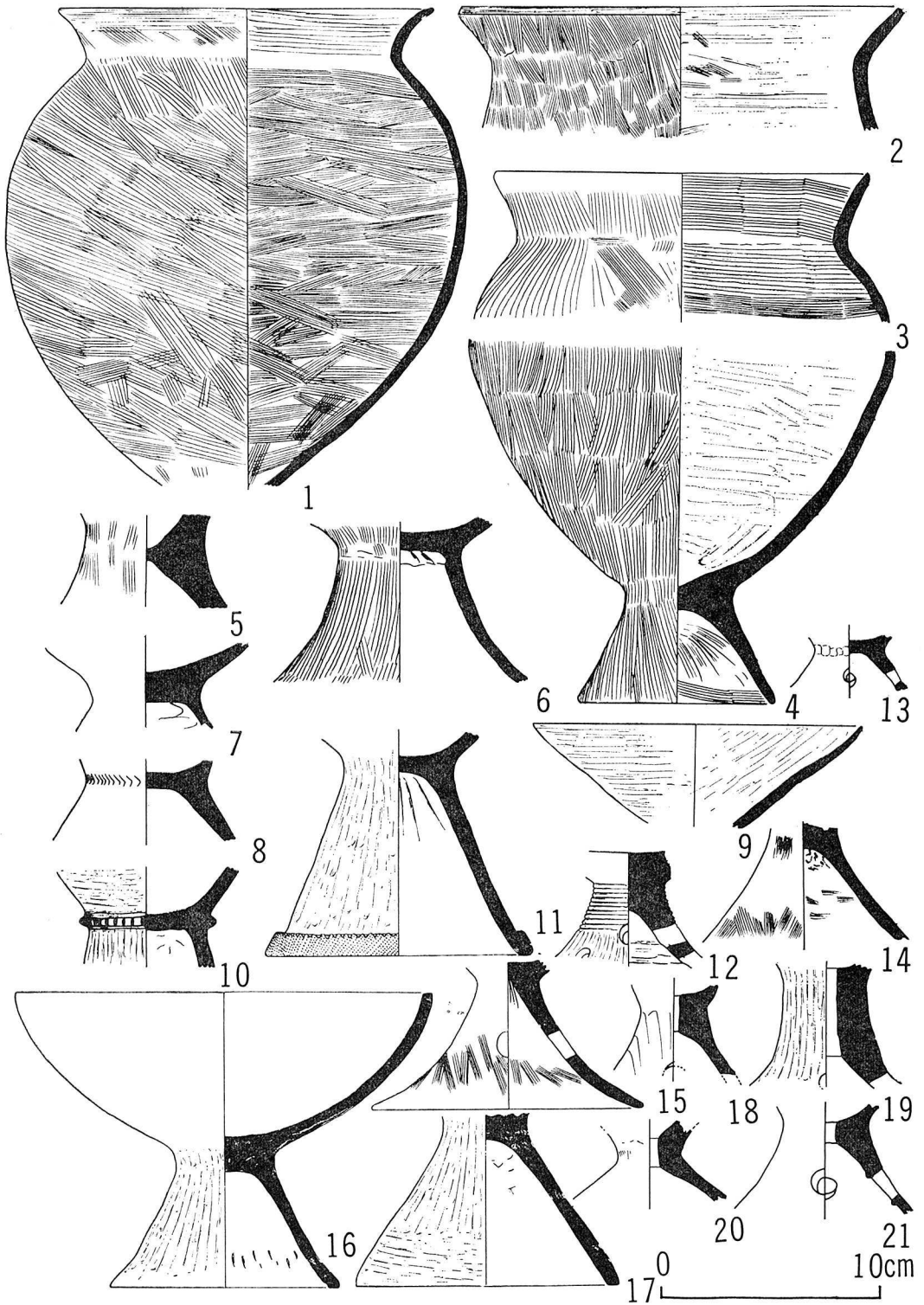
第18図 新田口第1号方形周溝墓出土の土器

台付甕形土器（第19図12～15，第20図1～10）

12～15 口縁部は、いわゆる「S」字状を呈し、頸部は鋭く「く」の字状に折れている。器厚は、いずれも薄手である。12は、胴下半部を欠損している。胴部は緩やかな膨みをもって脚部へ移行し、胴部最大径は、上半に位置する。口縁部には、横ナデ痕が認められ、胴部は、櫛歯状工具による施文が部分的にみられるが、ヘラ状工具によって整形が施されている。内面は、繊維状のものを使って横方向に整形し、その淡い沈線による整形痕をとどめている。胎土は、多量に小礫を含み、それが器面に露出しており、あまり良くない。焼成は、軟質で、内外面に剝落がみられる。色調は、暗褐色を呈す。また、全面にススの付着がみられる。13～15は、いずれも口縁部と頸部のみであって、口縁部に鈍い稜を有している。13の頸部には、櫛歯状工具による施文がみられ、14の頸部には、ヘラ状工具による突刺しが施されている。胎土は、いずれも砂粒子を多く含むが密である。



第 19 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器



第 20 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の土器

焼成は良い。色調は、暗褐色を呈す。

16~18 脚部のみである。16は、外面に、17は、内面に楕歯状工具による施文が見られ、18は、へら状工具による整形が施されている。また、17・18の脚の底部内側は折り返えされている。いずれも胎土は良く精選されて密で、焼成も良い。色調は、茶褐色を呈す。

1. 脚部を欠損している。頸部は鋭く「く」の字状に折れ、口縁部は外反している。胴最大径が上半部にあり、そこから緩やかなカーブをもって脚部へ移行する。内外面楕歯状工具による施文がみられる。胎土は、小礫を含んでいるが、良く精撰されている。焼成は、器面に荒れがみられるが堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

2. 胴部以下を欠損している。頸部は、緩やかに「く」の字状に折れ、口唇部は平坦で、稜線を描いている。器面全体に楕歯状工具による細い整形が施され、内面も淡い沈線が描かれている。口唇部は、横ナゲ痕が見られる。胎土は、良く精撰されて密で、焼成は、堅緻である。色調は、淡黄褐色を呈す。

3. 頸部は、「く」の字状に折れる。内外面とも、楕歯状工具による施文がみえる。楕歯状工具は一定ではなく、数本を使用している。胎土は、小礫を含むが密であり、焼成も器面にひび割れが目立つが堅緻で良好である。色調は、赤褐色を呈す。

4. 胴上半部以上を欠損している。胴部は緩やかなカーブを描いて脚部にいたる。脚部は「ハ」の字状を呈するが、わずかに膨みをもっている。現存部から推定して、胴最大径を上半部に位置し、1と同類の器形と考えられる。整形は、外面を楕歯状工具により、内面はへら状工具によって施されている。胎土は、砂粒子を含む。焼成は堅緻である。茶褐色を呈す。

5~8. 頸部及び脚部である。5・6は、楕歯状工具による整形が施され、「ハ」の字状に緩やかに外反する。7は、脚内部をへら工具で削りとっている。8の頸部には、逆「く」の字状の刻みがある。いずれも胎土焼成とも良く、色調は、5・8が黄褐色、6・7が赤褐色を呈す。

高坏形土器 (第20図9~17)

9. 口唇部から直線的に縮まる坏部のみで、脚部を欠損している。内外面ともへら状工具による整形が施されている。胎土焼成も良い。色調は、赤褐色を呈す。

10. 頸部に一本の突帯を有するものである。突帯には、棒状工具による刻みが施されている。坏部は横に、脚部は縦方向にへら状工具で整形している。胎土は小礫を含むが密である。焼成は堅緻である。淡黄褐色を呈す。

11. 「ハ」の字状に、ほぼ直線的に開く脚部で、脚端部が折り返えされている。折り返えし部には、細縄文が施文され、その上端部には、棒状工具による刻みがみられる。器面は、へら状工具による整形が施されている。胎土には小礫を含むが堅緻である。赤黄褐色を呈す。

12. 数状の沈線を有する脚部で、上下に3孔づつ6孔が穿たれている。胎土焼成とも良い。淡黄褐色を呈す。

13. コンパクトな脚部で、頸部には小さな押捺文が施され、孔が穿たれている。胎土は砂粒子を

含む。色調は、赤褐色を呈す。

14・15. 「ハ」の字状に外反する脚部で、内外面に楕歯状工具による施文がみえる。15の脚部には孔が穿たれている。胎土は、砂粒子を含むが密である。色調は、14が淡黄褐色、15が赤黄褐色を呈す。

16. 唯一の完形品である。口縁部から緩やかなカーブを描いて脚部にいたる。脚部は、「ハ」の字状に開く。内外面ともへら状工具による整形が施されている。焼成は、へら割れが目立つが堅緻である。灰褐色を呈す。

17. 「ハ」の字状に、ほぼ直線的に開く脚部である。内外面ともいう状工具による整形が施されている。胎土に小礫を含む。焼成は堅緻で、作りの良い土器である。色調は、淡黄褐色を呈し、部分的に丹塗り痕が認められる。

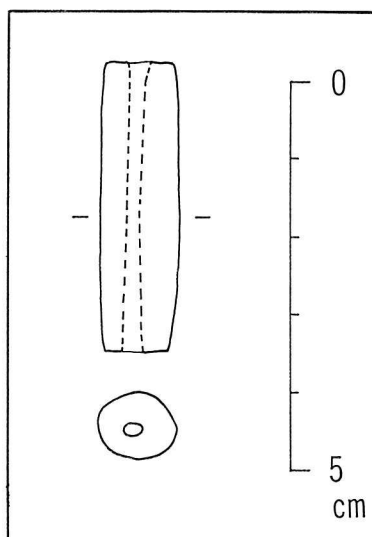
器台形土器 (第20図18~21)

18~21. 頸部のみである。中央に一孔を穿ち、器面は、へら状工具による研磨痕がみられる。18~21の脚部には孔、19は4孔を有している。胎土焼成とも良い。色調は18・20・21が灰褐色、は赤褐色を呈す。

(2) 第1号方形周溝墓、溝内出土の管玉

(図版十七の7) (第21図)

碧玉岩製。通有の例のように、濃緑色を呈しているが、著しい滑沢はない。造りは粗雑で一部扁平なところもある。大きさは、長さ3.80cm、直径1.00cmを測る。穿孔は、両方よりされているが、その彫穿にさほどの狂いはない。



第 21 図 新田口第 1 号方形周溝墓出土の管玉

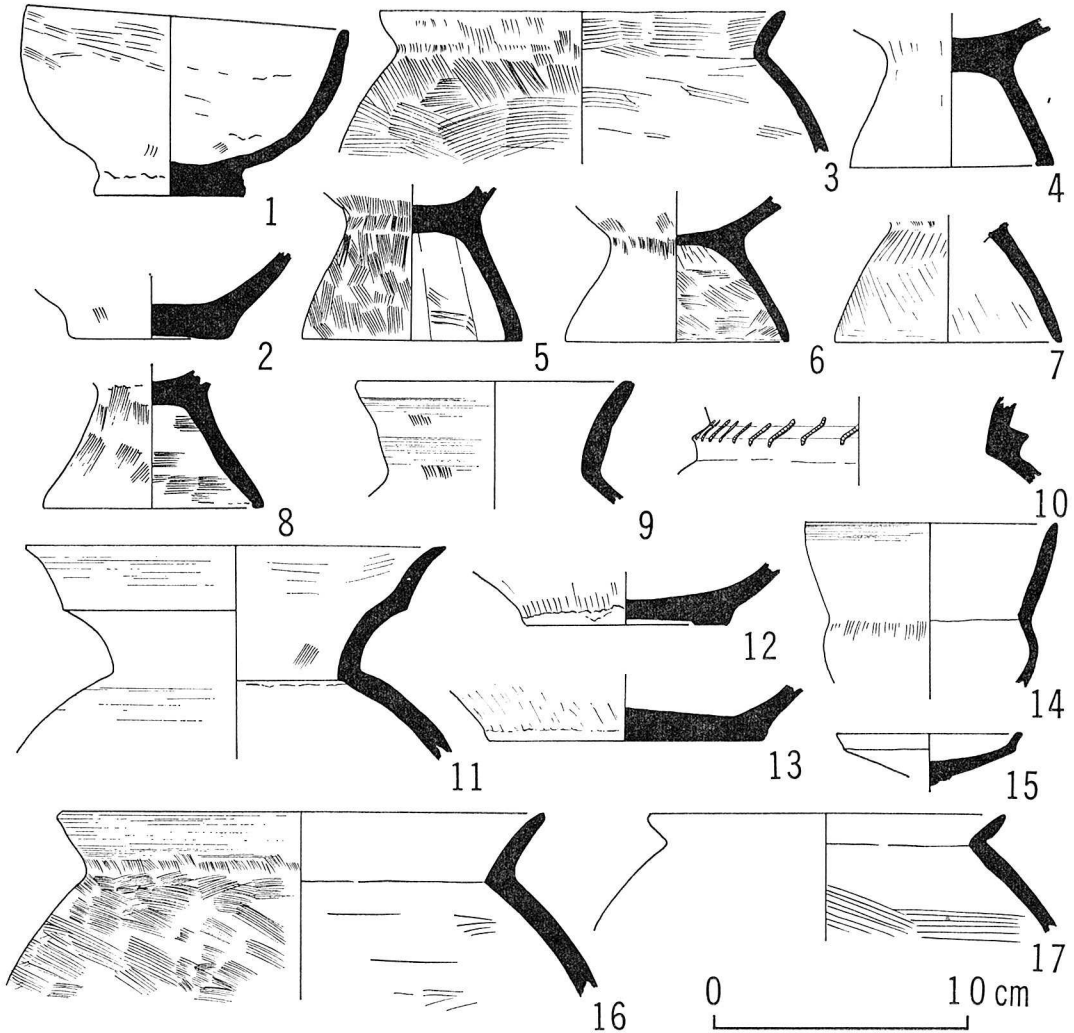
(3) 第2号方形周溝墓、溝内出土の土器 (第22図)

碗形土器 (第22図1)

膨みをもった底部から、若干くびれて、緩やかなカーブをもって内彎ぎみに口縁部にいたる。底部は平底で、頸部にはへら状工具による整形時のめくれがみられる。口縁部付近には、櫛歯状工具による施文がみられるが、その上部からへら状工具によって整形されている。胎土は良く精撰されているが、焼成は、軟質で器面の磨耗が著しい。色調は、淡黄褐色を呈す。

土器底部 (第22図2)

上げ底の底部から、若干くびれて胴部へ移行するものである。胎土・焼成とも良い。色調は、茶褐色を呈す。



第22図 新田口第2・3号方形周溝墓出土の土器
〔2号(1~8)・3号(9~17)〕

台付甕形土器（第22図3～8）

3. 頸部は鋭く「く」の字状に折れ、口縁部は、若干立ちあがる。内外面とも櫛歯状工具による施文がみられる。砂粒子を含むが密である。焼成は、器面にひび割れ、剝落がみられるが堅緻である。色調は、黄茶褐色を呈す。

4～8. 脚部のみである。4～7は、膨らんだ「ハ」の字状の脚である。8は、わずかに開く。整形は、4がへら状工具で、5～8は櫛歯状工具による整形が施されている。胎土・焼成とも良く、色調は、4～6が茶褐色、7・8が黄褐色を呈す。

（4） 第3号方形周溝墓、溝内出土の土器（第22図）

壺形土器（第22図9～11・14）

9. 「く」の字状に折れた頸部からわずかに立ちあがって、口縁部は外反している。口縁部には、淡い沈線の横ナデ痕がみられ、一部、櫛歯状工具による施文もみられる。胎土は、密である。焼成は、軟質である。淡黄色を呈す。

10. 口縁部を欠き、頸部のみであるが、頸部に稜を有する突帯が囲っている。突帯には、櫛歯状工具による刻みが施されている。砂粒子を含む。焼成は、軟質である。赤褐色を呈す。

11. 頸部は、鋭く「く」の字状に折れ、内側に稜をつくり、有段の口縁部は外反している。口縁部には、淡い沈線がみられる。砂粒子をむが、良く精撰されている。焼成は軟質である。淡黄褐色を呈す。

14. 底部を欠くが、小形の壺形土器である。頸部のくびれは緩やかであるが、内側に稜を作り、口縁部は、やや内彎ぎみで立つ。口縁部には淡い沈線の横ナデ痕がみられる。肩部には、櫛歯状工具の施文がみられるがへら状工具によって良く研磨され、平滑である。胎土は、小礫を含むが、密である。焼成は堅緻で良い。薄茶褐色を呈す。また、半面にススの付着が認められる。

土器底部（第22図12・13）

平底の底部であり、12は、上げ底を呈する。いずれもへら状工具による整形がみられ、底部の端がめくれている。胎土・焼成とも良く、赤褐色を呈す。

器台形土器（第22図15）

坏部のみである。坏部の浅い、薄手の器台であり、頸部から直線的に外方に開き、口縁部は、稜を有して立ちあがる。胎土は良く精撰されている。焼成は軟質で、器表面に剝落がみられる。色調は、淡黄色を呈す。また、坏部内面には丹が塗ってある。

台付甕形土器（第22図16・17）

16. 頸部は「く」の字状に折れ、内側には鋭い稜を有している。口縁は外反している。外面は、

櫛歯状工具による施文が顕著である。口縁部は、横ナデ痕がみられる。内面は、へら状工具によって整形されている。胎土に砂粒子を含む。焼成は堅緻である。色調は、黒褐色を呈す。また、全面にススの付着がみられる。

17. 頸部は「く」の字状に鋭く折れ、口縁部の幅の狭い土器である。頸部内側には稜を有している。外面は、へら状工具による整形が施されている。内面は、櫛歯状工具の施文がみられる。砂粒子を多量に含む。器面には、砂粒が顕著に露出している。色調は、赤褐色を呈す。

(5) 第4号方形周溝墓、溝内出土の土器 (第23図)

壺形土器 (第23図2)

胴上部を欠損しているが、大形の壺形土器である。胴部は、膨んだ緩やかなカーブを描いて底部に移行する。底部は、上底である。外面は、櫛歯状工具による施文が見られるが、その上部をへら状工具によって整形している。小礫や、砂粒子を含む。色調は、茶褐色を呈す。また、一部分ススの付着がみられる。

土器底部 (第23図3～5)

いずれも壺形土器の底部と思われる。底部は平底で、5には木葉痕をとどめている。外面は、櫛歯状工具の施文の上からへら状工具でそれを消している。内面は、へら状工具で横方向に磨いている。3は、胎土・焼成とも良いが、4・5は、砂粒子を多く含む。色調は、3が茶褐色、4・5は黄褐色を呈す。

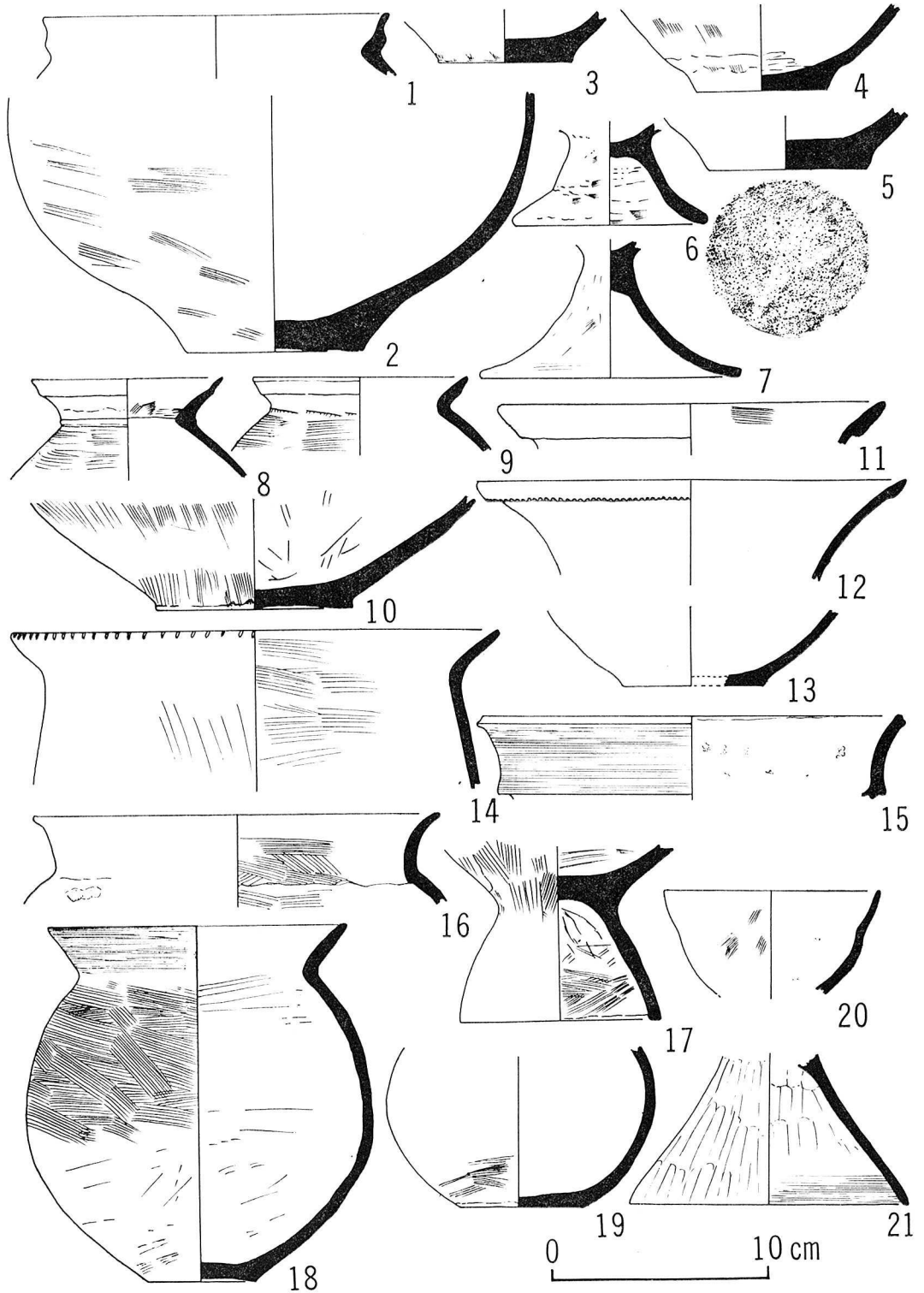
台付甕形土器 (第23図1)

いわゆる「S」字状の口縁部で、頸部は鋭く「く」の字状に折れている。砂粒子を含む。焼成は良い。暗褐色を呈す。

高坏形土器 (第23図6・7)

6. 頸部から、やや膨みをもって脚裾部が開いている。外面は、起伏が著しい。また、繊維質のもので横ナデした淡い沈線がみられる。胎土は、荒い粘土粒で作成されている。焼成は堅緻であるが粗製の土器である。淡黄褐色を呈す。

7. 「ハ」の字状に開く脚部で、外面は、へら状工具によって整形されている。胎土は密である。焼成は軟質で、ひび割れが目立つ。淡黄褐色を呈す。



第 23 図 新田口第 4・5・6 号方形周溝墓及び A 溝・B 溝出土の土器

(6) 第5号方形周溝墓，溝内出土の土器 (第23図)

壺形土器 (第23図8～10)

8・9. 頸部は「く」の字に鋭く折れ、稜をもつ有段口縁である。8の頸部には、わずかな突帯を有し、外側にも稜線を描いている。外面は、両方とも櫛歯状工具の施文をとどめている。胎土は砂粒子を含む。焼成は軟質で、器表面が磨耗している。色調は、8が淡黄褐色、9が薄茶褐色を呈す。

10. 平底の壺形土器の底部である。外側は、櫛歯状工具の施文がみられ、内面は、へら状工具によって整形を施している。胎土・焼成とも良く、茶褐色を呈す。また、半面にススの付着がみられる。

(7) 第6号方形周溝墓，溝内出土の土器 (第23図)

壺形土器 (第23図11～13)

11・12. 口縁部のみである。頸部から外反し、幅の狭い複合口縁を有するものである。12は、複合口縁下端に棒状工具による刻み目がみられる。器表面は、へら状工具による整形が施されているが、11の内面には、櫛歯状工具による施文もみられる。胎土は、ともに砂粒子を含む。焼成も良好である。色調は、淡黄色を呈す。

13. 底部で、焼成後の穿孔をうけている。胎土は砂粒子を含む。焼成は良い。色調は赤褐色を呈し、丹が塗ってある。

台付甕形土器 (第23図14)

14. 口縁部は、緩やかな「く」の字状の頸部からやや内彎している。口唇部には棒状工具による刻み目がみられる。器表面は、へら状工具による整形が施されているが、内面は、櫛歯状工具による施文がみられる。胎土は、砂粒子を多量に含み、焼成もよくない。色調は、暗褐色を呈す。

(8) 第7号方形周溝，溝内出土の土器 (第23図)

壺形土器 (第23図15)

口縁部のみである。口縁は、外反ぎみであるが、かなり立っている。口唇部には稜を有している。器表面には横ナデ痕がみられる。内面はへら状工具による整形であるが、かなり剝落している所がある。胎土は、砂粒子を含む。焼成は、軟質である。色調は赤褐色を呈す。

甕形土器 (第23図16)

緩やかな「く」の字状の頸部から、やや立ちぎみの口縁を有し、口唇部は外反している。頸部内

側には、鈍い稜を有している。器表面は、ヘラ状工具による整形であるが、内面は、櫛歯状工具による施文がみられる。胎土は、砂礫を含む。焼成は、堅緻である。色調は、黒褐色を呈す。

台付甕形土器 (第23図17)

脚部のみである。緩やかな「く」の字状の頸部から「ハ」の字状に開く脚部を有す。脚部底唇部が、わずかに折り返えしてある。器表面は、櫛歯状工具による施文が見られ、脚部接合内部には、ヘラ状工具による削り取りがみられる。胎土は、小礫を多く含む。焼成は堅緻である。色調は、灰褐色を呈す。

(9) 鍛冶谷・新田口方形周溝墓溝内出

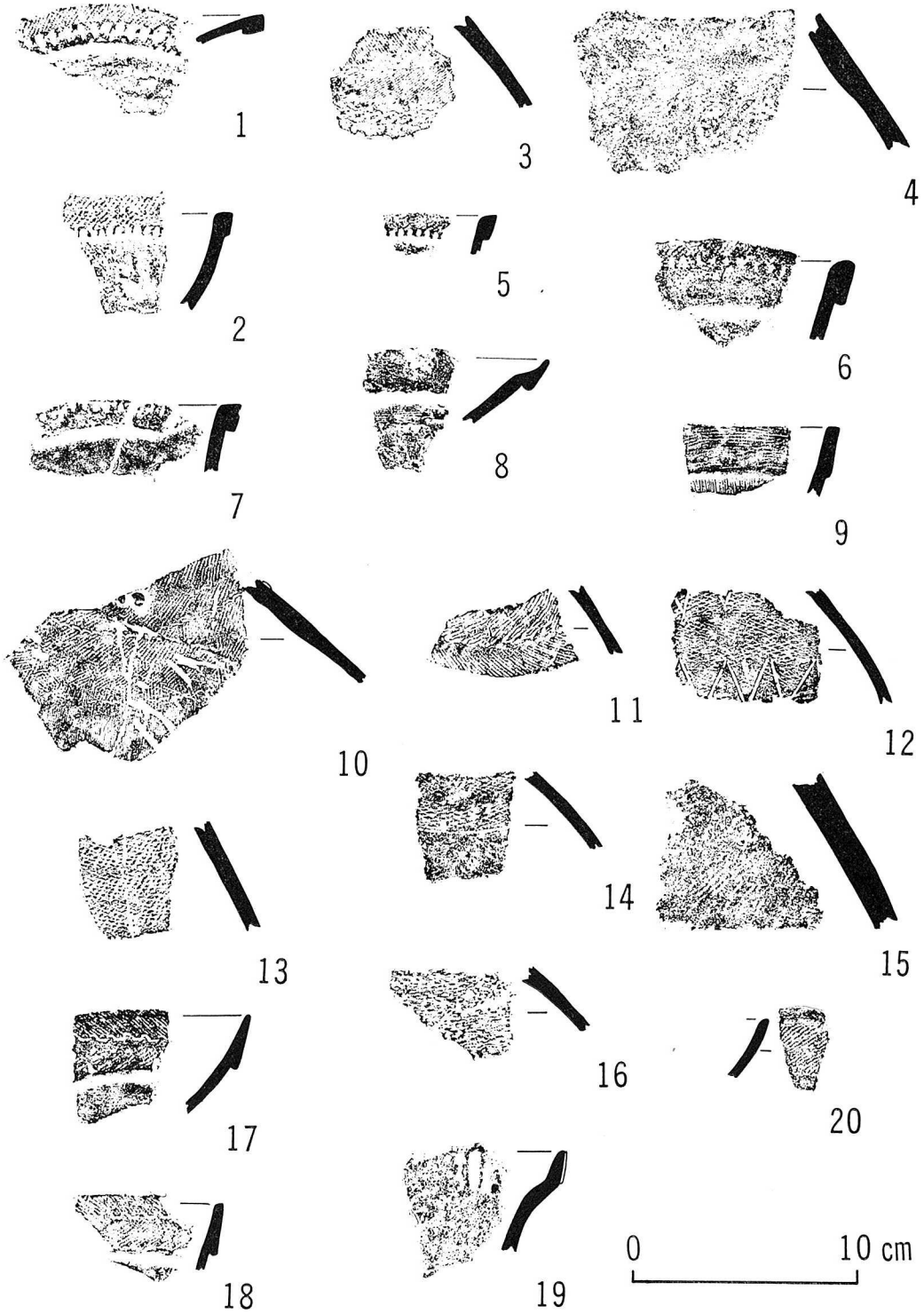
土の土器拓影

(第24図)

1・2. 鍛冶谷第1号方形周溝墓溝内出土のものである。1は、口縁部が漏斗状に大きく開く。2は口縁部が内彎気味にもちあがる。ともに幅の狭い複合口縁で、折り返えし部には細縄文と、その下端に刻みを施している。1は胎土・焼成とも良く、丹塗りである。2は、胎土は良く精撰されているが、焼成は軟質である。色調は、ともに黄褐色を呈す。

3・4. 鍛冶谷第2号方形周溝墓出土の土器である。これらは、ともに壺形土器の肩部で、3には、細縄文(RL・LR2本立ての結束のある羽状縄文)が施され、胴部よりには、2段のS字状結節文がつけられ、細縄文を界している。4は、荒い斜縄文が施されている。ともに胎土焼成がよく、淡黄褐色を呈す。

5~14. 新田口第1号方形周溝墓出土の土器である。5は立ちぎみの幅の狭い複合口縁で、折り返えし部には羽状細縄文と、その下端に、刻みを施している。胎土・焼成とも良く、色調は淡黄褐色を呈す。6も、やや立ちぎみの複合口縁で、口唇部に細縄文と、その外端に刻みを施している。胎土は砂粒子を含む。内面丹塗り。7は、立ちぎみの幅の狭い複合口縁で、口唇部外端に刻みを施してある。胎土・焼成とも良く、全面丹塗り。8は、頸部から大きく外方に開く口縁で、複合口縁内面は、彎曲している。折り返えし部上部には細縄文が、下端部には、櫛歯状工具による施文がみられる。胎土は、砂粒子を含む。色調は、黄褐色を呈す。9は、立ち気味の有段口縁で、口縁部には櫛歯状工具による施文がみられる。胎土・焼成ともよく、色調は、黒褐色を呈す。10~16は肩部片である。10は、斜縄文が施され、その中に、横位のS字状結節文が走り、下部は、それによって細縄文を界している。また上部には、円形浮文が貼り付けてある。胎土・焼成とも良く、文様内は、丹塗りである。11は、羽状縄文が施され、胎土には砂粒子を含む。焼成はよく、色調は、淡黄褐色を呈す。12は、網目状交叉絡縄文によって埋められた連続山形文が施されている。胎土は砂粒子を含む。焼成は堅緻である。山形文の上下には丹が塗ってある。13は、網目状交叉絡縄文が施されている。色調は、薄茶褐色を呈す。14は、荒い斜縄文が施されている。胎土は、砂粒子を含む。焼成は軟質で、器面が荒れている。色調は、黄褐色を呈す。16は、横位の絡条体圧痕が施されて



第 24 図 鍛冶谷第 1・2 号・新田口第 1・2・4・5 号方形周溝墓出土の土器拓影

いる。胎土は、砂粒子が多い。色調は、淡黄褐色を呈す。

17・18. 新田口第2号方形周溝墓出土の土器である。17は、外方に、わずかに内彎気味に開くが18は、立ち気味の複合口縁を有する。いずれも、折り返えし部には、羽状縄文が施され、その中に横位にS字状結節文が施文されている。胎土には、砂粒子を含み、焼成は、良好である。色調は淡黄色を呈す。

19. 新田口第4号方形周溝墓出土の土器である。ラップ状に開く。頸部から弱い稜をもってほぼ直立に近く立つ有段口縁である。その外側には、断面三角形の2本の貼り付け文を縦につけている。胎土は密であるが、焼成は軟質である。色調は、薄茶褐色を呈する。

20. 新田口第6号方形周溝墓出土の土器である。内彎気味に開く口縁で、内側に細縄文が施してある。外側は、ヘラ状工具による整形がみられ、丹が塗ってある。胎土・焼成とも良い。

第3節 新田口発掘地域外、溝内発見の遺物

(1) 新田口A溝、溝内発見の土器

(図版十七の6) (第23図)

壺形土器 (第23図18・19)

18. 頸部は、「く」の字状に折れ、そのまま口縁部は外方にのびている。胴部は、緩やかなカーブを描いて底部にいたる。胴部最大径は、胴下半部に位置する。底部は、平底で若干上げ底気味である。器表面は、口縁部で横ナデ痕がみられるが、全体的に櫛歯状工具による整形がみられ、胴下半部では、それをヘラ状工具ですり消している。内面は、ヘラ状工具で、横方向へ整形している。胎土の粒子は荒い。焼成は、堅緻であるが、器表面は剝落が目だつ粗製の土器である。色調は、赤黄褐色を呈す。

19. 肩部以上を欠失している。胴部は、球形気味のカーブを描く。底部は平底である。器表面は胴下部に櫛歯状工具による施文がみられるが、ほとんどヘラ状工具によって研磨されている。胎土は、砂粒子を含む。焼成は堅緻で良好である。色調は灰褐色を呈す。また、部分的にススの付着が認められる。

(2) 新田口B溝, 溝内発見の土器 (第23図)

壺形土器 (第23図20)

底部を欠いている。頸部のくびれは小さく口縁部は、わずかに内彎している。広口の小型壺形土器である。器表面には櫛歯状工具による施文もみられるが、へら状工具によって整形が施されている。胎土には、砂粒子を含み、焼成は堅緻である。内外面とも丹が全体に塗ってある。

高坏形土器 (第23図21)

「ハ」の字状に、ほぼ直線的に開く脚部である。内外面ともにへら状工具による整形が施されており、内面、底部は横ナデ痕が認められる。胎土には砂粒子を含む。焼成は良好である。色調は黄褐色を呈するが、部分的に丹塗りの痕跡がみられる。

第4節 新田口第1号住居址出土の土器

(図版十七の1～5) (第25図)

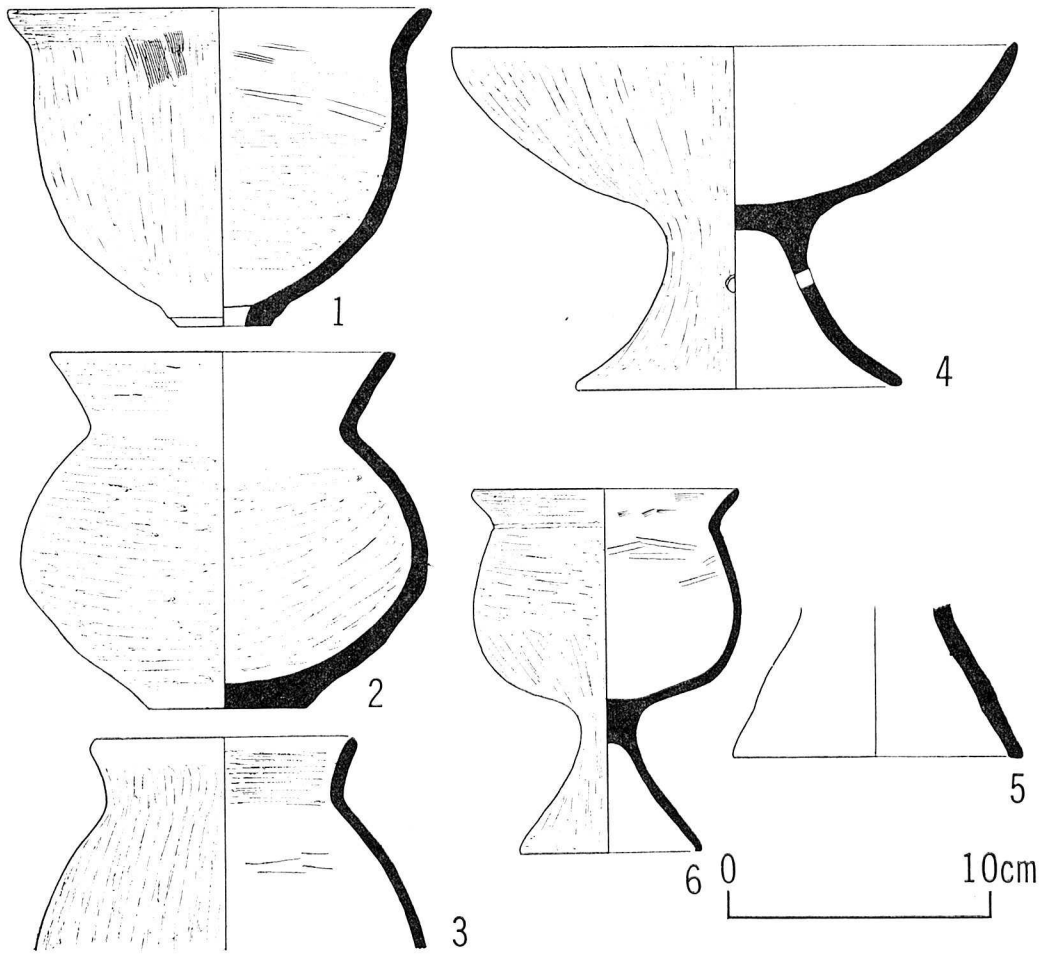
本住居址南隅のピット内(貯蔵穴)に横転して甗セットが、明確な出土状態を呈して発見されたので、一括して説明する。なお、他の土器は、床面から出土したものである。

甗セット (第25図 1～3)

1. 甗形土器で、口縁部は緩やかに外反し、頸部から胴部へほぼ垂直に移行する。胴部最大径は上部にあり、胴部中央より底部に膨みをもって一段を有し、底部にいたる。底部は、平底で、焼成前の穿孔があり、径は1.8cmを測る。器面は頸部から口縁部にかけて、横に淡い沈線の横ナデ痕がみられ、頸部では、その上部からへら状工具による整形痕が見られる。内面も横にへら状工具による整形が施されている。器面にはひび割れや荒れがみられる。胎土は砂粒を含むが密であり、焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈す。

2. 壺形土器で、頸部は「く」の字状に折れ、口縁は、ほぼ直線的に斜上方に延びている。頸部から胴部にかけては、球形を呈すが、胴下半部は緩やかに底部へと移行する。胴部の最大径は、下半部にあつて、底部は平底である。器面には、胴部にへら状工具による整形痕がみられる。胎土は、砂粒子を含む。色調は、淡黄色を呈し、焼成は堅緻である。

3. 甗形土器で、胴部を切断し、台として使用したものである。頸部は緩やかに「く」の字状に折れ、口縁部は、わずかに外反している。器面は、頸部から胴全般にかけて、縦状にへら状工具による整形が施されている。胎土は小礫を含み、荒い。焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈す。



第 25 図 新田口第 1 号住居址出土の土器

高坏形土器 (第25図 4・5)

4. 全体に丹を施した土器である。坏部は緩やかに内彎し、口唇部は丸味を帯びている。坏部と脚部の接着部分は、緩やかに彎曲している。脚部は、外側に反って開いている。また、孔が穿たれている。器面全体にヘラ状工具による整形痕がみられ、外面は縦に、内面は横に整形されている。胎土は、砂粒子を含む。焼成は良い。

5. 脚部だけである。中央から内彎する膨みをもって裾部にいたる。裾端部は平坦であるが、内側は丸味を帯びている。内面は、ヘラ状工具による整形がみられる。器面は小礫が露出し、荒れが目立つ。色調は赤褐色を呈す。

台付甕形土器 (第25図 6)

コンパクトな台付甕形土器である。口縁部は、わずかに外反し、頸部は「く」の字状に折れ、胴部最大径が胴下半にあり、下膨れ形を呈している。脚部は「ハ」の字状に開く。口唇部から頸部にかけては、淡い沈線の横ナデ痕がみられ、頸部から胴中央部までは、斜め横に、胴中央部から脚部

にかけては、縦にヘラ状工具による研磨痕がみられる。胎土は砂粒子を含む。焼成は、器面に細かいひび割れが目立つが、良好である。色調は、赤褐色を呈す。

第5章 鍛冶谷・新田口遺跡の提起する問題

第1節 鍛冶谷・新田口遺跡における方形周溝墓の分布

戸田市鍛冶谷・新田口遺跡は、標高5mという、旧入間川（現荒川）の自然堤防上に営まれた方形周溝墓群である。これらの四方溝にかこまれ、溝内から底部穿孔土器及び破砕された土器が出土する遺構を「墓」と断定したのは、次のような同種遺構の発見によってである。すなわち、東京都八王子市宇津木向原遺跡では、方台部の土壙からガラス玉が発見され（註12）、埼玉県大宮市大宮公園遺跡でも、方台部中央の土壙からガラス丸玉が出土（註13）。また、長野県飯山市須多ヶ峰遺跡では、「第1号墓壙において、ちょうど勾玉を頂点とした三角形の位置に2個の鉄釧を発見したことはあたかも死者に着葬した装身具の位置を示すものようである。（後略）」（註14）と墳墓説を確定的なものとした。さらに墓として断定できるようになったのは、福岡県糸島郡前原町平原遺跡で、割竹形の棺の存在が推定され、棺内から玉類が二群に分れて出土し、さらに棺外から、素環頭太刀一口、及び方格規矩四神鏡35面など、合計42面の鏡の出土をみた（註15）。さらに、石川県能美郡辰口町西山6号墳の方台部中央の土壙から「朱」が発見されている（註16）。

これらの諸例から、方形に周る溝、溝内から土器の出土する、この種の遺構は、明らかに「墓」として認めることができる。

鍛冶谷・新田口遺跡においても、鍛冶谷第1号方形周溝の方台部に、主体部の存在、および新田口第1号方形周溝の北溝内から碧玉製管玉の発見は、これらを墓とすることを充分可能にし、さらに、溝内からも底部穿孔土器や破砕された土器が出土しており、これらと同種の他の遺構も、そのように認めてさしつかえあるまい。

鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓の分布の様子を把握する場合、それらが、弥生時代後期から古墳時代前期前半の集落の中に営まれ、族長墓あるいは、特定墓として一人一墓制をとり、土壙墓のような共同墓として集落に接するものではないことを前提として、その分布をみななければならないと考える。

鍛冶谷・新田口遺跡発見12基の方形周溝墓の場合、その分布の傾向は、鍛冶谷第1号方形周溝墓

のように1基だけ存在するもの（弥生時代後期のもの）。新田口第1号・2号方形周溝墓のように並行しているもの、鍛冶谷第2号・3号・4号・5号方形周溝墓のように一基一基バラバラに存在するもの。新田口第3号・4号・5号・6号方形周溝墓にみられる互いに切り合っただけに分布しているものの四つの型がある。このうち、新田口で互いに切り合っただけに存在している周溝墓は、時間差のほとんどない（土器は同一型式）ものである。

鍛冶谷第1号方形周溝墓は、他の11基とは時間的な差が大きいため、ここでは、一応別扱いになり除外して考えるが、この他の11基は、ほとんど時間的な差がない。

さて、2基以上発見されている遺跡での方形周溝墓の在り方は、それが、山丘尾根上につくられている福井県鯖江市王山、長泉寺山・古墳群（註17）。低台地上の埼玉県東松山市附川遺跡（註18）、東京都八王子市宇津木向原遺跡（註19）、神奈川県横浜市朝光寺原遺跡（註20）、静岡県沼津市二本松遺跡（註21）、静岡県清水市庵原午王堂山遺跡（註22）などの例は、溝間の切り合い及び共有が見られるが、一列、ないしは二列に並んで、その方向性も観取される。特に、横浜市朝光寺原遺跡の例では、その方向性から分けると5グループに分類できると思われる。このように複数の方形周溝墓が発見される遺跡例では、ある一定の方向性があり、むしろ、方形周溝墓は、このようにあるべきであろう。鍛冶谷・新田口遺跡の場合は、新田口の第1号・2号方形周溝が並んでいる外は、その方向は一定していない。このようにバラバラに分布しているこの遺跡では、南に湾状に入りこんだ沖積地を有する自然堤防上の一地域に鍛冶谷第1号方形周溝墓をつくることのできた、弥生時代後期から、古墳時代前期前半の新田口第1号・2号方形周溝墓をつくる一つの地域集団、すなわち一農業共同体が、同じ自然堤防上の他の農業共同体を結合し、その長の墓を、ある特定の墓域につくらせることによって、その支配権を確立していったものと考えられ、「複数の農業経営体の地縁的結合の進行」（註23）とも考えられるが、一方では、鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓は、その集落（農業共同体）が5m以下の低地にできた自然堤防上に位置しているという地理的条件から、その生産力は河川の氾濫など、自然条件に左右されるため、つねに集落の移動および、集落の崩壊が考えられ、したがって、そこに族長の世襲性はうすく、支配権の移動も考えられ、したがって、その墓制も墓域は決定されてはいるが、このように方形周溝墓が一定の方向をもたないものである。

これに対して、東京都八王子市宇津木向原遺跡や、神奈川県横浜市朝光寺原遺跡など、低台地上の狭範囲で、それぞれ独立した地域集団が営まれている場合は、恒久的な支配者として族長の世襲権が強く、これが墓制のうえにあらわれ、ある一定の方向、配列を保った方形周溝墓をつくったものと考えられる。

第2節 鍛冶谷・新田口遺跡における 方形周溝墓の形態

方形周溝墓の形態について、小出義治氏は「一辺5—6から10数 m の方形区画をもうけ、周囲に幅1—2 m の溝をめぐるすもので、中央に土壙墓をもつものと、明瞭でないものがある。またごくわずかながら封土のあるものもあるが、これをめぐる溝中には破碎された土器、ことさらに底部をうち欠いた土器、また焼成前に底部をえぐりとった土器などが埋納されているばかりがほとんどである。」と規定した(註24)。確かに、現在発見されている各遺跡の例をみても方形周溝墓の形態は、溝が方形にめぐっている。しかも、そのプランは、矩形を呈するものが一般的である。

しかし、これら方形区画を目的として方形に溝がめぐることが前提として、その周溝の各々のプランをみると、おおよそ次のように分類できる。

- I類 溝が方形に一周するもの
- II類 一カ所隅に陸橋を有するもの
- III類 溝の中央部附近に陸橋を有するもの
- IV類 対角線上のコーナー二カ所に陸橋を有するもの
- V類 舟底形の溝を四辺に有するもの
- VI類 「コ」の字形に溝をめぐるもの

しかしながら、一遺跡における形態プランの相違は、その遺跡によってさまざまで、東京都八王子市宇津木向原遺跡ではI類とII類、福井県鯖江市山・長泉寺山でI類・IV類・V類、神奈川県横浜市朝光寺原遺跡ではV類・VI類がある。しかし、個々の形態プランには地域性、時代性は観取されない、また、一遺跡において方形周溝墓が群集していても、それが単にプランの相違が認められるにとどまっている。

鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓のプランは、遺憾ながらプラン全体を現出できなかったものがないが、おおよその傾向をとらえることができ、三つの形態に大別することができる。

I形態 鍛冶谷第1号方形周溝墓のプランは、内側すなわち方台部は直線的であり、コーナーも直角に曲り、掘り方も垂直である。これに対して、外縁は、中間部が若干張り、コーナー部は丸く、内側のコーナーに近づきせばまる。このプランは、方形周溝墓の典型的なものであり、これをI形態とする。しかし、この第1号方形周溝墓の周溝は、その一部を欠き、中央方台部に通じるブリッジを有している。この全体的プランは、先にも記したように、単に形態の相違だけであり、新田口第1号・2号・5号方形周溝墓の周溝にも通じるものである。

II形態 あくまでも、方形に囲周する溝を意識していたにもかかわらず、II形態になると、部分的に形の乱れが現われている。それは、内側方台部の壁が中間部で若干張りのできたことで、鍛冶谷第2号・5号方形周溝と、新田口第3号方形周溝墓にそれが窺える。

III形態 外の壁の張りが大きくなるにつれて、そのコーナー部の丸味が増大し、内側の壁が外側のそれと平行するようになると、隅丸方形プランは大きく崩れ、鍛冶谷第3号4号方形周溝墓のように、小判形(楕円形)を呈するようになり、方形周溝墓本来の隅丸方形(矩形)プランの概念から

若干はずれて行くようになる。

鍛冶谷・新田口遺跡における、このようなプランの相違は、何か、一遺跡に群集している方形周溝の変遷を示唆しているようである。この問題は、周溝の切り合い及び、出土遺物の様相を中心に、後述するところがあろう。

次に周溝の掘り方をみると、Ⅰ形態・Ⅱ形態とⅢ形態の一部の断面はU字形を呈するものが多いが、Ⅲ形態の鍛冶谷第3号や新田口第6号周溝のように垂直に掘られ、底が平らな「□」形を呈している。U字形を呈している周溝は平均して幅も広く深いが、□形の周溝は幅が狭く、深さも鍛冶谷第3号が10cm、新田口3号が20cmと浅くなっている。

さらに、Ⅰ形態・Ⅱ形態の周溝のコーナー部が、中間部より浅く、一辺の溝ごとに、いわゆる舟底状を呈している。特に鍛冶谷第5号周溝は、それが極端である。だがⅢ形態の周溝は、コーナー部も中間部も同じ深さである点注目されよう。

周溝の底部は、新田口第1号・2号周溝の底に、築造当初意識的に掘られたと考えられる掘り込みがみられた。このような遺構は、埼玉県浦和市井沼方遺跡の周溝内の土溝状遺構（註25）、神奈川県東海大学内遺跡の周溝内の土壇状のものや、千葉県野田市堤台遺跡の方形周溝墓溝内の長楕円形のピット（註26）などがあるが、これらの遺構を、もし土壇とすれば、新田口のこの例も、土壇とみてさしつかえないものである。新田口第1号方形周溝墓の方台部から主体部と思われる土壇の発見はなかったが、一概に、その部分に主体部がなかったとは云いきれない。もし、周溝内の掘り込みを土壇とすれば、方形周溝墓の性格を再検討しなければならない。したがって、この段階では、あえて、この掘りこみについては論述することをさけて、資料の追加を待つことにする。

最後に、鍛冶谷・新田口遺跡で発見された12基の方形周溝墓の主体部と封土についてみる。主体部と確認されるものは、鍛冶谷1号方形周溝墓方台上中央に長方形プランをもつ浅い土壇があったが、他の周溝墓には発見できなかった。封土も遺跡が、平坦地であったため、それを確かめることができなかったが、周溝の断面をみると、この遺跡の基盤である黄褐色粘土のブロックが、中央方台部側から流れこんでいることによって、ここに、封土を有していたことが明確になった。したがって、この封土は、まず方形に溝を掘り、周溝のあげ土で形を整え、それから、茨城県東海村前原遺跡（註27）の場合のように、盛り土の上から土壇を掘りこんでいるため、その土壇が深ければ、中央方台部に達するが、封土内に土壇を掘った場合、それが削平されてしまえば、土壇を発見することができない。たまたま、鍛冶谷第1号方形周溝墓の土壇が深かったために、その痕跡が残っていたものである。

第3節 鍛冶谷・新田口遺跡における 方形周溝墓の出土遺物

方形周溝墓溝内から出土した遺物は、圧倒的に土器が多い。しかし、12基の方形周溝墓のうち、土器を多量に有していたものと、そうでないものがある。すなわち、鍛冶谷第2号・3号・4号・5号の周溝、新田口第3号・6号の周溝からは、土器の出土が、きわめて少ない。ただ新田口第4

号周溝墓のコーナー付近から一括土器が出土した。これに対して、鍛冶谷第1号周溝からは、底部穿孔の壺形土器2個、台付甕形土器1個が、一定の間隔をおいて配置されていた。また、新田口第1号周溝からは、各種の器形の土器が多量に出土し、バラエティーに富んでいる。

このように、周溝によって土器の出土量に相違が観取されるが、その傾向は、I形態の周溝墓に土器が集中し（新田口第5号周溝墓はI形式のものであるが、調査範囲が少ないため、土器の量はわからない）、II・III形態の周溝墓は、土器をあまりもたないという傾向が窺える。

本来、溝内には破砕された土器、ことさらに底部をえぐりとした土器などが埋納されている場合が殆んどである（註28）のに、鍛冶谷・新田口II・III形態の周溝からは、別個体の破片が少量ずつ出土したにすぎない。埼玉県内の他の遺跡の例をみると、大宮市下手遺跡の方形周溝墓の周溝内からは、土器がまったく出土していない（註29）。児玉町金屋池脇遺跡の周溝にあった土器はすべて破壊されていない（註30）、など、周溝内の土器の在り方については、いささか疑問を感じる。

溝内の土器は、一般にコーナー部附近に発見される場合が多く、一定の間隔をもって出土する。鍛冶谷・新田口遺跡で、この土器配置状態がつかめたのは、鍛冶谷第1号方形周溝墓であった。ところが、その他のI形態の方形周溝墓においては、その配置の状態を明瞭に把握することができなかった。特に多量の土器が埋納されていた新田口第1号方形周溝では、そのほとんどの土器が、細かく破砕されて、そこに一括出土するが、完全に復原することができない。

このように破砕されている土器については、福井県王山・長泉寺山で注目され、小出義治氏は、この場所で破壊されたのではなく、何れかの別の場所で壊され、ここに運ばれてきたものであることを推測させる、という。また同氏は、この周溝内出土の土器は、埋葬時の墓前祭に使用した土器ではなく、他の場所で、埋葬以前に行なわれる宗教儀礼の存在を肯定し、ススの附着した土器が発見されることから、その儀礼には、煮炊きする行為が伴っており、その儀礼は「モガリ」であると解した（註31）。

ところが、「周溝内の土器は、そのほとんどが溝底になく、また大部分が破砕している。このことは溝内にこれらの土器を入れることを目的としたものではなく、二次的に溝内にはいったことを表わしている。すなわち、埋葬時あるいは、その後、方形区画内で使用された土器が溝内に流入したものと考える。」すなわち、「周溝内に配置したものではない」との見解もある（註32）。

だが、筆者が中心となり調査した、埼玉県北足立郡桶川町加納入山遺跡では、周溝コーナーの浅くなった部分で、台付甕形土器と共に焼土が多量に認められた。この加納入山遺跡では、明らかに溝内で何らかの儀礼行為がなされたことも考えられる。また鍛冶谷・新田口遺跡新田口第1号方形周溝墓の周溝から、二次的に火を受けた台付甕形土器が多量に出土したが焼土は検出されていない。さらに手づくね小型壺形土器が5個と小型甕形土器もあり、祭礼の様相を呈する出土遺物があることから、小出義治氏のいう他の場所で埋葬以前の宗教儀礼に使用されたものが、埋納されたものとする考えを全面的に否定することはできない。だが、加納入山遺跡では、底部が打ちかかれ、溝底にまっすぐすえ置かれていた壺形土器の打ちかかれた底部が附近から出土した例もあり、またこの鍛冶谷・新田口遺跡新田口第1号方形周溝墓の南溝溝底から、口縁部、胴部、底部三つにわられた土器の破片が一直線に並らべてあったことからしても、一概に他の場所で破砕されたものが埋納さ

れたとは考えられない。さらに柳田康雄氏らの「周溝内に配置したものではない」とする考えは、ある特定の行為が、その発生時と、その発展段階ではかなり相違があることを考えた場合、埼玉県大宮市大宮公園遺跡（註33）同県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡鍛冶谷第1号方形周溝墓に、弥生町期の焼成後の底部穿孔土器が一定の間隔を持って配置されている例もある。しかも、これらの土器は細かに破砕されていない。さらに時代が下降して、前野町期に比定されている東京都八王子市宇津木向原遺跡例や、五領期に入って、焼成前から孔を穿けている土器を配置している千葉県野田市堤台遺跡や、埼玉県庄和町権現山遺跡（註34）などからして、底部に穴をあけて、日常什器として使用にたえられなくして方形周溝の中に配置しているのである。このように、関東地方における方形周溝墓の初期的な段階でも、また終末期的な段階でも底部に孔を穿けて配置されているのである。いいかえれば、この行為を行なった土器が本来周溝の中に入れられるところに、この方形周溝墓の姿があるのである。すなわち、方形周溝墓と底部穿孔土器の配列を切りはなすことができないものである。それにもかかわらず、土器を細かに破砕した土器があることは、底部穿孔と土器の破砕を同じように考えなければならぬ。すなわち、一種の祭礼用仮器として、破砕することによって日常什器とは区別する意味で、周溝内で破砕したものである。したがって、これが流入したものとするのは妥当でない。もし、破砕した土器を投げこんだにしても、方形周溝墓築造の概念として、周溝内に土器の配置を意識していたものと考えられ、これが、奈良県桜井茶臼山古墳にみられるような底部が穿孔された壺形土器の方形配列と密接な関係があるものと理解したい。

これまででは、鍛冶谷・新田口遺跡における周溝内での土器の在り方を中心にして、現在まで知られている各地の方形周溝墓内発見例とを関連づけて論述してきたが、ここで、鍛冶谷・新田口遺跡方形周溝墓出土土器について、若干ふれてみたい。

鍛冶谷第1号方形周溝墓溝内から発見された壺形土器は、弥生時代後期の弥生町期に比定できるものである。この期に比定されている大宮市大宮公園内の方形周溝墓から発見された壺形土器には、連続山形文が施文され、この鍛冶谷の土器より若干古くみられている。

新田口第1号方形周溝墓からは、各種の土器が出土しているが、これらの土器群は、五領Ⅱ式の範囲に入るものである。特に、台付甕形土器には、S字状口縁を有するものもある。また、大宮市下加第4号住居址（註35）で五領Ⅱ式土器と伴出した弥生的な土器も混入している。そして、鍛冶谷・新田口遺跡では、これらの土器に伴って、小型手づくね様の土器も数多く発見された。

しかし、この方形周溝墓で、特に注目できる土器は、高坏形土器である。この土器の中には、数条の沈線を有する脚部や、脚部と坏部の接合部に一本の突帯を有し、その突帯に棒状工具による刻目があるもの。脚部底が返えされ、その折り返えし部分に極めて細かい縄文をつけ、その上端に刻目を有する、従来南関東では住居址中からあまり検出されなかったものの一群がある。これらは、伊勢湾東岸から、天竜川東岸にみられる極めて地域性の強い土器であり、その地方との交流を物語る資料である。

この他、新田口第1号方形周溝墓北溝から碧玉製の管玉が出土した。溝内から土器以外のものが出土する例では、福岡県平原遺跡で玉類・鉄鏃・甕・鉄斧が発見された土壌があった（註36）。また、長野県安源寺遺跡では紡錘車形土製品（註37）、福岡県炭焼遺跡では刀子や有孔円板が出土

している（註38）。これらは、土器以外に意識的に周溝内に入れられたものである。しかし、鍛冶谷新田口遺跡出土の管玉は、周溝内覆土の上部から出土しており、意識的に入れられたものとは考えられない。すなわち、この遺跡が、旧入間川左岸の低い自然堤防上に営まれたもので、何回かの洪水を受け、封土が流され、その際に主体部に副葬されたものが、北側の溝内に流れこんだと考えたほうが妥当である。

第4節 鍛冶谷・新田口における 方形周溝墓の出現とその終末

いままで、関東地方の方形周溝墓は、弥生時代の文化と共に、東海方面からの移入であると解して論を進めてきたが、下津谷達男氏は「これらの墳墓は、各地域の弥生共同体社会から、首長のものとして、自然に成立する墳墓と解するのが妥当であろうと思われる。換言すれば、共同体それぞれの首長の姿が、この周溝墓を通して推察されることはあっても、それぞれの小地域を統合する大首長存在を見ることが出来るとか、或いは特定者の力によって、周溝墓が全国に広がったと解することは困難であろうと思われる」（註39）として、各地域における弥生時代の共同体内からの発生説を提示した。しかし、後述するところもあるが、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の新田口第1号方形周溝墓溝内で、伊勢湾東岸から、天竜川東岸に多くみられる地域性の強い特殊な土器が発見されたことは、明らかに、その地方との交流のあったことを示しているものであろう。また、長野県飯山市須多ヶ峯遺跡（註40）における、櫛描文土器の分布とも関連づけて考えることができるようである。したがって、先進地域（畿内）において、共同体社会が水田耕作による富の増大から、初期階級制社会が成立し、祭祀権を掌握した族長が権力の象徴として、滋賀県大津市南滋賀遺跡（註41）でみられるように、溝を四角にめぐらして墓域を設定した方形周溝墓をつくったのがその始めである。そして、この方形周溝墓という墓制が、櫛描文土器の分布にみられるような文化の拡大によって、畿内から漸次、東日本の初期階級制を樹立した首長の間に広まっていったものである。その速度は、長野県の安源寺（註42）や須多ヶ峯遺跡（註43）など比較的早いところもあるが、ほぼ一律になったのは、南関東における弥生町期のころである。したがって、弥生町期の方形周溝墓の存在する戸田市鍛冶谷新田口遺跡などがあることは、弥生時代の後進地域である関東地方にも、このころすでに階級制が、成立していたことを如実に物語っている。

		畿内	北陸	中部高地	東海西部	東海東部	南関東	戸田市鍛冶谷・新田口
弥生時代	中期	南滋賀						
	後期	⋮	⋮	安源寺 須多ヶ峯 +	⋮	⋮	⋮	鍛冶谷1号 +
古墳時代	前期		王山 王山・下山 王山	+		二本松 午王堂山 +	東海大・大宮 向原	+
	前半						番清水 堤台・権現山 西台 下手	新田口1・2・5号 鍛冶谷2・号5新田口3号 鍛冶谷3・4号・新田口4・6号

さて、埼玉県に弥生文化が伝播したのは、弥生時代中期初頭で、それも、県北・秩父地方・県南の三系統の異った波及経路がある（註44）と考えられている。戸田市は、明らかに県南に位置しており、その文化の系統も、南関東系の文化圏にある。県内では、中期の土器は、浦和市埼玉大学構内本村遺跡（註45）や岩槻市南遺跡（註46）などで須和田式土器が発見されている。そして、次の宮ノ台式土器を出土したのは、大宮市大和田本村遺跡（註47）がある。

しかし、この県南地域に、農耕を伴った弥生文化が積極的に入ってきたのは、弥生時代も後期に入ってからであり、弥生町期である。大宮台地周辺では、浦和市駒場鎧塚遺跡（註48）、浦和市太田窪円正寺遺跡（註49）、大宮市大宮公園内遺跡（註50）、大宮市吉野原遺跡（註51）、そして戸田市鍛冶谷・新田口遺跡や同市塙構遺跡などが、低湿地を近くに控えたところに集落が営まれた。

戸田市鍛冶谷・新田口遺跡は、自然堤防上に立地し、その南側には荒川（旧入間川）の広い沖積地を控えている。特に附近は入江状を呈しており、ここで農耕が展開されたものと考えられる。すなわち、このように地理的条件の良い所の水田を管理・運営することによって、その労働力を組織して、この地域のどの遺跡よりも卓越した集落が営まれていたものと考えられる。さらに、そこには、当然その豊かな大集落には族長が誕生し、世体共同体を卓越した農業共同体の長として、集落民を指導していったものである。さて、この集落であるが、この戸田市鍛冶谷新田口遺跡では、遺憾ながら発見することができなかつたが、大宮市吉野原遺跡でおおよその様子がわかる。

この吉野原遺跡では、3・4グループの小集団があったと考えられ、1グループが7戸であり、1戸4～5人平均として、1小集団30人前後位で、集落全体では100人前後と考えられている（註52）。また、この1グループの小集団は、ベット状遺構をもつ8.60m×7.20mの大型の住居址を中心に一辺が4.5m×5.00mの小型住居址が附随した形態をとっている。

このような、ベット状の特殊遺構をもつ住居址は、この時代では特殊な住居址であり、これが、他の住居址とは異った性格を有したものであることは容易に理解できる。ここに農業共同体内での階級の分化が明瞭に示されたものであり、この時期に、方形周溝墓の出現をみることができる。

ここで、方形周溝墓が出現したのが、大宮市大宮公園内と戸田市鍛冶谷・新田口遺跡である。すなわち、初期水田耕作に適した泥湿地を有する県南地域に弥生町期の遺跡を多く発見することができ、ここに大規模に水田を管理運営する農業共同体の族長の成長をよぎなくさせる。これが、県内で、最も古い弥生町期の方形周溝墓の分布を県南に集中させたゆえんであろう。

以上のように、弥生時代後期中葉の弥生町期に至って埼玉県内にも初期階級制社会の成立をみたのが、この方形周溝墓の存在である。戸田市鍛冶谷第1号方形周溝墓と同時期に出現したのが、大宮公園内遺跡のそれである。この両者は、時期的にみれば、それほど差のないものであるが、これらの次に出現したのが浦和市井沼方遺跡の方形周溝墓である。これら三遺跡の方形周溝墓は、それぞれ、1基づつ存在しており、静岡県二本松遺跡の11基に比較すると、まだまだ、権力の世襲化が初期的段階であり、確立までには至っていなかったものと考えられる。ところが、弥生時代後期後葉の南関東でいう前野町期になると、東京都八王子市宇津木向原遺跡や、埼玉県東松山市附川遺跡の例のように、複数の方形周溝墓が一定の方向性をもってつくられている。このことは、農業共同体内の祭祀権の世襲をあらわしており、方形周溝墓本来の形でつくられる。しかし、鍛冶谷・新田

口遺跡の方形周溝墓は、この前野町期のものは発見されない。すなわち、鍛冶谷第1号方形周溝墓に続くものが存在しないのである。このことは、鍛冶谷・新田口遺跡の壊滅をあらわしているのか、あるいは、他の場所に墓域を設定したのかかわからないが、次に出現したのが、古墳時代前期前半の五領Ⅱ式土器を多量にもち、伊勢湾東岸から、天竜川東岸に多くみられる地域性の強い特殊な土器をもっている新田口第1号方形周溝墓である。この時期になると集落の数も増大し、方形周溝墓も各所で発見されている。その方形周溝墓周溝内に配置されている底部穿孔土器も、弥生後期の既製の土器の底部を故意に欠いたものにかわって、埼玉県庄和町権現山遺跡や、千葉県野田市堤台遺跡の土器のように、焼成前穿孔の土器が現われる。この新田口第1号方形周溝墓からも若干出土している。

だが一方では、鍛冶谷第2・3・4・5号や、新田口第3・4・6号方形周溝墓のように、ほとんど土器を有しないものがあり、方形周溝墓本来の土器を溝内に配置する行為はなくなり、ただ形だけのものになってしまい、その形も、方形がくずれ、楕円形ないしは小判形を呈するものになってしまう。

この五領Ⅱ期末(4C末)には、畿内ではすでに大和政権による支配権が確立し、その勢力は、地方へ波及しだした。したがって、大和政権による祭祀権の統一が行なわれた地域では、すでに方形周溝墓の消滅をみる。東国では、千葉県の北作1号古墳が、底部穿孔土器や、副葬品として多くの土器を出土した(註53)ように、大和政権の導入はあっても、まだ方形周溝墓の伝統をのこしている点などをみても、方形周溝墓が、地域的には、その一地域の農業共同体維持のために必要かつ重要な位置をしめていたものであると思われる。したがって、大和政権への従属の遅れた地域では、かなり後まで、この葬制は残存し、荒川下流域では、桶川町熊野神社古墳(註54)が、4C末から5C初めにかけて築造された時点においても、大和政権による十分な権力の掌握はできず、周辺の農業共同体では、方形周溝墓がつくられており、鍛冶谷・新田口の方形周溝墓に代表されるように、方形という概念は若干くずれるにしても、古墳と方形周溝墓は併存していたと解せるものである。

註

1. 三友国五郎「荒川低地の開発に関する先史地理的研究」埼玉大学紀要社会科学編第13巻。
2. 塩野 博「鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報」戸田市文化財調査報告Ⅰ 埼玉県戸田市教育委員会 昭和42年。
3. 塩野 博「塙構遺跡出土の土器」鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報，戸田市文化財調査報告Ⅰ所収。
4. 浦和市内谷・中村徳吉氏蔵。
5. 浦和市教育委員会「昭和33年度文化財の調査」。
6. 浦和考古学会編「浦和・与野遺跡地名表」浦和考古学会研究調査報告第2集 昭和40年。
7. 埼玉大学考古学研究会編「埼玉大学構内本村遺跡第1次発掘調査報告」鳳翔4号 昭和42年。
8. 註6に同じ。
9. 柳田敏司「浦和市太田窪円正寺遺跡発掘概報」浦和市文化財の調査第9集 昭和38年。
10. 大護八郎・柳田敏司「大宮公園弥生式時代縦穴住居跡発掘及び復原報告書」県立文化会館 昭和31年。
11. 三友国五郎他「大宮市史 第1巻」大宮市役所 昭和43年。
12. 大場磐雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」日本考古学協会 昭和39年度大会研究発表要旨 昭和39年。
大場磐雄「方形周溝墓」日本の考古学 弥生時代月報 昭和40年。
13. 註10に同じ。なお、この報告書には、硬玉製白玉とあるが、筆者らの実見によるとガラス製丸玉である。
14. 高橋 桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓溝調査略報」考古学雑誌第51巻第3号，昭和41年。
15. 原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報」福岡県文化財調査報告書第33集 昭和40年。
16. 吉岡康暢他「能美古墳群調査概報」石川県能美郡寺井町辰口町教育委員会 昭和43年。
17. 斎藤 優他「福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群」鯖江市教育委員会 昭和42年。
18. 金井塚良一「比企地方出土の底部穿孔土器について」台地研究NO.18. 昭和43年。
19. 註12に同じ。
20. 岡本 勇「横浜市域北部埋蔵文化財分布調査概報朝光寺A地区遺跡第一次発掘調査略報」横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会 昭和43年。
21. 小野真一，山内昭二「沼津市二本松遺跡発掘調査概報」静岡県文化財調査報告書第8集 昭和43年。
22. 内藤 晃，市原寿文「清水市午王堂山遺跡及び午王山第1号墳及び第2号墳発掘調査概報」静岡県埋蔵文化財要覧Ⅰ 昭和41年。
23. 註16に同じ。
24. 小出義治「祭祀一方形周溝墓一」日本の考古学Ⅴ 河出書房刊 昭和41年。

25. 昭和41年10月調査。
26. 下津谷達男「野田市堤台遺跡」上代文化35. 国学院大学考古学会刊 昭和40年。
27. 茂木雅博「古代古墳丘構築論—関東地方大形古墳封土の発生について—」古代学研究52 昭和43年。
28. 註24に同じ。
29. 註11に同じ。
30. 小沢国平氏の御教示による。
31. 小出義治「王山・長泉寺山古墳群—出土土器の考察—」鯖江市教育委員会 昭和42年。
32. 柳田康雄他「炭焼古墳群—筑紫郡那珂川町大字仲所在方形周溝墓の調査—」福岡県文化財調査報告書第37集 昭和43年。
33. 註10に同じ。
34. 横川好富「北葛飾郡庄和村権現山遺跡」台地研究NO.13 昭和38年。
35. 塩野 博「第4号住居址報告書」下加遺跡, 大宮市教育委員会刊所収 昭和40年。
36. 註15に同じ。
37. 桐原 健他「海戸・安源寺—長野県中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告—」長野考古学会 昭和42年。
38. 註32に同じ。
39. 下津谷達男「方形周溝墓とその提起する諸問題」歴史教育第15巻第3号 昭和42年。
40. 註14に同じ。
41. 柴田 実, 田辺昭三「大津市南滋賀遺跡調査概報」大津市教育委員会 昭和34年。
42. 註37に同じ。
43. 註14に同じ。
44. 吉川国男「秩父市大沼遺跡の弥生式土器について」埼玉考古第6号 昭和43年。
45. 註7に同じ。
46. 安岡路洋氏の御教示による。
47. 註11に同じ。
48. 浦和市教育委員会編「よろい塚の発掘調査」第10集, 浦和市教育委員会 昭和39年。
49. 註9に同じ。
50. 註10に同じ。
51. 註11に同じ。
52. 註11に同じ。
53. 千葉県教育委員会「印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)」昭和35年。
54. 村井崑雄「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」考古学雑誌第41巻3号



1 鍛冶谷・新田口遺跡の遠景



2 鍛冶谷・新田口遺跡の近景

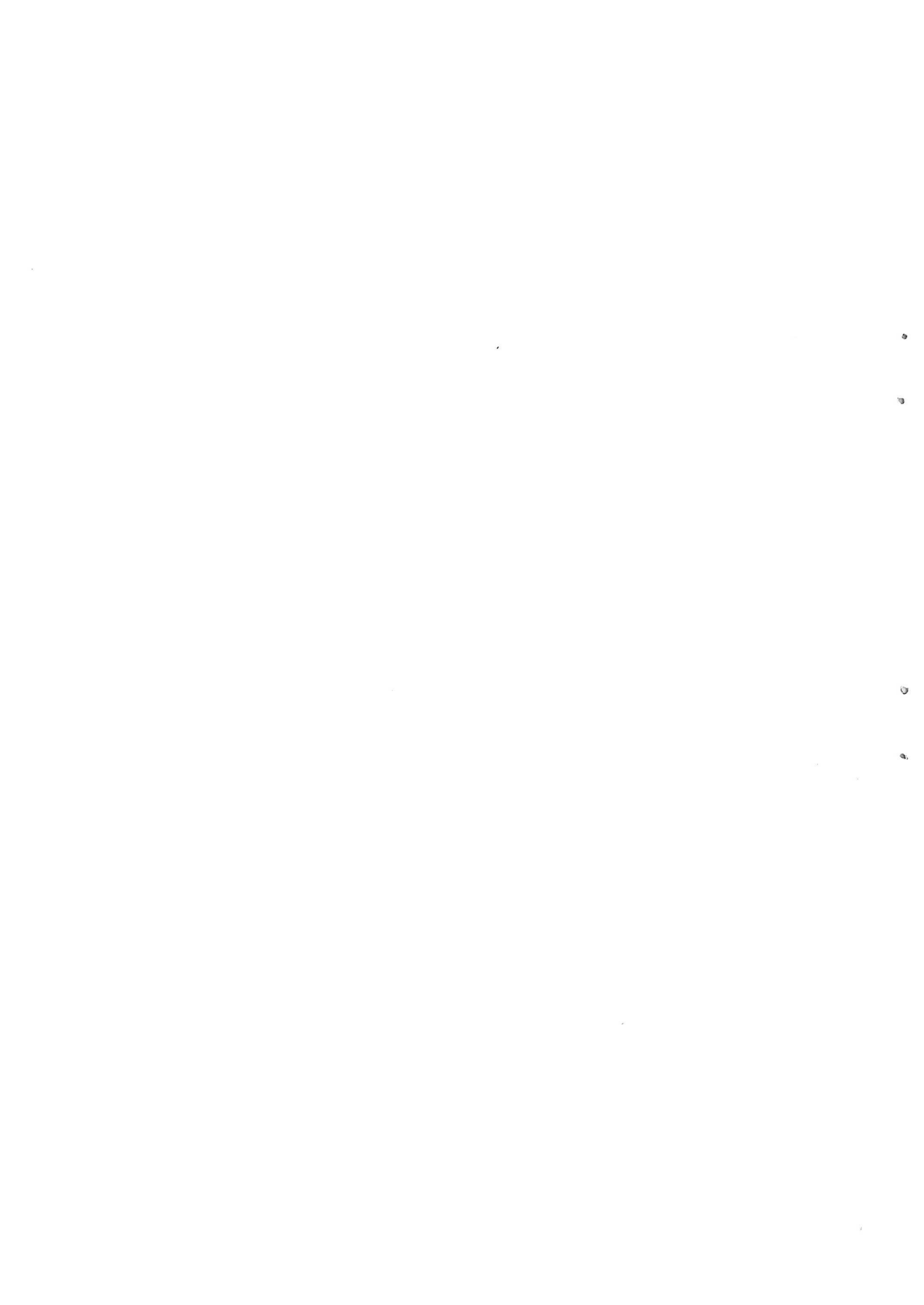


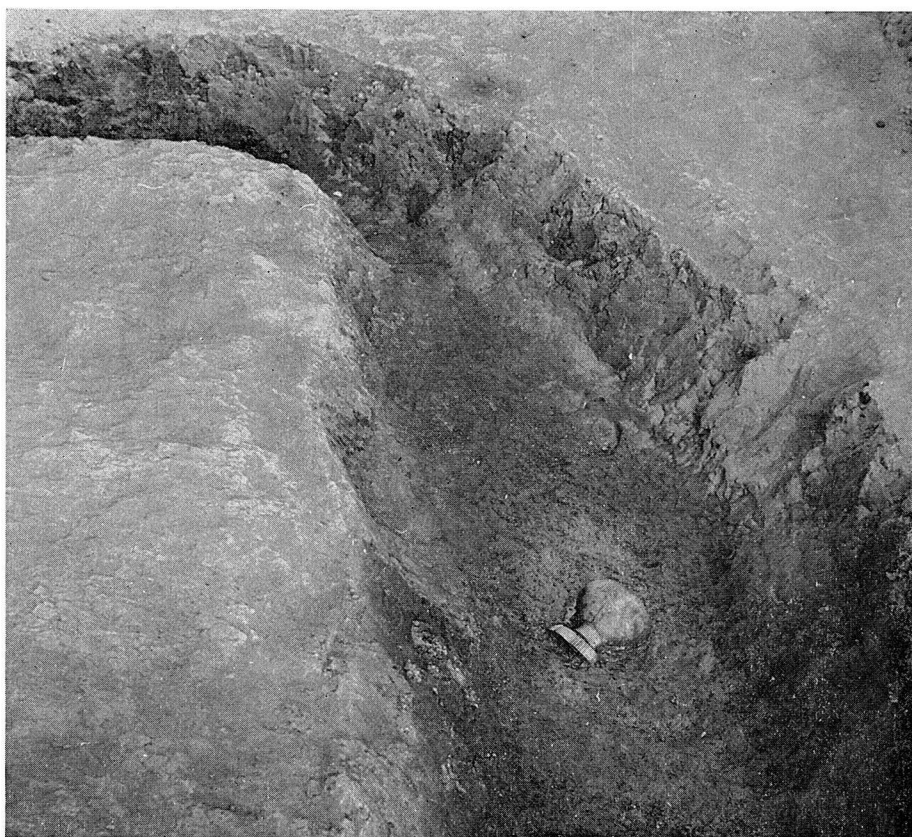


1 第1・2・3号方形周溝墓

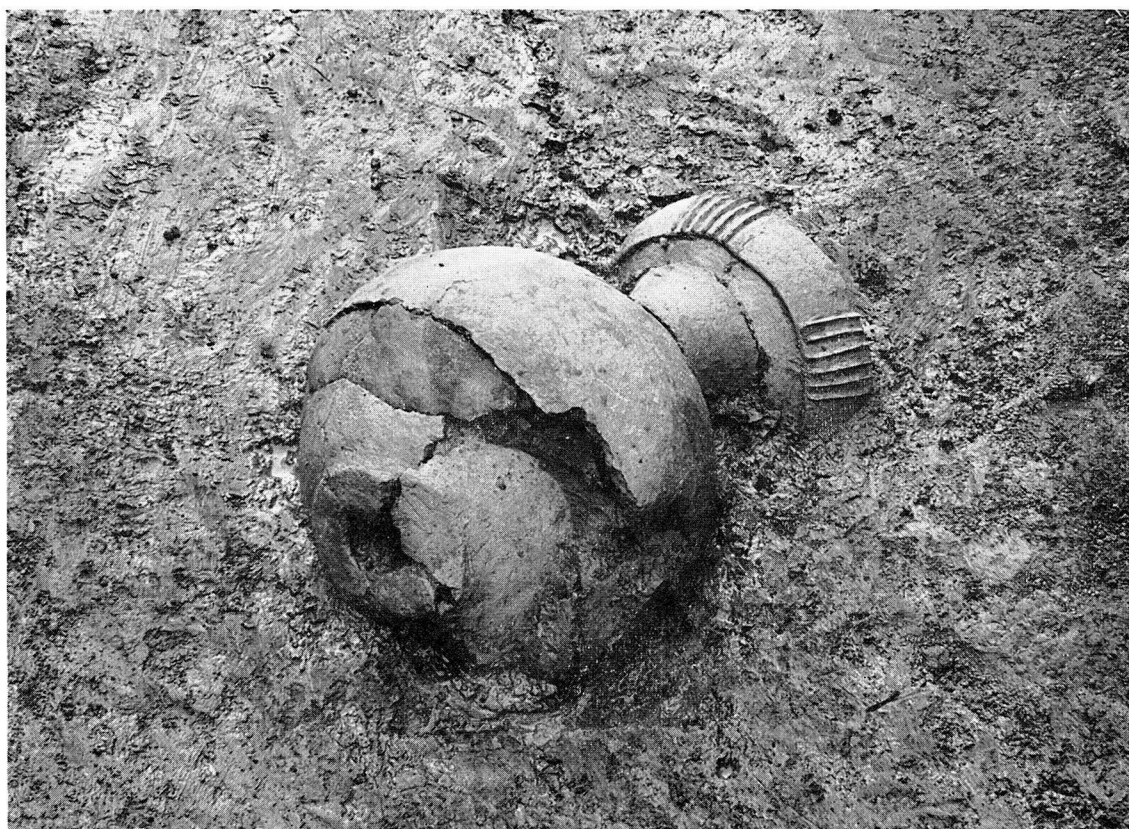


2 第1号方形周溝墓 (南から)

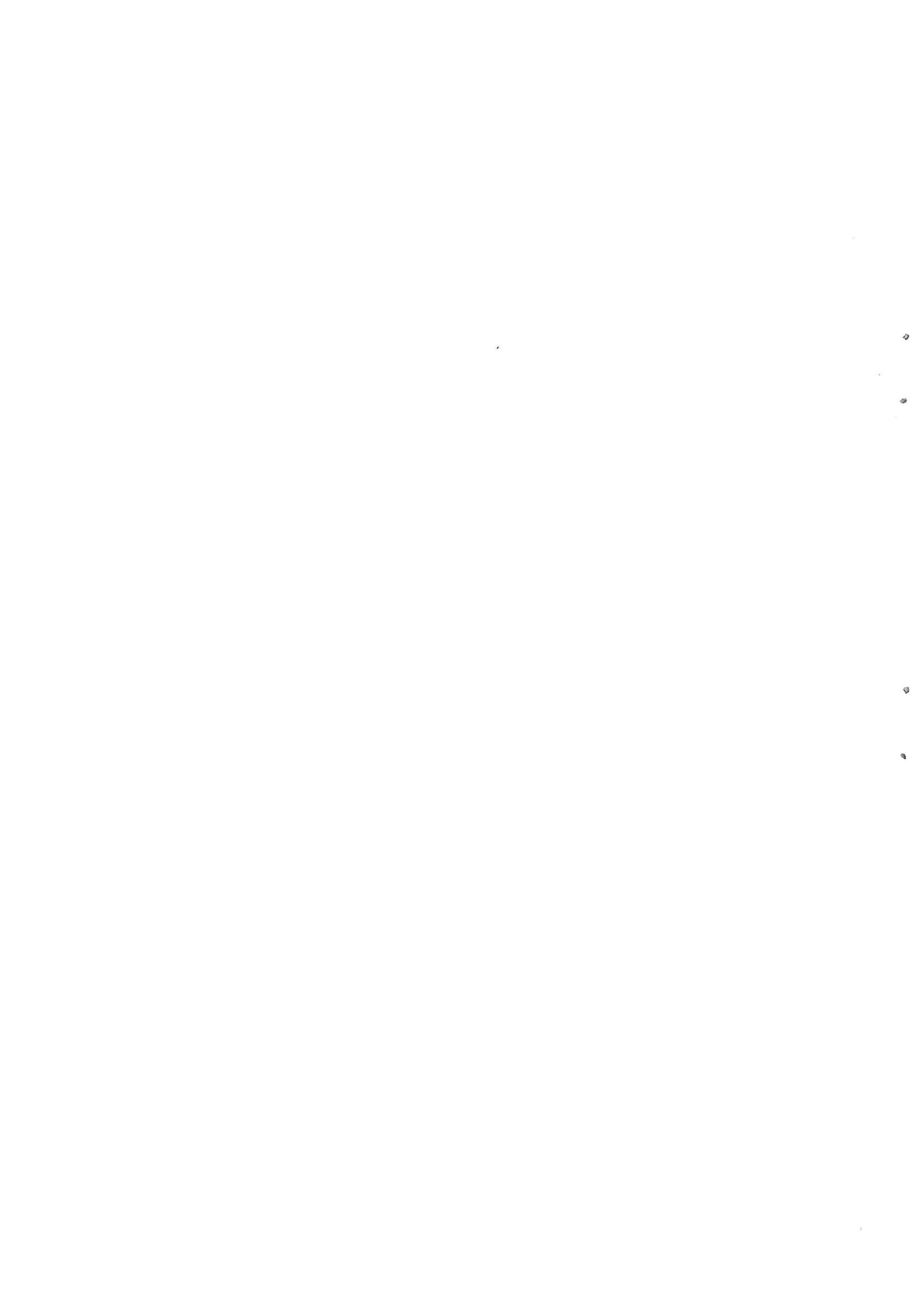




1 第1号方形周溝墓南溝内土器出土状態



2 第1号方形周溝墓南溝内土器出土状態（近写）

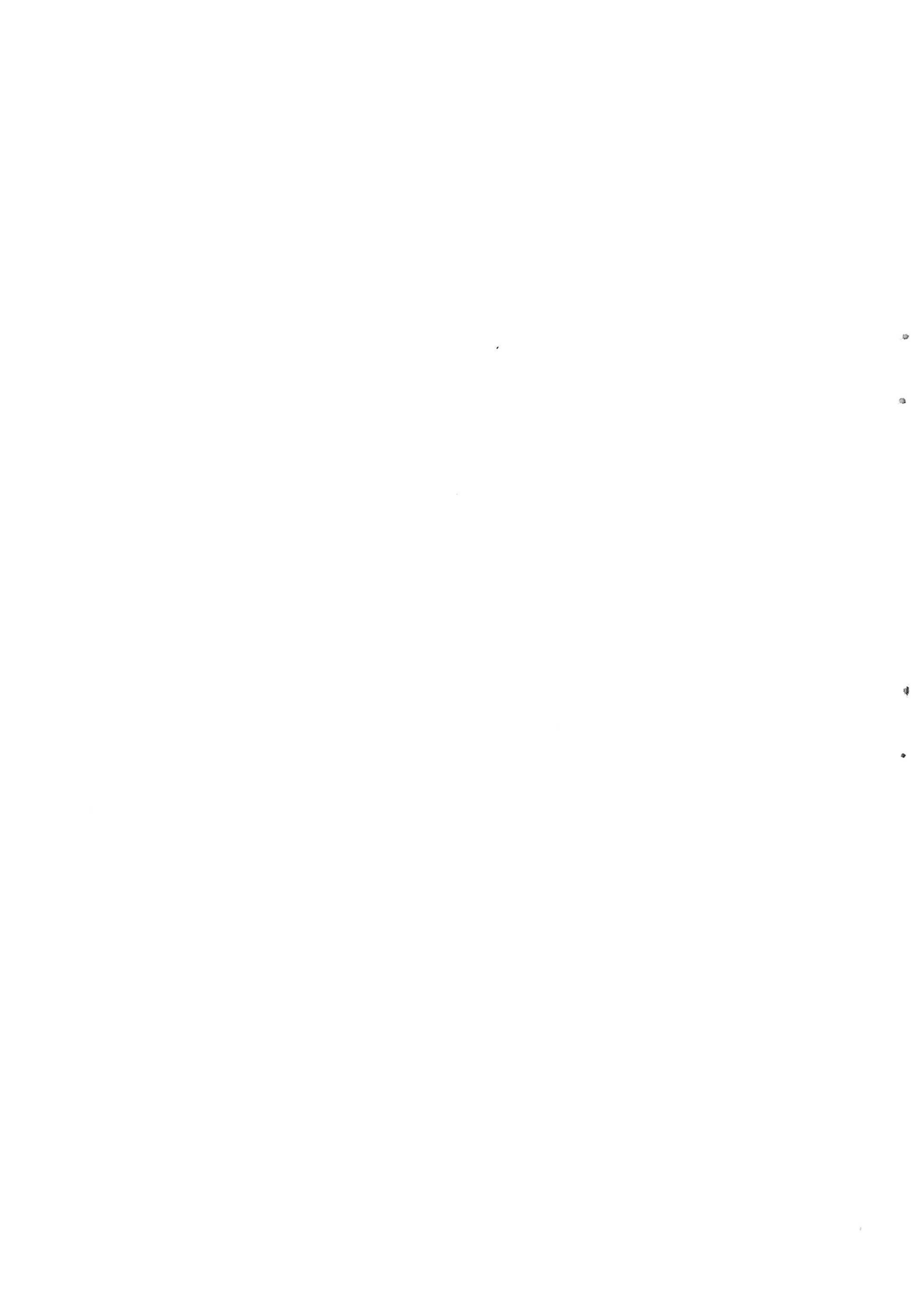




1 第2号方形周溝墓



2 第3号方形周溝墓

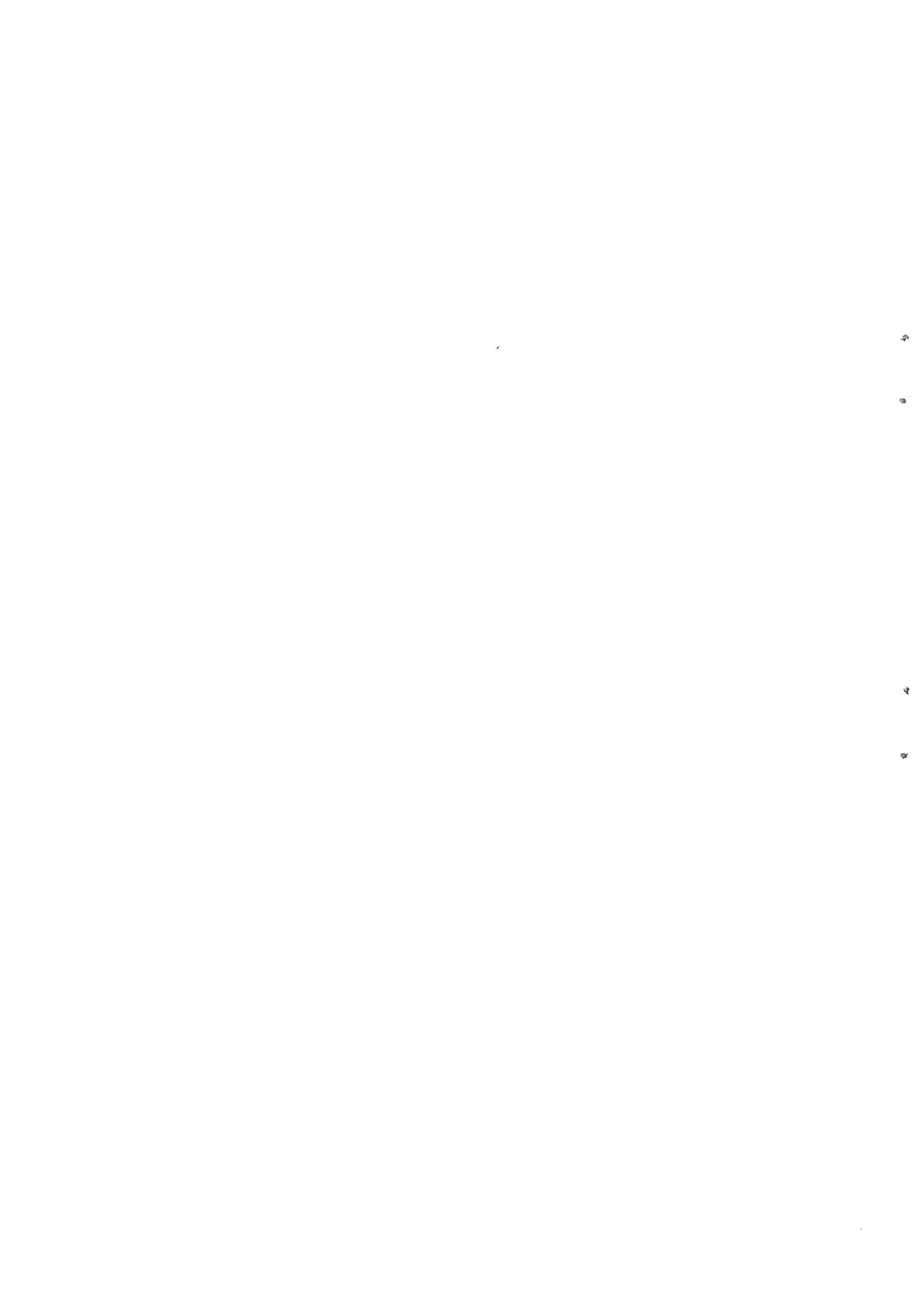




1 第4号方形周溝墓（北方から）



2 第4号方形周溝墓（西方から）





1 第5号方形周溝墓（南方から）



2 第5号方形周溝墓（西方から）





1 第1号方形周溝墓（南方から）

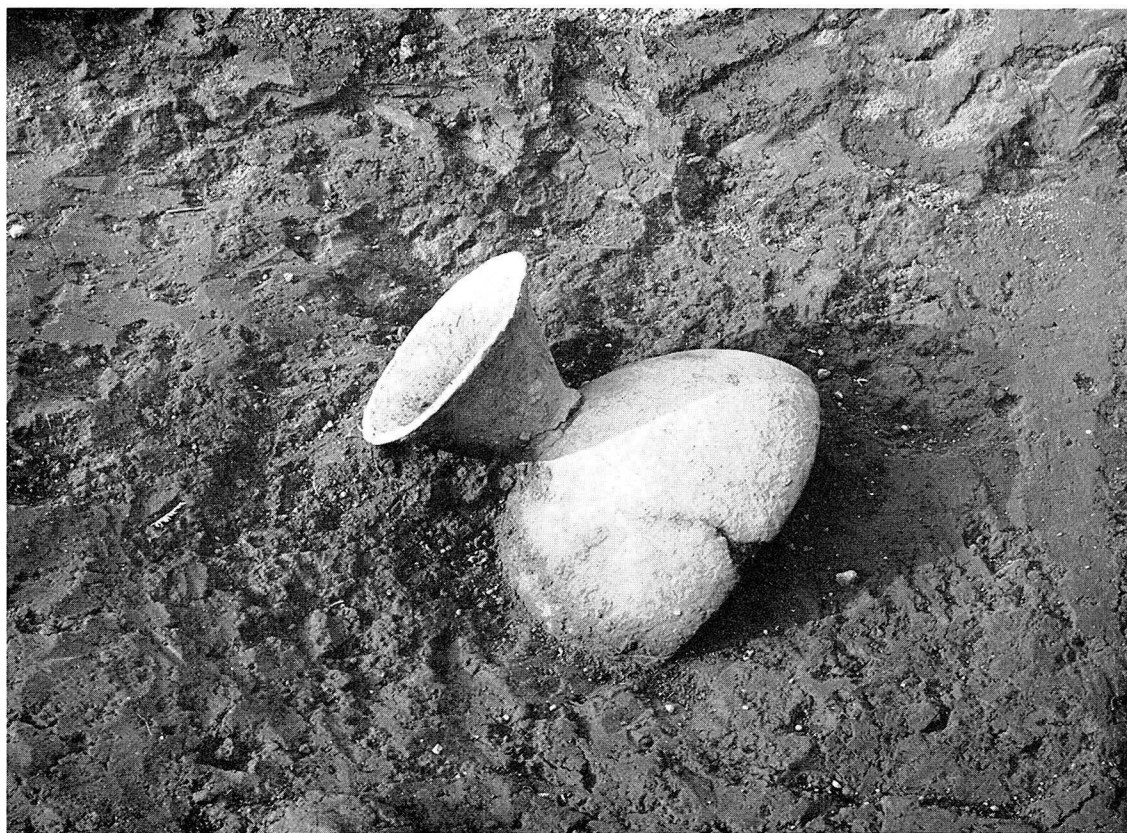


2 第1号方形周溝墓西溝溝底



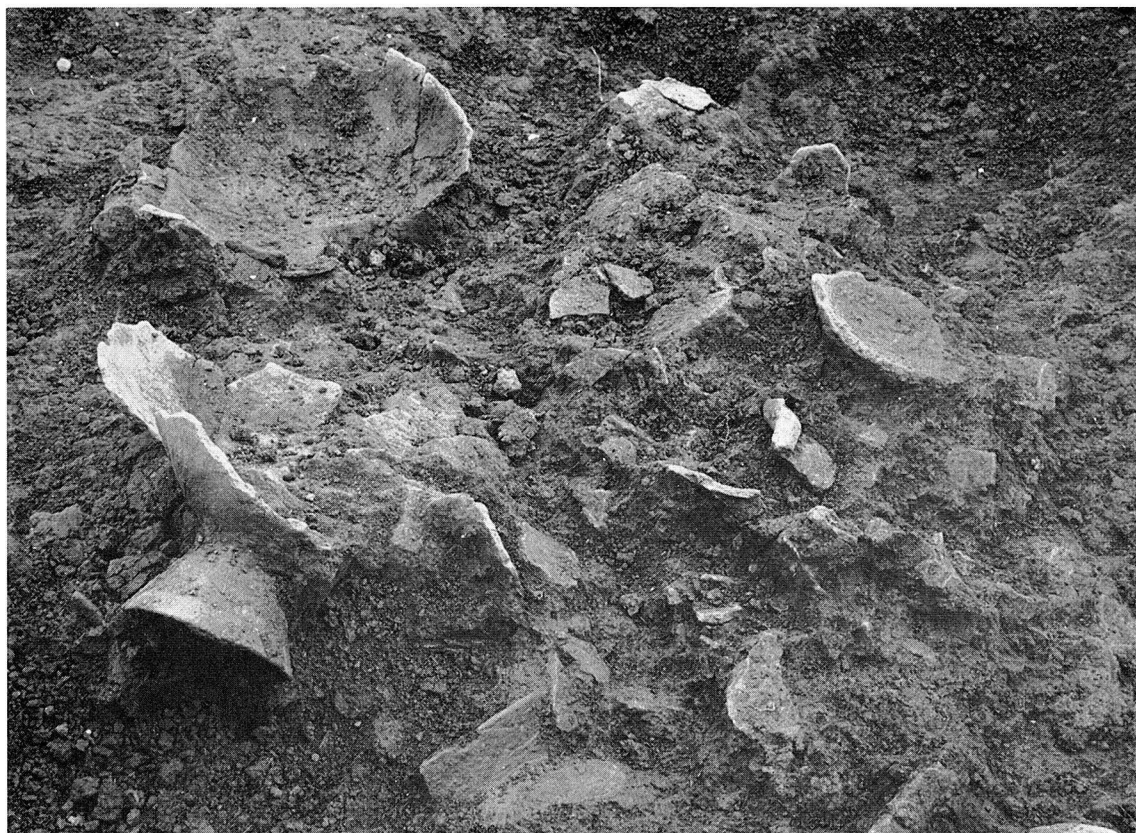


1 第1号方形周溝墓西溝断面



2 第1号方形周溝墓溝内高坏出土状態



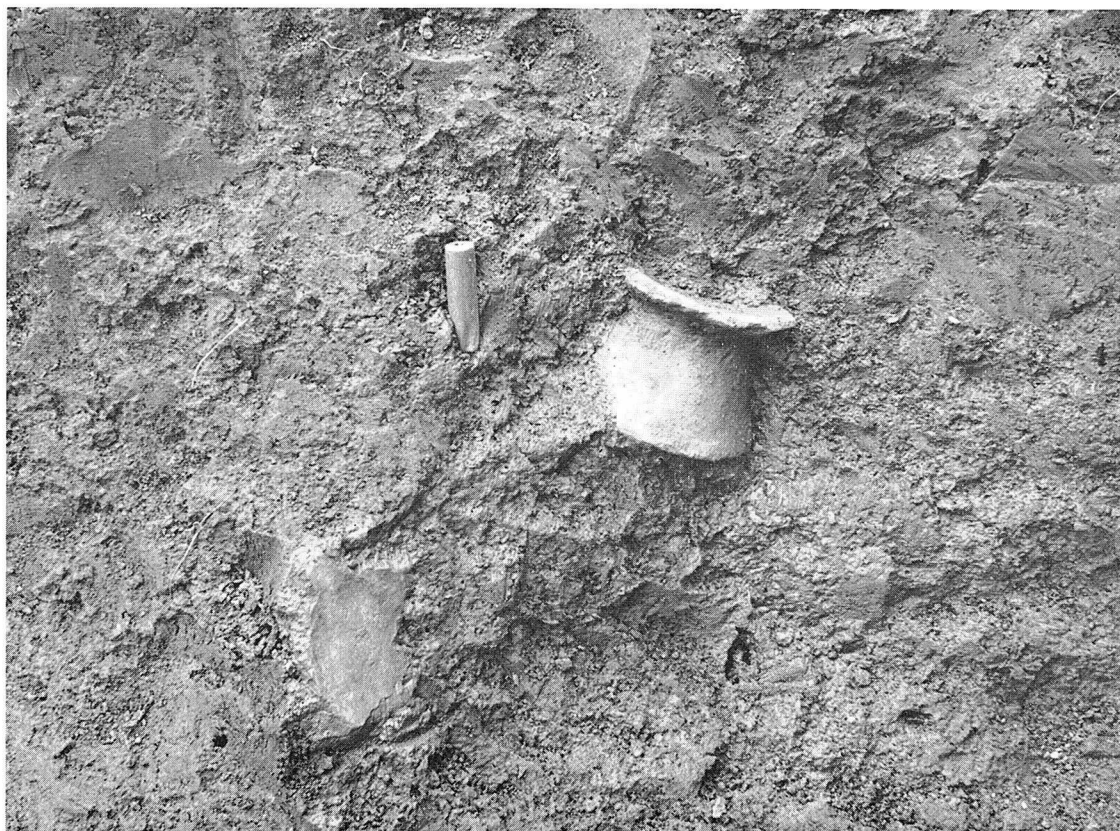


1 第1号方形周溝墓溝内台付甕形土器出土状態



2 第1号方形周溝墓溝内壺形土器出土状態





1 第1号方形周溝墓溝内管玉出土状態



2 第1号方形周溝墓溝内器台出土状態





1 第1号(左)と第2号(右)方形周溝墓の断面



2 第2号方形周溝墓(右)





1 第3号・5号・6号方形周溝墓の切り合い

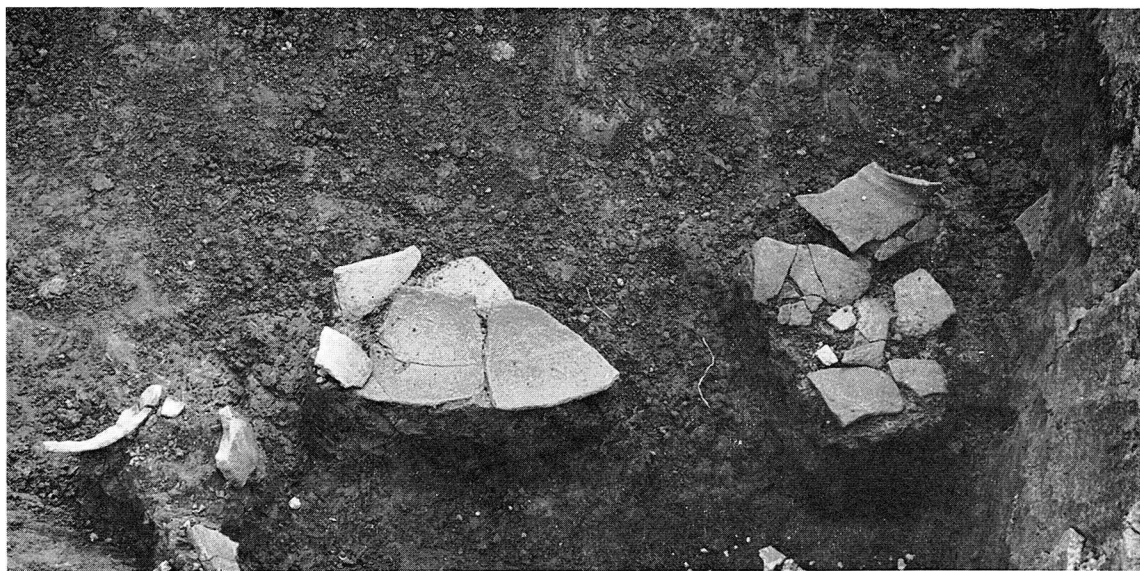


2 第3号と第6号方形周溝墓の切り合い



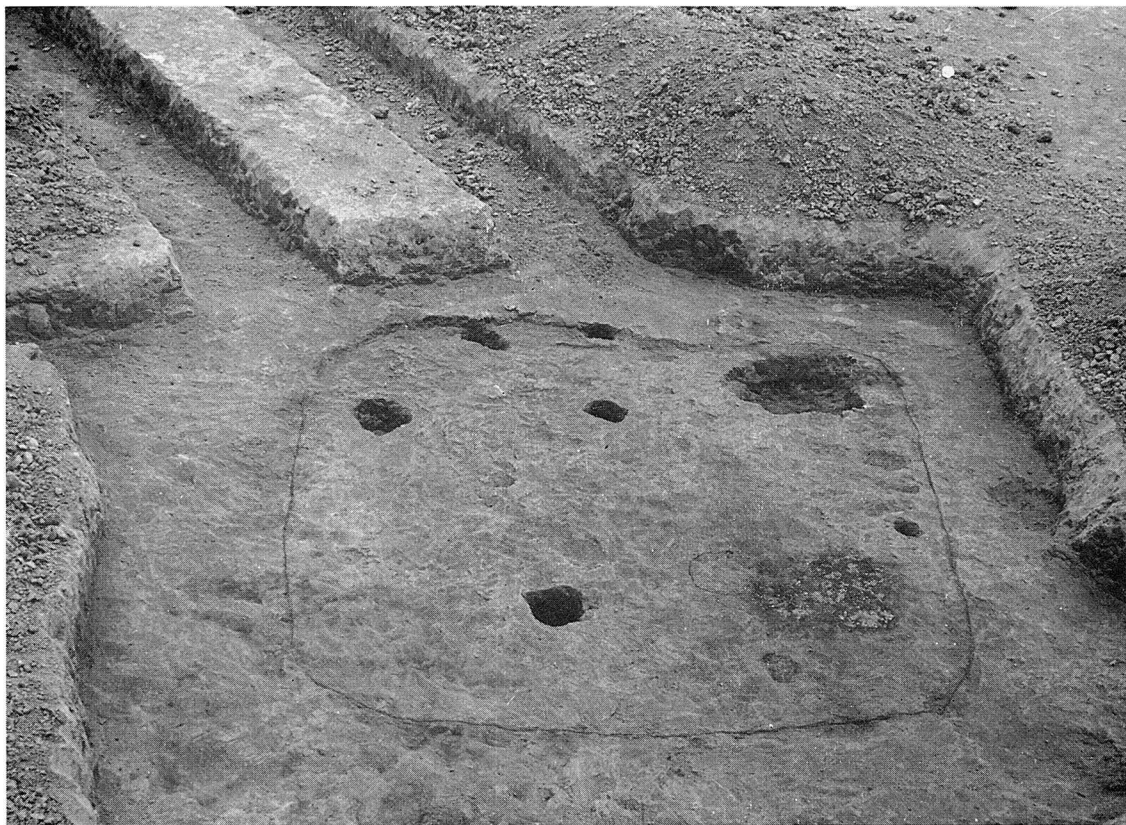


1 第4号方形周溝墓



2 第4号方形周溝墓溝内土器出土状態



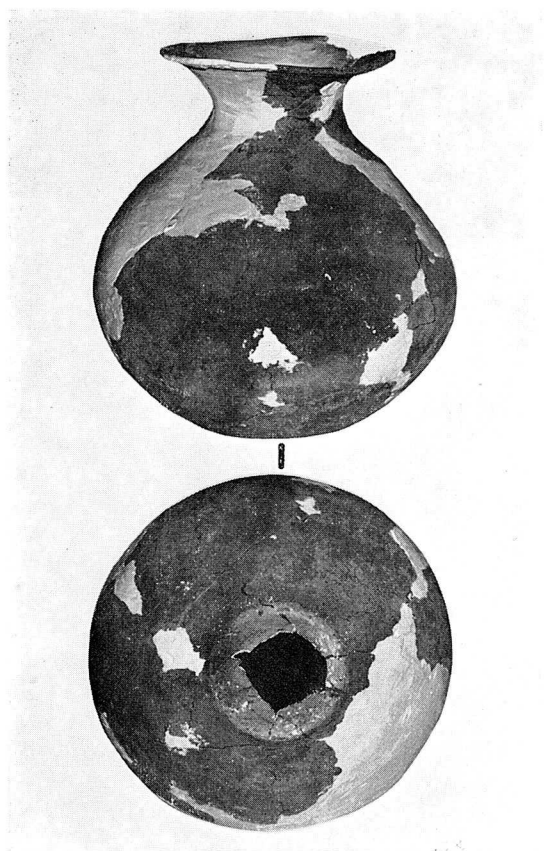


1 第1号住居址

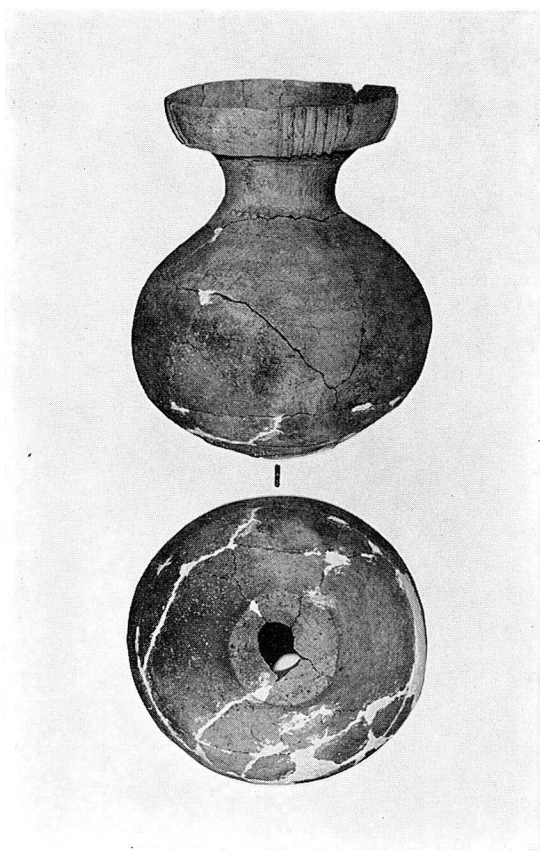


2 第1号住居址コシキ形土器出土状態

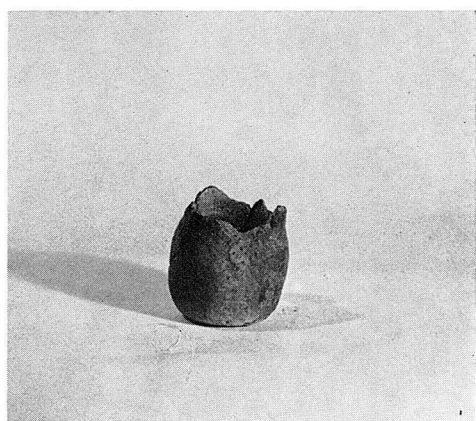




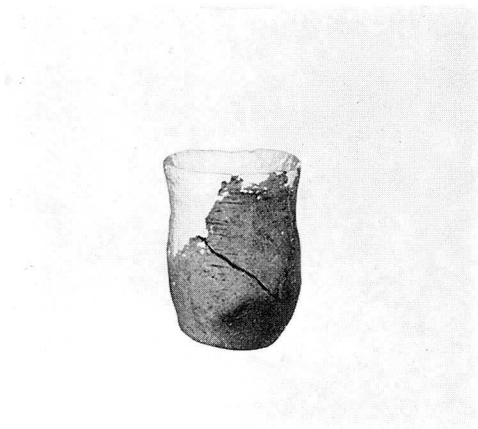
1



2



3



4

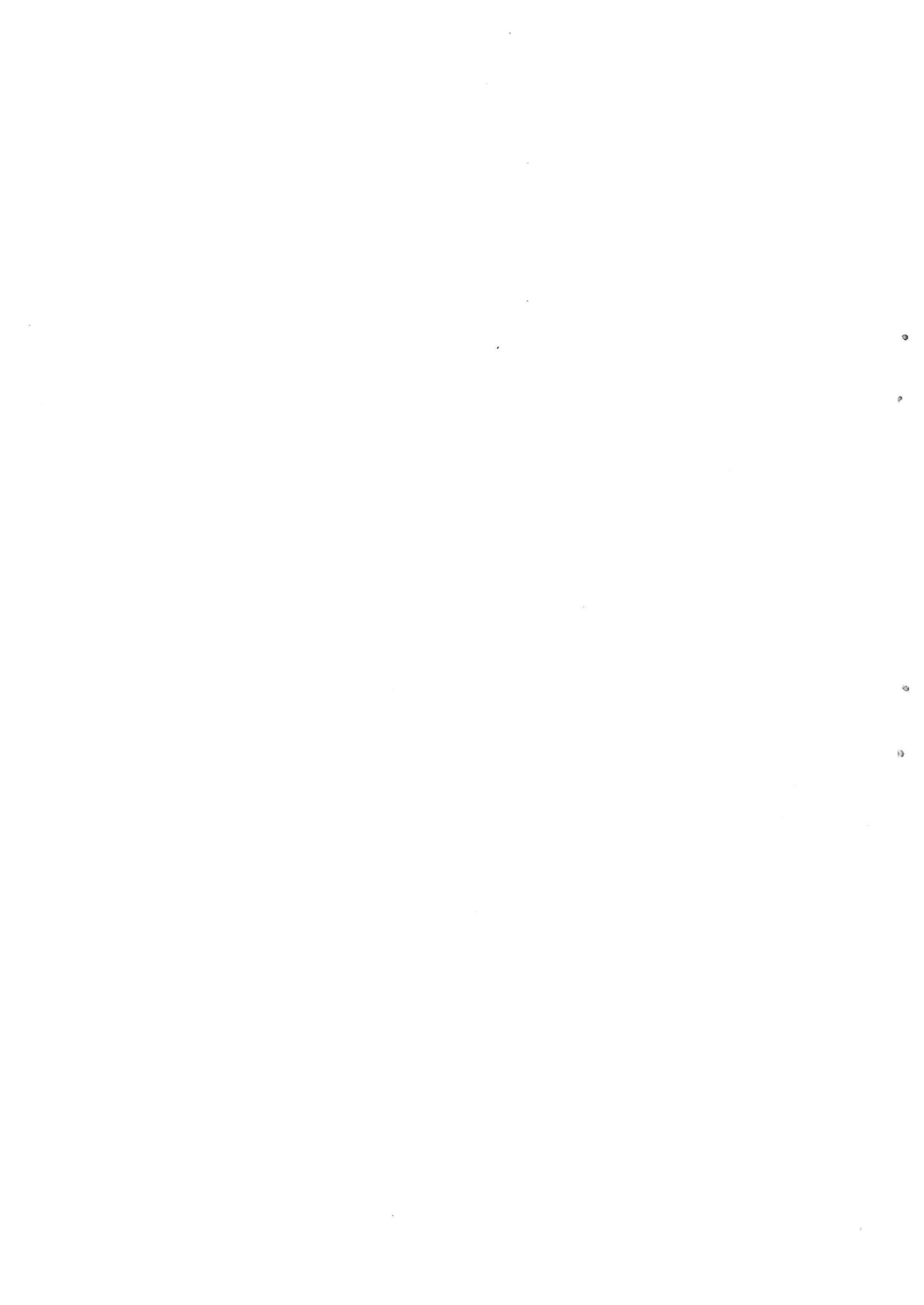


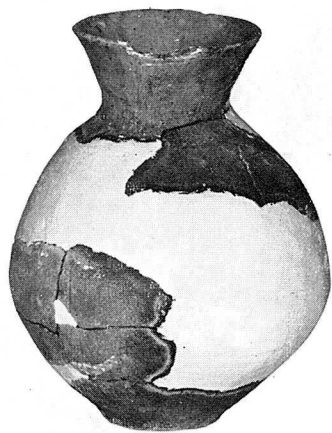
5



6

(1・2 鍛冶谷第1号方形周溝墓出土土器)
(3～6 新田口第1号方形周溝墓出土土器)

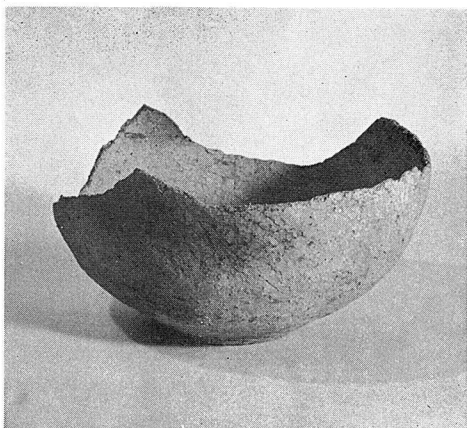




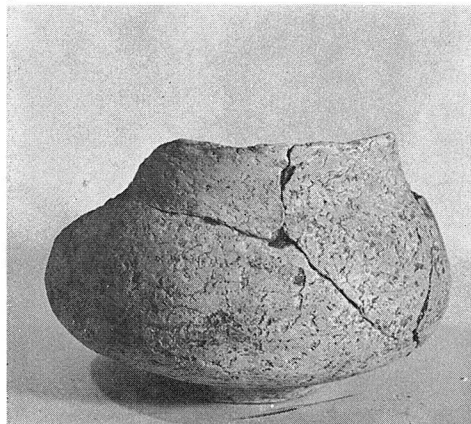
1



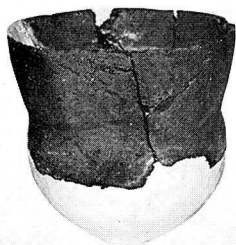
2



3



4



5



6



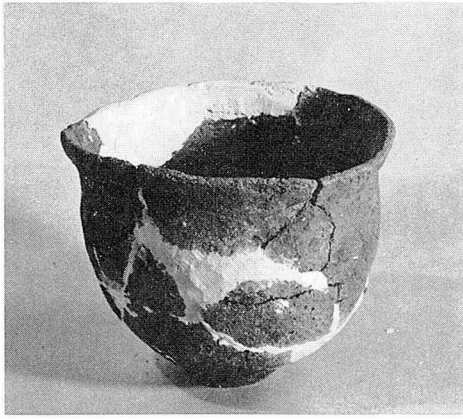
7



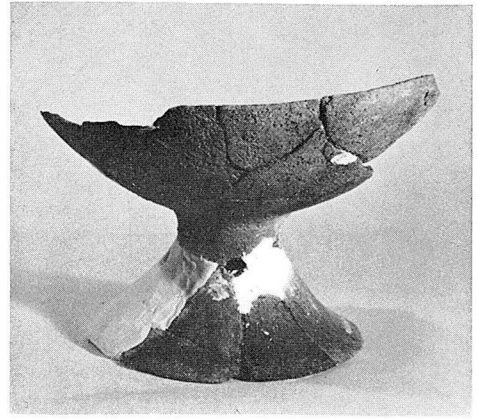
8

(1~7 新田口第1号方形周溝墓出土土器)
(8 新田口第2号方形周溝墓出土土器)

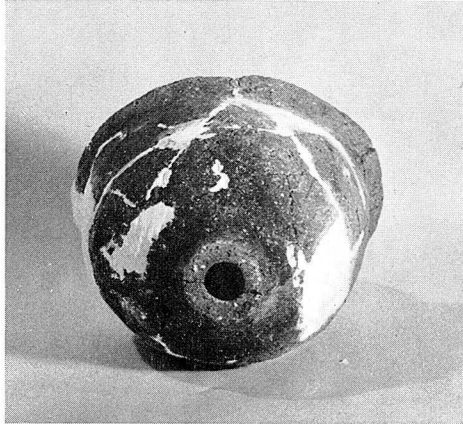




1



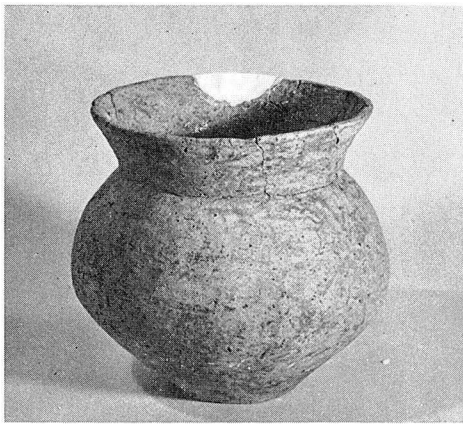
5



2



6



3



4



7

(1 ~ 5 新田口第1号住居址出土土器
6 新田口A溝発見土器
7 新田口第1号方形周溝墓溝内出土管玉)



遺跡名	所在地	立地	基数	墳丘	平面形	遺構		ピット	陸橋	主体部の 形態・規模	出土遺物		穿孔 焼成 前	土器 焼成 後	煮沸 土器	スス 付着	集落	土器型式	備考 (文献)					
						規模(m)	溝(深さ)(m)				溝内	主体部内												
32 大庭築山	藤沢市大庭築山	台地	2								壺						近接		寺田兼方氏の御教示による					
33 安源寺22号 23号	長野県中野市安源寺	丘陵	2	不明	○	0.4×2.4	0.2~0.4(0.15)		無	土壇1.1×0.9(0.2)	小形無頸壺1 紡錘車状土製 品、高坏							箱清水式	桐原健他「海戸安源寺一長野県中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告」昭42					
34 須多ヶ峯1号 2号	飯山市飯山須多ヶ峯	丘陵	2	有?	□	5.1× 5.5×4.8	0.6(0.1~0.15) 0.45~0.72(0.2)	7 4	無 有	土壇2.9×1.85(0.22)	小形台付甕2 小形甕1高(坏1)	硬玉製勾玉 鉄釧		有				箱清水式	高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墳墓調査略報」考古学雑誌第51巻第3号 昭41					
35 城之内	更埴市城之内																							
36 東熊堂	静岡県沼津市東熊堂																		小野真一他「沼津市二本松遺跡発掘調査概報」					
37 二本松1号 2号 3号 4号 5号 6号 7号 8号 9号 10号 11号	二本松	丘陵	11	不明	□	17.3×13.2	(1.5)												小野真一他「沼津市二本松遺跡発掘調査概報」静岡県文化財協会編 昭43					
38 目黒身	目黒身																	近接	小野真一他「沼津市目黒身遺跡の集落址」日本考古学協会昭和43年度研究発表要旨 昭43					
39 午王堂山1号 2号	清水市庵原午王堂山	台地	2	不明	□	8.0×7.0	0.6~0.7(0.5)		有									曲金式	内藤晃他「清水市午王堂山遺跡及び午王堂山第1号墳及び第2号墳発掘調査概報」静岡県岡蔵文化財要覧 昭41					
40 芝本第三地区	浜松市芝本第三地区	台地		不明			1.8(0.35) 1.3(0.5) 3.0(1.3) 1.8(0.5) 1.4(0.3)										近接	寄道式	下津谷達男氏御教示による					
41 原目山1号 2号 3号	福井県福井市原目山	尾根	3																甘粕健・大塚初重他「福井市原目山古墳群の調査」日本考古学協会第33回発表要旨 昭42					
42 下山4号墓	下江守町下山	丘陵	1	有			2.5(0.3)		無	土壇1.85×4.5								林Ⅱ式	沼弘「福井市下山遺跡発掘調査報告」考古福井1号 昭43					
43 朝日山	丹生郡朝日山町	丘陵																	水野九右衛門氏御教示による					
44 王山1号 2号 3号 4号 5号 6号 7号 9号 25号	鯖江市王山	台地	9	有	□	11.0×8.3	2.0(1.0)	無	有	土壇3.5×0.7 (0.25)	高坏1壺							月影式	大場磐雄・斎藤優他「王山長泉寺山古墳群」鯖江市教育委員会 昭42					
					□	12.0×																		
					□	10.0×10.0	18.~09.(1.35)		無	土壇3.15×2.1	壺高坏器台 土器片													
					□	11.7×11.7	1.0~1.3		無	土壇0.8×2.6(0.6)														
					□	11.4×11.4	1.0~1.4		無	土壇1.05×0.25(0.5)														
					□	12.5×8.3	0.75~1.3 (0.34~0.5)		無	土壇5×1.5	壺高坏													
					□	10.7×10.4	1.05~1.35(0.46~ 0.74)		無	土壇3.18×1.54 (0.84)	壺													
					□	16.7×15.4	1.5(0.6)		無	土壇3.85×2.0(0.57)	土器片								ニッ屋Ⅰ式					
45 長泉寺山2号 3号 4号 5号	鯖江市長泉寺山	台地	4	有	□			無	無										同上					
					□	19.3×17.4	2.6(1.5)	無	無	土壇6×3.6(0.2)	土器片 高坏								ニッ屋Ⅱ式 ニッ屋Ⅰ式					
46 八王子山	武生市八王子山	台地																	月影式					
47 西山6号 12号	石川県能美郡辰口町西山	丘陵	2	有	○	12.3×	1.3~1.9	無	無	土壇1.25×1.00(0.1) 土壇2.1.86×1.84(1.02) 土壇3.2.54×1.32(0.36) 土壇4.1.54×1.27(0.5) 土壇5.1.45×0.65(0.15) 土壇5.2.53×1.2(0.23) 土壇1.2.81×1.005(0.4) 土壇2.1.4×0.71(0.20) 土壇5.2.25×0.32(0.35) 土壇6.2.08×0.3(0.61) 土壇8.2.35×1.75(1.0)	高坏、土器片 朱・木炭・鉄器片 朱木炭・土器片 朱・木炭・土器片 朱・木炭・土器片 木炭・土器片 朱・木炭・土器片 土器片 木炭・土器片 朱・木炭・土器片													吉岡康暢他「能美古墳群調査概報」石川県能美郡寺井町辰口町教育委員会 昭43

附表 1 方形周溝墓発見遺跡地名及び遺跡分析表 (2)

遺跡名	所在地	立地	基数	墳丘	平面形	遺構		ピット	陸橋	主体部の 形態・規模	出土遺物		穿孔 焼成 前	土器 焼成 後	煮沸 土器	スス 附着	集落	土器型式	備考 (文献)	
						規模(m)	溝(深さ)(m)				溝内	主体部内								
47										土壇9 1.8×1.26(0.58) 土壇11 土壇12 1.95×0.12(0.71) 土壇13 1.17×1.02(0.68)										
48	和田山11号	〃 〃 市井町和田山	丘陵	1			14.0×?	3.2(1.5)											壺	同上
49	太閤山	富山県射水郡小杉町	丘陵	1	不明	□														
50	大谷A号 B号	三重県四日市市生桑町	台地	2	不明	□	14.0×15.5 16.0×20.0	25. (0.4) 3.5 (0.7)	有	有									近接	小島俊彰氏御教示による 小玉道明他「四日市市生桑町大谷遺跡発掘調査報告書」 四日市市教育委員会 昭34
51	南滋賀	滋賀県大津市南滋賀	台地	1	不明	□	10. . ×10.0												壺 甕	柴田実・田辺正三「大津市南滋賀遺跡調査概報」大津市教育委員会 昭34
52	平城宮址内	奈良県奈良市	低地	4	不明	□														奈良国立文化財研究所「昭和39年度平城京跡発掘調査概要」 奈良国立文化財研究年報 昭40
53	〃	〃	低地		不明	□														
54	安満	大阪府高槻市安満																	壺 7	
55	加茂	兵庫県川西市加茂	低地	1	不明	□													畿内第三様式	石野博信氏御教示による
56	田能1号 2号	〃 尼ヶ崎市田能	低地	2	不明	□	14.0×13.0 17.5×13.0	0.9~1.6(0.7) 1.5~2.7(10.3)											小形丸底壺	村川行弘「田能遺跡概報」尼ヶ崎市教育委員会 昭42
57	勝部	〃 〃 勝部	低地																	石野博信氏御教示
58	芋岡山	岡山県倉敷市芋岡山	丘陵				1.0(1.0)												甕壺高坏器台	関壁忠彦他「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」弥生時代 後期の墳墓群」倉敷考古館研究報告第3号 昭43
59	向山	〃 吉備郡高松町向山																		
60	四十貴	広島県三次市四十貴																		
61	吉田	〃 〃 吉田																		
62	平原1号 2号	福岡県糸島郡前原町平原	台地	2	有	□	18.0×14.0	(0.5)	有	土壇(木棺) 4.5×3.5	小玉(300), 甕 鉄鏝, 埴	ガラス玉, 瑪瑙 管玉(30), ガラス 製小玉ガラス 製勾玉(3) 琥珀丸玉(600). 素環頭 太刀(1). 鉄 刀子(1)鏡								原田大六「福岡県平原弥生古墳の問題点」古代学研究 昭41
63	炭焼3号 4号 5号	〃 筑紫郡那珂川町	丘陵	3	不明	〃				土壇 石蓋土壇	高坏 刀子 有孔円盤	鉄釧, 鉄鏝								柳田康雄他「炭焼古墳群」福岡県教育委員会 昭43
64	年見川	宮崎県都城市年見川	自然提防	1	不明	□													甕 埴	栗原文蔵氏御教示による
65	秋永	熊本県上益城郡益城町		1																
66	東原	〃 八代郡竜北村高塚	台地	1		□	20.0×18.0	0.9(0.7~0.9)											埴	花岡興輝「八代郡竜北村における土師器埋没遺跡について」 熊本史学第11号 昭32
67	浦佐	新潟県南魚沼郡浦佐		1																
68	大宰府	福岡県大宰府町																		柳田康雄氏御教示による
69	東庄内町	三重県鈴鹿市東庄内町		3																考古学ジャーナル(考古コース) 昭43(13)

※ この附表1は、伊藤和彦が昭和44年1月31日現在で集成したものである。
これを集成するにあたって、未発表遺跡の御教示をいただいた諸氏に、厚く御礼申し上げます。
なお、遺跡No.は、附表2と同じである。

附表 2 方形周溝墓發見遺跡分布圖





昭和44年3月25日印刷
昭和44年3月30日発行

戸田市文化財調査報告Ⅱ

鍛冶谷・新田口遺跡
方形周溝墓群の調査

発行 埼玉県戸田市教育委員会
印刷 (資) 秀飯舎印刷所

